
ジプシーダンス

国沢裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジプシーダンス

【NZコード】

N2035D

【作者名】

国沢裕

【あらすじ】

ある日、絡まれている女の子を通りすがりに助けた俺だが、その頃から突然、正体不明の視線に付きまとわれだした。一目惚れでもした恋する女の子の視線だなんて、能天気な友人は言うが、表と裏、両方の世界を生きる俺には死活問題。SF小説シリーズ3作目となる「サイキックバトル編」。

チャプター・1 ジプシー（前書き）

この小説では、基本的にチャプター後に書かれている人物による、一人称交代方式をとっています。

チャプター・1 ジプシー

繁華街の小さな書店を出た時、俺は、かすかな叫び声を聞いた気がした。

立ち止まって辺りを見回す。夕方の、学生と会社員と買い物客が溢れた街。確かに聞こえたような気がするが、耳に届いていないのか、街行く人々は誰も気にする様子もない。

ふと、書店の横の細い路地が眼に入った。近くへ歩いて行き、路地の先を覗く。

一瞬だが路地の向こう側で、一人の女の子と、彼女を取り囲む男達数人の姿が見えて消えた。

あれか。

俺はどうしようか迷った。ひどい話だが、今は学校帰りだ。普段の俺は、制服を着たままで厄介事に首を突っ込む事をしない。

しかし、今日は何故か気が向いた。

路地の中を通り、男達の方へと歩いて行く。

そう言えども、制服の襟の校章が気になつたが、まあいかと考える。そこまで連中は見ないだろう。

メインロードから一本隣の道は店が並んでいない為か、普段から人通りがない。

路地から顔を出して覗いてみると、一人の女の子が見えた。あれは……近くの県立高校の制服だ。まあ、ちょっとばかり可愛い感じだが、ごくごく普通の平凡そうな女の子だ。

取り囲んでいる男達は、四人。全員が思い思いに髪を染めて、ピアスや指輪などの装飾品をいくつかしている。全体に着崩した感じの雰囲気があるが、一人だけが付けている校章にも、連中が一応お

そろいで着ている制服にも見覚えがない。この辺りは土地柄、時々修学旅行生がはぐれて散策する事がある。その類か。

女の子の方はもちろんだが、男達の方も、少々の事では後腐れないだろ？

俺は、眼鏡を外しながら近づいて行った。

「何だあ？ 何みてんだよ！」

一人が俺に気が付いて、威嚇してきた。

俺はすばやく女の子と男達の間に身を割り込ませて、彼女を背に庇つた。

「やめる。嫌がっているだろ？」

俺の、一見真面目そうな雰囲気と小柄な体躯を見て取つた一人が、いきなり顔を狙つて拳で殴つてきた。

俺は左に身体をずらすだけで受け流し、勢いづいたその男の右膝の裏を右足刀で蹴り刈つた。アスファルトに右膝を強打し悶絶する男。……ああ、失敗したな。この連中は自分達の足で逃げてもらわなければいけない。普段の俺は、足止め系の攻撃をする事が多い為につっかりした。今回は下段への攻撃は控えないと駄目だ。

俺の動きを見て、他の三人が殺氣だつた。だが、その中の一人は、おつ、と言う表情にもなる。少しの動きで相手の力量が推し量れない奴はたいした奴じやない。俺は表情の動いた、両耳に合計六個のピアスをしたそいつが、この四人組のリーダーだと確信した。

なら、他の奴らは軽くいなし、このリーダーを叩きのめす事にする。力が上の人間がやられれば下は逃げるだろ？ 後で連中の上下関係がどうなるとも、それは俺には関係のない事だ。

俺はピアスをしたそいつへ、殺氣を込めて視線を固定した。奴の目の中に、恐怖の色が浮かぶ。結構。場数の違いを認識している表情だ。だが他の連中の手前か、ファイティングポーズをとる。これ

は、ボクシングの構えだ。

それを見た残りの二人が、道路に転がつて呻いている仲間をまたいで、殴りかかってきた。

大振りな動作なので、この一人の攻撃は難なくよける。よけながら俺は、啞然と見ていた女の子の肩を押して脇へのけつつ、有無を言わざず俺の鞄を押し付けた。

そして、ピアスの男へ一気に間合いを詰めて、顎に右ストレートを叩き込む。だが、巧みなフットワークで男は避けた。他の一人より隙が少なく動きもいい。

最初の一撃は予想通りにかわされたので、反撃が来る前に、今度は手加減なく男の脇腹に右の廻蹴、鳩尾に右足刀蹴を一段で蹴り込む。

ピアスの男は、意外にあっさりと吹っ飛んで仰向けに倒れた。対蹴技には慣れていなかつたのか、初めから俺に勝つ気力がなかつたか。どちらにしろ、倒せれば俺には問題ない。

その様子を見ていた二人があとずさる。

「仲間を連れて、さつさと失せろ

さすがに力量の差がわかつたのだろう。

二人は、それぞれ倒れている仲間の腕をとつて引きずり立たせ、俺の方を伺いながら逃げ出した。

連中が見えなくなつたのを確認して、呆然と見ていた女の子の手から鞄を取る。慌てて彼女は何か言おうとしたようにも見えたが、その前に俺は言った。

「気をつけて帰りなよ」

彼女にそう言つた瞬間、俺は背に、殺氣とも取れるような鋭い、今まで感じたことのないような絡みつく視線を感じた。

チャプター・2 ジプシー

振り返らなくても、背に痛いほど感じる、まわりつくような鋭い視線。

先程追っ払った連中でも、当然目の前にいる彼女のものでもない。俺の緊張する気配が表情から伝わったのか、不安そうな眼で見返す彼女は、さらに俺へ声をかけるタイミングを掴めなかつたらしい。

「それじゃあ」

そう言いながら俺は片手をあげて、彼女からせつと離れた。最

初に通つてきた路地を、逆方向へ足早に歩く。

新たに現れたこの視線の相手の狙いは、間違なく俺だ。だから、通りすがりの無関係な彼女を巻き込む訳には行かない。俺は後ろを振り返らず、その場から離れる。

問題は、このまま人ごみに紛れるか、人気のない場所に向かうべきか……。

だが、しばらくすると、あれほど感じた視線が消えた。

俺は路地を出た所で立ち止まる。

おかしい。

今の感覚、俺の気のせいだったのだろうか。

あるいは狙いが俺ではなかつたのだろうか。

それとも、今は仕掛けてくる気がなかつただけなのか。

いずれにしても、まく方向で少々遠回りをして、帰路についた方が良いだろう。

俺は、薄暗くなってきた街の人ごみの中へ、ゆっくりと入つて行つた。

すっかり日が落ちた頃、俺は家に着いた。

静かな住宅街の一角に立つ、明かりの灯つた二階建ての家。手入れされた季節の花の植木鉢やプランターが置いてある、ちょっとした庭もある。俺は門を開けて、鍵のかかっていない玄関のドアを開けた。

「ただいま」

そう言って靴を脱ぐと、俺は真っ直ぐキッチンに向かう。

そこでは、この時間帯ならばいつも、夢乃の母親が夕食の用意をしている。

「お母さん、ただいま帰りました」

俺がそう言うと、夢乃の母親は必ず顔を上げ、俺の目を見て「お帰り」と言う。

「夕食、もうちょっとで用意出来るから、着替えて来てね。夢乃と一緒に降りてきて頂戴」

続けてそう言うと、夢乃の母親は夕食の仕度に戻った。

俺は廊下へ出て、一階へ続く階段を上がる。

夢乃の両親は、家族を亡くした俺を中学の時から預かってくれている。実際、養子縁組の話も最初に出たが、俺が断った。それでも、夢乃の母親は俺を実の子供のように接してくれる。だから俺も彼女を母親と思ってそう呼んでいる。ただ、法律上だけの親子関係は俺には必要がないし、何か起こった時に、夢乃の家族に迷惑をかける訳には行かない。

俺の実父は陰陽師の家系はあるが、もともと家業を継いではないので特に問題はない。実際問題は母方の家系なのだが、この話は夢乃の両親には言つた事はないし、実は父方の従兄弟の勝虎や伯父貴にも、俺の知っている事を話した事は一度もない。

……話さなくて良い事なら、一生言つ必要がない事もある。ただ一人、母の血を引いている俺個人の問題というだけだ。

二階へ上がり、夢乃の部屋の前を通り過ぎた。そして自分の部屋

のドアを開けて、壁際の電気のスイッチを入れる。少々殺風景な部屋が明るくなつた。

中学に入る頃にここへ来てから、特に勉強に関するもの以外に、物が増えていない。目に付くものは勉強机や本棚、機械類としてパソコンやCDプレーヤー位か。時々京一郎が雑誌やらCDやら趣味の物を持ち込んで来るが、そんなに沢山の量じゃない。

俺は部屋の真ん中へ進みながらベッドの上に鞄を放り、右手につけた腕時計を外しかけた。小学生の頃に初めて腕時計を付けた時、何も考えずに最初に右手にした為、腕時計だけは何故かクセがついて左手に変えられない。まあ、些細な事で誰も気にも留めないだろうが。

ノックの音が小さく響き、ドアを開けた夢乃が顔をのぞかせた。
「遅かったわね。本屋さんで、何か面白い本でも見つかった？」

そう言つて微笑んだ。

「いや。……そういう訳じゃない」

俺は、外した腕時計を手にしたまま、今日の事を話すかどうか迷う。心配性な夢乃に、実害のなかつた視線や気配だけの話をするべきかどうか。

その瞬間、窓の外から感じた。殺氣と見紛うような鋭い、先程と同じ視線を。

「伏せろ！」

階下には聞こえないよう、俺は夢乃に小さく叫んで、左手に持つていた腕時計を部屋の電気のスイッチへ叩き投げた。夢乃が床に伏せるのと同時に部屋の明かりが消える。俺は目の慣れていない暗闇の中で、定位置に隠し置いていたリボルバーをホルスターからすばやく抜き、銃口を下に向けたまま窓際へ走り寄つた。

しばらく外の気配を窺つ。

気配が消えた。窓越しの街には、いつもと変わらぬ静寂が訪れている。

今まで俺は、どんな相手にも家まで後をつけられた事はなかつた。俺がここに来てから、最も気をつけていいる事だ。思わず舌打ちする。

「……夢乃、五分程で戻る。説明は後で」

俺個人だけではなく、この家まで何らかのターゲットになるのなら、夢乃に黙つている訳にはいかないだろう。

俺はそう言つて夢乃を残したまま、足音なく階段を駆け下りた。

チャプター・3 ほーりゅう

木曜日の今日、四時間目の授業は体育。一番お腹が空く時間なんだよね。その上に、体育館でバスケットボールだなんてさ。

私達女子は数人の班に分かれて、ボールをくるくる投げあう練習をする。あんまり私は球技が得意じゃないけれど、体育の女の先生は厳しくないから、和気あいあいとしていて結構楽しい。ちょっと位雑談が入つても、手が止まつていなければお咎めも特になく大丈夫だし。

逆に、体育館の半分を使って同じようにバスケをしている男子側は、結構厳しい男の体育の先生が指導している。……授業の進むスピード感が違うし、男子は皆黙々と言われたメニコーをこなしていく。その中で身体を動かす事がいかにも好きそうな京一郎が、一番楽しそうに練習している。

明子ちゃんが、私の方に近寄つて来て小声で言った。

「やっぱり城之内つて、運動神経いいよねえ。見た目も悪くないから、あれで暴走族に入つていなきや、クラスの女子にモテるだらうにねえ」

「でもさ、話すると、そんなに不良つて感じしないけど?」

「いやいや、充分怖いつて。……ほーりゅう、あなたの感覚違うんだよ」

「そうかな? 皆は初めから怖がつて、まともに京一郎と話をした事がないだけだと思うんだけれどなあ。

……そう言えば、ウチのクラスにはもう一人、京一郎以上にスバル抜けた運動神経の持ち主がいるじゃないかと思い、ジプシーの姿を探してみる。

……ジプシーがいた。いたけれど、何かいつもと今日の雰囲気が

違う。どこか違和感があるように見える。

ショートの練習をしているのだろうか。ゴールに向かつてボールを投げる。低めだったせいかリングに当たり、はじかれて転がったボールを拾いに行く。また右手で持つて左手は直角に支え、基本通りの投げ方でゴールを狙つては再び入らず、またボールを拾いに行く、の繰り返しをしていた。

「……ジプシーって、いつもあんな感じだっけ？」

思わず、明子ちゃんに聞いてみる。明子ちゃんの目が、きょろきょろとジプシーを探す。

「委員長？ あんな感じって？ そう言えば今日は珍しく授業に出ているねえ。身体が弱いから体育は見学が多いのに」

……そうか。いつも学校内ではジプシー、目立ちたくないから身体が弱いフリをしているって前に言っていたな。男子との体育は普段は別の場所だから、あんまり見た事がないせいで忘れていた。

「出られる種目には出ないと、単位が取れないからでしょ。でもまあ、結構離れた距離から投げている割には、リングに当たつてんだから、そんなにひどくはないんじゃない？ 試合になつたら、すぐ息が上がりそうだけれどねえ」

私がもつとすごい技を期待してジプシーを眺めていたから、拍子抜けなのか。普通はあんなものなんだ。

何となく眺めていると……そう言えばジプシーが、今日は朝からいつもとイメージが違うと思う理由、もう一つ思い当たった。

なんて言つんだろう……俺に近寄るなオーラ？ つていうのが今田は、いつもよりも増して出ている感じがする。

何かあつたのかな？

男子側の練習終了の笛が鳴り、分かれての試合が始まった。

ジプシーは京一郎と同じチームになる。京一郎は正真正銘ボイントゲッターだけれど、自らコート中を走り回つてボールを集めて、

どんづん入れる。まさしく水を得た魚状態だな。

対するジプシーは、殆どコートの真ん中辺りで動かない。でも、京一郎がゴールを入れる度に相手側から投げ返されるボールを、こじごじとく取つて京一郎に回している。……あれって？

「インターセプトって言つたよ」

私のそばで見ていた夢乃が言つた。

「疲れないように走り回らずチームに貢献、いかにも校内でのジプシーらしいやり方よね」

……なるほど！ それって疲れなくつて上手いやり方じゃないの。

ちょうど、女子の方でも笛がなつて集合がかかり、早速、私は試合に出ることになる。

同じチームになった、バスケも上手な夢乃が綺麗にゴールを決める。その後に飛んで返つてくるボールを、私はジプシーの真似をして狙つてみる。

……取れない。

何度かチャレンジする機会があつたのに、遅いのかボールに届かなかつたり、取れそうでも先に受け止められたり。私の狙つた反対側をボールが通つたり。

「……ほーりゅう、あなた、インターセプトを狙つていいでしょ？」

見かねた夢乃が寄つてきた。

「インターセプトって、勘やボールの読みや、それに伴う運動神経などが必要な、結構高度な技だと思うわよ。ジプシーだから目立たなく簡単にやつてのけるけれども」

……なんだ、ダメじゃん！

仕方がない。私は普通に、地道に走り回つてやれつて事かあ。

チャプター・4 ほーじゅう

その自習室となつてゐる教室は、この高校の生徒棟四階の、端から一番端にある。

四階の一一番端は、階段を挟んで音楽室。音楽室の下の二階は美術室。

その教室が、普通の教室として使えない理由は明白だった。

黒板も机も椅子も全て揃つていて、その教室の真ん中に、四角い一抱え程のある大きなコンクリート柱が一本、立つていて、ある。

建てられた当時は意味もあつたのだろうが、今では教師も、もちろん生徒も柱の理由がわからず、だがどうしようもないでの、そのまま自習室という形で放置されている。

名前の通り、自習をする為の生徒が時々訪れるが、大半は、友人や彼氏・彼女との待ち合わせ、昼寝場所に利用される事が多い。その利用目的の一つ、昼休みにここで、お弁当を広げるグループもいる。

「これから屋上でお弁当を食べるにしちゃあ、寒い季節に入るもんね。雨の日に限らず、しばらくなれば毎日ここでお昼を食べる事になりそうだね」

私はそう言いながら、勢いよくドアを横滑りに開けた。

「ほーりゅう、もうちょっと静かに開けるよ」

「あり、ごめんあそばせ、京一郎」

私は口先だけでそう言いながら、さっさと教室に入つて行く。きようきよると周りを見回し、入り口から柱の陰になり見えなくなる位置を確認して、手招きをした。

「ほーりゅう、うひちこつち

そう言いながら、私がお弁当を広げる為に机を寄せ始めると、すぐ京一郎が寄つて来て机を運んでくれた。こういつ腰の軽い所が、京一郎の良い所だよなあ。

そう思いながらジプシーを見ると、何か考え方をしているよう、「アーニー」と云ふことを口にした。

「あらぬ方向へ目が行つていた。やつぱり、いつも以上にどつつきにくい雰囲気。だけど。

「何があつたのよ。ジプシーはいつも変だけれど、今日は特に変…」と思わず言つた私に、ジプシーは視線を移した。

「……ああ。お前に言われるよつじやあ、よほど今日の俺は変なんだな」

「何だ？ それ。

怪訝な顔をした私に、ジプシーは言つた。

「とりあえず、食べながら話をする。お前は話が終わるまで食事、待てないだろ？」「

……うん。待てない。

お弁当を食べながら、ジプシーの、昨日あつた出来事を聞いた。何となく女の子を助けた話。その後に感じた殺氣と見紛うばかりの絡みつくような視線。家に帰つてから、途中で途切れたらばずなりに再び感じた同じ視線。その後、実害もなく消えてしまつた気配。結局、相手を特定できず取り逃がしてしまつたらしい。

私は、ジプシーの話を一通り聞いた後、思わず言つた。

「それってさあ、前にあつた文化祭のせいじゃないの？」

ジプシーが、何の事だという感じで私を見る。なので、続けて言った。

「ほら、文化祭の劇で舞台に出たから、ジプシーの人気が出ちゃつたでしょ。ラブレターもあの後沢山もらつたし。……その後の京一郎の暴言で、全く誰もジプシーに近づかなくなつちやつたけれどさ」「暴言とは失敬な。あの言葉は、ちゃんと計算した上で計算通りの

皆の反応だ

京一郎はそう言い返してきたが、一応、私の言いたい事がわかつたらしい。

「……なるほどね。殺氣と見紛うばかりの視線。考え方を変えたら、一途で熱烈な好意の視線だつて、ほーりゅうは言いたい訳だ」

「そう！ だつて私が殺したい位に思つてゐる相手の家がわかつたら、多分その場で手榴弾……は持つていなか。ビール瓶にガソリンと布突っ込んで火をつけて投げ込んでる」

「確かに、俺ならジプシーの留守を狙つてプラスチック爆弾を仕掛け、帰つて来た途端に遠隔操作でスイッチを入れるかもなあ」

「……ちょっと、二人で私の家を爆破しないでくれる？ こういう時のあるた達つて、何で気が合つのかしら」

不機嫌そうな顔をして、夢乃が言つ。

京一郎は、そんな夢乃へ笑顔を返してから続けた。

「でもよ、今の話、一理あると思うぜ。後をつけられてもいねえのに家まで気配が來たつて事はだ、例えお前を途中で見失つても、家を知つてからついてくる事が出来たつて訳だろ。それなら、お前の素性を知らない命のやりとりをしている裏の連中じゃなくて、普段顔を合わしたり家の住所を知つてゐる、学校などの一般交友関係者の方が確率が高い」

腕組をして目を瞑り、京一郎の話を黙つて聞いていたジプシーは、ゆつくり言つた。

「……なんか、俺には、そう簡単に納得できない」

「でも、どちらにしろ相手が見えないと、お前も動きようがねえだろ？ ほーりゅうの話はあながち間違つていないつて。お前、午前中みたいにそんなに気を張りつめていたら持たねえし。今の所、実害が出てねえんだろ？ 逆にもつと誰かが仕掛けてくるまで、ゆつたり構えていろよ」

まだ割り切れないという表情だつたが、それでも京一郎の話を聞き終わつたジプシーは、諸手を挙げて言つた。

「わかった、気にしない。手遅れにならなきゃいいが、今はこひらから動けないって事は確かだし、仕方がないな」

そう言って立ち上がる。

「そろそろ行く。五時間目に使うプリントを職員室へ取りに来て、先生に言っていた」

ジプシーは、取り付く島もなく一人でさつさと自習室を出て行った。……それでもジプシー、やっぱりまだ、いつも以上に、俺に近づくなオーラが出ているんだよなあ。まあ、急に変えられないか。

そんなジプシーの後ろ姿を眼で追いながら、京一郎は夢乃に耳打ちした。

「奴が一晩かかっても、何の手がかりも掴めなかつたんだ。だが、見る目が変われば何か出でてくるかもしねれない。奴程の情報網は持っていないが、俺は暴力団関係と過去に関わった事件を調べる。お前は親父さんを通して警察などで何か動きがないか、当たつてくれ」夢乃是頷いた。

……なんだ、あんなことを言いながら、やっぱり京一郎も、そつちの方面を疑っているんだ。
で、私は何すればいいの？

チャプター・5 ほーじゅう

あれから、特に変わったことはなかった。いや、あつたんだけれど。

ジプシーは例の、殺氣を帯びた様な視線といつものを一昨日昨日と、学校の帰りや家にいる時に三回程感じたらしい。やっぱり実害はなく、ただ、見られているだけ。

まるつきり油断をする気はない様だけれど、いい加減慣れてくれたのか、ジプシーの行動は通常生活に戻ってきている。

ただ、正体不明の相手への緊張のせいか、やはりいつものジプシーの、無表情の中にある自信過剰な迫力やキレがない。こんな時に、裏の仕事が入つたらどうするんだか。

そう思っているところに夢乃から、ジプシーは普段から個人的に武術の早朝練習していると聞いたので、一体ジプシーが、どんな練習を朝っぱらからやっているのかと、私は眠い目をこすりながら出て来てみた。

場所は近くの小さな山。子供の足でテッペンまで登るのに三十分程度。途中までの道は殆ど舗装されており、山裾には民家も多く建つていて。上まで行く間に、遊具のない小さな広場がいくつかあり、そこでは、早朝の散歩や趣味を楽しむ決まった面子らしい人達が、それぞれの場所をとつて朝の時間を過ごしていた。

ジプシーも以前から、その集団と同じように、ある一角の広場を使つて練習をしているという事らしい。使って練習をしていたから、てっきり映画のようなのに。

「何か、面白くな~い」

私は、座っていたベンチの背にもたれた。

わざわざ外でする練習って言つていたから、てっきり映画のよう

な華やかな武術が見られると思ったのに。何か違う！「これは何？太極拳？このハ工の止まりそうなゆっくりした動作。私が相手になつて一発蹴りをかましてやろうか！」

……つて言いたい位、技や構えをゆっくりとやっていく。

見ているだけで退屈だ。

「ついた師匠の考え方で、練習方法も全然違つだらうからさあ集会というものの朝帰りらしく、オートバイをベンチの脇に止めた京一郎が眠そうに言った。

「技のスピードや筋力を付ける事、体力重視の先生もいれば、ゆっくりでも技や急所の正確さを重視する先生もいるって事だ」

じゃあ、ジプシーに拳法を教えた人つてのは後者な訳ね。こんな練習で強くなれるものなのかなあと、ぼんやりと眺めていたら、夢乃が紙袋を抱えて到着した。

「今朝は京一郎も合流するつて聞いていたから、朝食に沢山サンドイッチを作ってきたの」

夢乃も朝から大変だなあ。御相伴に預かります……。

そう思つていたら、京一郎がジプシーに声をかけた。

「夢乃も来たし、残り十分程、俺の眠気覚ましも兼ねて連反攻に付き合おうか。おひい様も期待しているようだしさ」

ジプシーが頷くのを確認して、上着を脱いだ京一郎が肩を回しながら近づいて行く。

「何するの？」

夢乃是、あいてているベンチの上に、紙袋から取り出したサンドイッチや保温ポット、紙コップを用意しながら言った。

「二人がいつもしているのは、お互に最初に打ち合わせて決めた剛法技を、攻撃防御を入れ替わりながら続けて行うつて感じのもの。予め打ち合わせているからダンスみたいなものだけれど、だんだんスピードが付いてきたら、見ても結構面白いものよ」

なるほど。ゆっくりの型練習の次は、スピード練習つて事か。

「それって、勝敗がつくものなの？」

「普通は勝敗がなくて、攻撃に回った側が防御間合になれば終わるけれど、この二人の場合は、集中力が途切れで受け損ねた側が負けるわね」

近づいて行つた京一郎が、最初はゆっくり目に攻撃を仕掛ける。それをジプシーが防御し、続けて攻撃に移る。……なるほど、それを交互に続けていく訳ね。見ている間に、だんだんスピードが上がってきた。攻撃が全てわかっているから、全部お互いに防御されるんだろうけれど。

なんか、この打ち合いは見ていて気持ちが良いぞ。

休みが入らない上に、途中から本気モードになるので、この連続は十分程續けば長い方らしい。

「この十分だけでも結構いい運動になるよなあ」

そう言つて廻蹴を受け損ね、痛む脇腹を押さえながら、京一郎はサンドイッチを手に取る。そんな京一郎に、保温ポットから淹れた暖かい紅茶を飲みながら、ジプシーが言つた。

「京一郎、悪いが、これからバイク借りる」

「おう。聞いていたから満タンにしてるよ」

「……ジプシー、何処かに行くの？ つて、オートバイの運転免許持つているの？」

確かに今日は学校の授業がない土曜日。でも、朝から一人でオートバイなんか借りて、何処に行くんどう？

「免許や資格は、取れる歳になった時に出来る限り取つていい。バイクは普通二輪免許を持つてるよ」

……出来る限りつて。そうか、ジプシーって資格マニアだったのか。

「夢乃の親父さんが、警察関係の射撃場の予約を隠密におさえてくれているんだ。俺は違法な部外者だから、こればかりは空きが取れたら時に無理してでも行かないと。今回は少し場所が遠くてさ」

……夢乃のお父さんだからなのか、そんな違法がまかり通るのは。

そんな事を考えていたら、ジープシーが私に向かって言った。

「あと、ほーりゅう。今日は本当なら授業がないが、ちょっと学校に用事がある。俺が戻れる時間は、そつだな……一時に学校まで出て来られるか?」

「……私? 私だけ?」

「いや、一旦このメンバーで。変更があれば隨時連絡する」

……名指しで何の用だろ? まあ暇だし。別にいいけれど。学校つて事は、制服で集合だな。

チャプター・6 ジプシー

思ったよりも高速が混んでいなかつた為、俺は待ち合わせの約束よりも三十分早く学校に着いた。さすがにバイクでの移動中や行つた先では、ここ数日の変な視線は付いて来ない。こうなると、俺に付きまとつう例の気配は、学校帰りとその後に続く、寝るまでの生活限定つて事か。

俺にしては珍しい待ち状態。相手の正体が分からず、こちらから先制攻撃を仕掛けられないのは、結構辛いものだ。

眼鏡をかけながら校舎に入ると、授業がない土曜日なのに生徒が多い。

……そういえば、テニス部とバレー・ボール部が他校との交流試合で、ウチのコートを使うつて言つていたな。

俺は、待ち合わせの場所にした生徒棟一階の階段下で、ちょうど角度的に見えるテニス部の試合を、ぼんやりと眺めながら腕を組んで立つていた。

時々、待ち合わせ予定の一時を確認しながら待つていると、階段上から人の気配がした。

ふと、視線を上げる。

この学校の制服ではない、うつむいた女の子が一人、立つていた。見覚えがある。何処で会つた……、ああ、数日前に街で絡まれている所を助けた女の子じやなかつたか？

その時。

「お待たつ！」

ほーりゅうが目の前に飛び込んで來た。

急にほーりゅうが視界に入った為、反射的に俺は言つた。

「遅い」

「だつてさあ

慌てて階段の上を見る。しかし、先程の彼女は、もう姿が見えない。

「ジプシー、どうした？」

遅れてやつてきた京一郎と夢乃が、不思議そうに声をかけてきた。

「いや、今そこに、この間助けた女の子がいた」

「本当？……他校の人でしょう？」

「今日は、テニス部とバレー・ボール部が交流試合をしている。多分どちらかの応援について来たんだと思うが。……まあ、向こうは俺の事、気が付いてもいないうだろう

ふうんと、ほーりゅうが頷く。

そういえば。

「お前、一時の待ち合わせに遅れたな」

「だつてえ、学校に来る途中のお洒落な喫茶店で、新作のパフェが出でいたのよ！ついついメニューを眺めちゃってさ」

なるほど、理由がほーりゅうらしいか。……喫茶店に新作パフェ、ちょうどいい。

「私達も遅れてごめんなさい。かなり待ったかしら？」

夢乃がそう聞いたので、俺は試合が終わったらしくコートを振り返りながら言った。

「待っている間に、テニス部の試合を見ていた。……ウチのテニス部は思った以上に強いな。圧勝だ」

「おまえなあ

あきれたように京一郎が言った。

「この間の、俺が用事で市営のテニスコートでの待ち合わせに遅れて行つた日、そのテニス部の主将とお前で互角に打ち合つていたじやねえか。何て苗字だったか……下の名前は男か女かわからんねえよう、カオルとか言つ一年と」「……ああ、向こうは俺の事を同じ学校だと知らなかつた様だがな

そう言いながら、俺は時間を確認した。そろそろ行くか。
俺は、ほーりゅうに視線を移す。

「ほーりゅう、付き合おつか」

眼を大きく開いて、一瞬黙り込むほーりゅう。……その後、何か警戒でもしているのか、上目遣いで俺の様子を伺う。

「どうした？」

「それって、どういう意味」

「どういう？ 俺は何か特殊な言い方でもしたのか？」

「変な言い方だったか？ お前がパフェを食べたいなら今から付き合おうかという事だが。そうだな、言い方を変えたら……今までまともに、お前と一人きりで話をした事がないから、話をしがてら、さつきお前がメニューを見ていたと言つ喫茶店へ、これからパフェを食べにでも行こいつか。おじつてやるから……って意味だが」

「……OK！」

意味が通じると即答のほーりゅう。素直で単純だ。

俺は、京一郎に目配せをしながら、借りていたバイクの鍵を放つて返す。夢乃是心配そうな顔をしたが、京一郎は鍵をキャッチしながら無言で頷いた。

「それじゃ今から、ほーりゅうを借りる」

俺は一人にそう言つて歩き始めた。後からほーりゅうが付いてくる。

チャプター・6 ジプシー（後書き）

このチャプター・6（&1）は短編『コッカカンノ恋』と内容がリンクしておりますので、そちらも同時に読まれると裏話っぽくなります

チャプター・7 ほーりゅう

「私つてさあ、てつきり勘違いしちゃったよ
目的の喫茶店への場所を一通り説明した後、私は前を歩くジプシーにそう言つた。

「何。どんな勘違い？」

ちょっとと面づらいかなとも思つたけれど、なんか今日の、と言うか今のジプシーはいつもと雰囲気が違う感じがする。なので言つてみた。

「ジプシーが私に付き合おうって言つたでしょ。付き合いつつて、彼女になれとかの意味なのかと思つちやつた。考えたら、ジプシーに限つてそんな事言つ訳ないよね」

「……なるほど」

そう言つて、前を向いたままで、ジプシーは少し笑つた。
……やっぱり今は、いつもの刺々しさと言つか、突き放す冷たい感じがしない。

連日の正体の分からぬ氣配と視線で、いつも増してかなり神経質になつてゐるジプシーだつたけれど、こゝ何日か続くと神経が持たないよなあ。そのせいかな。

それとも、さつき言つていた二人で話をしようつてのは、腹を割つて話そつて意味で、それでいつもの、俺に近づくなオーラが出ていないのかな？

……だから、つきまとつてゐる氣配の相手はきっと、文化祭でジプシーに一目ぼれした誰かのストーカーの類だつて、私は思うんだけれどなあ。

十分程歩き、目的の喫茶店に着く。大通りに面したわけではないので、土地を広く使つた一階建での洒落な雰囲気のある喫茶店。表には新メニューのサンプルで、ガラス越しにいくつかのパフェが

並んでいる。そう、これこれ！　どれにしようかな。

「これから寒くなる季節に、パフェか」

ガラスに張り付いている私の後ろで、ジプシーがつぶやくように言った。

「分かつていいなあ。女の子は寒い季節にアイス！　お口タに入りながらとか、暖かい喫茶店の中でとかで、アイスを食べるのが美味しいのよ」

そう言いながら私は、喫茶店の扉に向かう。飾り細工のある取っ手に手をかけようとしたら、先にジプシーが手を伸ばして扉を開けてくれた。

「……ありがと」

京一郎だつたら普通にしそうな事、一応ジプシーもするんだ。広い店内に入ると、かなり混んでいた。それでもいくつかあいてる席を見回していたら、ジプシーが後ろから言った。

「窓際の二人席、日が入つて明るそうだ。そこでいいんじゃないか」意外な感じがした。

「……なんか、ジプシーのイメージとして窓際が嫌いそうなのに、いいの？」

「なんで？　裏の世界の人間に顔を見られたらとか、狙撃されたらとか？　そういう連中は俺が現役高校生だとは知らない。そこまで日常生活は制限しちゃいない」

そう言って、ジプシーが先に歩いていつて席に向かった。ジプシーがいって言うならいいのかな。なので、私も付いて行く。

席に付いてもう一度、私はフルカラーのメニューを取り、真剣に眺めた。

「……私、この『ピザの斜塔』って言つパフェにする。果物とバーラアイスとたつぱり生クリームの上に、チョコレートソースがかかっているヤツ！　美味しそうだよねえ」

ジプシーが、注文を聞きに来たウェイトレスに伝える。

「このパフェ一つと、珈琲一つ」

「あれ？ ジプシーはパフェ、食べないの？」

ジプシーはウェイトレスが立ち去った後で、言った。

「甘い物は嫌いじゃないが、この結構な大きさを一つ、食べきる自信がない」

なんか笑つた。本当に些細な事だけれど、ジプシーでも自信がない事、あるんだ。やっぱり少々精神疲れかで気弱くなっているのかな？

パフェが来る間、初めて入った店内をきょろきょろと見回してみた。充分に間隔を置いて配されたテーブルに、緩やかなクラシックが流れている。女性同士のグループの中に、カップルも数組。土曜日のおやつ時間だもんね。ただ、制服で来ている人達はいないや。店内は暖房が効いているようなので、下にカーディガンも着ている私は制服の上を脱ぐ。ついでにジプシーにも声をかけた。

「店内、結構暑いよ。制服の上着脱いだら？」

ジプシーは、眼鏡を外しながら言った。

「……いや、今日は下に吊つていいから」

一瞬、何の事だか解らなかつたけれど。……ああ、今、上着の下に物騒なものを持つているっていう意味か。

そして、ジプシーはおもむろにポケットからシルバー色の携帯電話を取り出す。

「……ジプシーって携帯、持つていたんだ。知らなかつた」

「まあね。普段は持ち歩かない」

「……それって、携帯って言わないじゃん」

ジプシーは、それでもすばやくいくつかボタンを押してから二つ折りに携帯を戻し、テーブルの上に置いた。

「俺も夢乃も持つてているが、そう必要に迫られる事がないし。今日は用事で遠出したからね。それに俺の携帯には、夢乃と京一郎の番号しか入っていない。……京一郎は普段からずっと携帯を持ち歩いているけれどね」

そう言つている間に、パフェと珈琲が来た。私の興味は、瞬間に
パフェへ移る。

わあ～い！ 何処から突き崩そつかな。下手に食べると名前通り、上に高く、斜めぎみに絞つた生クリームが崩れてくるわ。

生クリームの下のバーラアイスを突つついている私の田の前で、
珈琲に何も入れず、ジプシーはカップを手にする。ふと、そのカップを持つ左手の指に、私の視線がいった。

京一郎から勉強を教えてもらつてゐる時に、京一郎はすらりとした長身に合わせて指も長いなあと眺めた事がある。

田の前のジプシーの指先は、男の子なのに、とても綺麗に整えられていた。

京一郎も、本当はジプシーも、かなり喧嘩をする格闘系なのに、
ちょっと意外な感じがする。普通格闘系なら、拳ダコとか作つて「ゴ
ッゴッ」したイメージがあるんだけれど。

……田の前にいる今のジプシーは、普通の、何処にでもいるような高校生の表情をして、穏やかな雰囲気が漂つていて。頭も運動神経も見た目も良いのに。

自ら危険な事に首を突つ込まずに静かに過ぎせば、普通の生活が送れそうなのに。

何故、ジプシーは、裏の世界で生きる道を選んだのだろう？

チャプター・8 ほーじゅう

「何?」

私は考え事をしながら、ぼんやりとジプシーを見つめていたらし
い。慌てて横へ眼をそらしたが、私の視線に気が付いたジプシーが
聞いてきた。

「……言わない。夢乃と京一郎と、約束したから」

横を向いたまま、そう言つたけれども、今度は逆にジプシーに見
つめられているのがわかる。

……よそを向いてくれないと、この、田の前にあるパフェが食べ
にくいじゃない。アイスクリームが溶けちゃう。

「あの一人と何を約束した? そういう言い方だと余計に気になる。
……まあ、夢乃の言いそうな事は察しがつくが」

横田で無言で、私はパフェを突っついていたけれど、ふと思いつ
かしてみる。今日のジプシーは話がしやすそうな雰囲気だよね。私
の今思つている事は現在進行形の事であつて、過去の事じゃないよ
うな気がするし。

……思い切つて言つてみようか。うん。

私は視線を戻し、目の前のパフェを見つめたまま、一気に言つた。

「……何でジプシーは、運動神経も頭も見た目も良いのに、普段は
へたれのフリをして、裏では危険な事をわざわざやっているのかが
わからない。でも、夢乃達にジプシーの過去は聞かないって約束し
たから、過去は聞かない」

……やっぱり直接過ぎたかな。

「お前……聞かないって言つても、そこまで、はつきり口に出した
ら、聞いているのと同じ」

あきれたようにそう言つて、それでもジプシーは怒りらずにひつ
と笑つた。

笑いながら、眼を伏せた。

「そうだな……いろんな要因や気持ちが混ざっていて、一概にこれとは言えないが」

再びパフェと格闘をしていた私に、しばらくしてからジプシーは、考えつつ、ゆっくりと話し始めた。

ジプシーが眼を伏せたまま私から視線を外しているので、私はそのまま食べ続けながら話を聞く体勢になる。

「まあ、夢乃から俺の過去を多少は聞いていると思うけれども。理由としては……俺の家族を奪った犯人への復讐や、……リボルバー、俺が持っている銃を受け継いだ経緯や、……逆恨みとわかっているけれども」

言いにくそうに一旦言葉を区切ったが、目の前の珈琲カップを見つめながら、ジプシーは続ける。

「頭では逆恨みとわかっているけれども、俺は奴が許せない。……奴に対する恨みと憎しみが、俺が普通の生活を送れない一番の理由かも」

逆恨み……理由なんか必要ない感情だよね。
奴つて、我龍の事だよね。

私は今、どんな顔をして、ジプシーを見たんだろう。
視線を上げて私を見つめ返したジプシーと、眼が合った。

「で、お前はどうなんだ?」

……
はい?

急に話を振られても、何の事だか? 今の私は多分、間抜け面をしているはず。

「お前も全く普通の生活とは言えないだろ? 制御不能とは言つても超能力者で、お前の持っているロザリオの中の石、明らかに特殊な石だ。誰かに狙われるとか追われるとか、そんな心配はしないの

か

心臓が、ドキンと打つた。

確かに自分自身、物心ついた時から過去に何度も危惧した事だ。でも動搖している事がばれない様に、笑いながら何でもないよう言ひ。

「私、家族以外では成り行き上、ジプシーと夢乃と京一郎にしか、ロザリオを持ち歩いている事を言ひていらないんだ。私がここに来る前の学校の友達とかにも見せた事ないし、能力の事も今まで人に話をした事がない。だから大丈夫でしょ！」

ふうんという感じで、ジプシーは私を見る。……実は内心、結構気にしていること、ばれてるかな。私、すぐに顔に出るからなあ。

その時、ジプシーの眼が細くなり、表情から感情が消えた。

……最近、鳴りを潜めていたジプシーの殺気が広がる。私は近くで毒気に当たられたかのように総毛立つた。

でも、それは、本当に一瞬だった。あまりにも一瞬過ぎて私の勘違いかと思い、彼の顔を見直すと、ジプシーは笑いを含んだような表情で私を見ていた。殺気なんて微塵も感じられない。あれ？…本当に今の感覚、私の勘違いだつたのだろうか？

そしてジプシーはテーブルの上の携帯を手に取りながら開き、ボタンを一つ押して元通りテーブルに戻しながら、私に言つた。

「ほーりゅう、もう少し上手に食べろよ」

?

話の流れがわからず、不思議そうな顔をしている私に手を伸ばし、ジプシーは私の頬に付いていた生クリームを指でぬぐつた。

「顔に付いてる」

それだけでも恥ずかしい事なのに、ジプシーは、指に付いたクリームを、自分の口に持つて行った。

「なつ……何すんのよ

この男！ 周りから見たら、付き合っているカップルみたいで恥ずかしいじゃない！ ……って言うか、今気がついたけれど、二人だけで喫茶店に入ること自体が、もしかしたらデートになるのか？ うわあ……。

急に恥ずかしくなつてきた私は、顔を上げられなくなつた。

パフエ、食べられないじゃん！

そんな私をジプシーは、テーブルに片肘をついて、面白そうに笑いながら見ていた。

チャプター・9 ほーりゅう

喫茶店を出ると、途端に外の寒い空気が身にしみた。お店の中はかなり暖かかったし。……なんか最後の方は赤面するような、体温上がるような事もあつたしさ。

「一体ジプシーは、何を考えているんだか。

「さて、今から何処に行きたい所、ある？」

「後から出てきたジプシーが、私に聞いてきた。

「え？ こここのパフェだけが目的じゃなかつたの？ ……うん。

何処かつて言つても、もうこの時間だし制服だしなあ」

私は腕を組んで考えた。今、四時過ぎでしょ。今から行きたい所も特に思い浮かばない。

「なら、うちで夕食を食べていくか？ お前の家は今日も叔母さん遅いんだろう？」

前に私、今日は叔母が遅い日だつて言つてたつけ？ 自分では記憶にないのに覚えていたらしいジプシーが言つ。それは確かに嬉しい。夢乃のお母さんの作るご飯も美味しいし。

「そうしようかなあ。でも急にお邪魔して大丈夫？」

「……実は、もうそのつもりで、今日は朝から頼んできている」

そう言つて笑うと、ジプシーは私の前を歩き始めた。

私は慌てて後をついていく。

……私、かなり、ジプシーを誤解していたのかも。

私が転校して来た日に、確かに私が余計な事をしたとはい、殴つて氣絶させようと考えたり、文化祭では変な術に巻き込んで感電させたりと、女に対しても情け容赦ない奴だと思つていたけれど。こうして一人だけで話をしてみると、そう悪い奴には思えないなあ。

ただ普段は、裏の世界でも活動をしている関係で、そう振舞わな

ければならないだけなのかな……。

しばらくジプシーの後ろについて歩いていたけれど、ふと、ジプシーの家の方へではない事に気が付く。

「あれ？ 道、違うんじゃない？」

ジプシーは、私に合わせてか、歩調を緩めながら言った。

「散歩がてら、遠回りをして帰ろうかと思つたけれど。嫌か？」

まあ、まっすぐ帰つても夕食以外何がある訳でもないし。別にいいけれど。

そのまま歩いていくと、私の知らない道に出た。そう言えば、この土地に引越しをしてきて、私は三カ月程になるのかな。近くても普段行かない場所があるって事か。

うん。散歩も悪くない。

そのうち大きな公園が目の前に出てきた。中に入つていくと、子供の遊び場にあるような砂場やブランコはなく、逆に巨大アスレチックと言える位の大きな木製の遊具が、広場の中央にどんと置かれてあつた。そこで、数人の小学生が遊んでいる。また、散歩道として想定されているのか、寒い季節の為に葉の落ちた木々に囲まれた長い道が、広場の周囲に幾重か作られている。その周りの夕暮れの散歩道を、犬と一緒にゆっくりと歩いている人々。

「知らなかつたなあ。ちょっと足を伸ばせば、こんな大きな公園があつたんだ」

今度は私が先に立つて、公園の散歩道を歩いていく。アスファルトじゃない。土の道だけれど、歩きやすいように整備されている。

「いい場所だね」

振り返つてジプシーを見る。

すると、私の顔を見ていたジプシーが言つた。

「お前、顔に何かついてる」

え？ さつき食べたパフュ、まだついていたのかな？ 慌てて手

の平でこすつてみる。

「こすつている場所が違う。取つてやるから眼、つぶれつて」
言われた通りに大人しく眼をつぶる。ジプシーの片手が私の頬を
撫でる。……でも、なかなか眼を開けていいと言わない。なので、
つい勝手に眼を開けてみた。

息のかかりそうな距離で、顔を斜めに傾けて眼を閉じたジプシー
がいた。

思わず眼を見開いて固まつた私の気配が伝わったのか、ジプシー
も眼を開けて私を見た。そして、微笑みながら、ゆっくり私から離
れる。

「さて、暗くなるから帰ろうか」

……ちよつと待て！ 今、キスしようとしていなかつた？

あまりの事に言葉が出ない私へ、ジプシーは笑いかけてから、さ
つと歩き出した。

チャプター・10 ほーりゅう

寒い季節になると、日が落ちるのが早い。薄暗くなつてきた道を歩く。

結局、あの大きな公園から出た後、私とジプシーとの間に特に会話がない。向こうはどう思つていいのかわからないけれど、私は気まずいままで、ゆっくりとした歩調のジプシーの後について歩いていた。

……どうこう事が、問い合わせるべきなんだろうか？　向こう事は、問い合わせいいものなのか？　でも、なんて切り出せば良いのかがわからない。

迷つている間に、ジプシーの家に着いてしまつた。

ジプシーが家の門を開け、私も一緒に玄関をくぐる。

「お邪魔します」

靴を脱ぎながら、私は家の中に声をかけた。私の声が聞こえたようだ、キッチンから夢乃のお母さんが出てくる。

「お帰り、聰。ほーりゅうちゃんもいらっしゃい。夢乃と涼ちゃんも、もう一階に戻つてきてるわよ」

そうだ、夢乃！　……向こう事は、夢乃に相談したらいいのかもー。

「お先に失礼します！」

私はそう言つて、ジプシーを玄関に置いたまま、一階への階段を駆け上がる。

私は夢乃の部屋の扉を勢いよく開いたが。あれ、いないや。ジプシーの部屋なの？

今度は恐る恐る、ジプシーの部屋の扉を開ける。

「お、ほーりゅう、お帰り！」

夢乃もいたが、先に京一郎が声をかけてきた。そして、一人はジ
プシーのパソコンで画面を見ながら、「写真の印刷を沢山していた。
何しているんだろ。写真の一枚を手にとつて眺める。……ただの
街の風景。街並みや人が行き来する通りばかりを写している写真。
なんだこれ？ でもどこかで見た事があるような景色。

「ほーりゅう、ごめんなさい！」

いきなり夢乃が、私に向かつて手を合わせて謝つてきた。

「止めようと思つたけれど、押し切られちゃつたの」

「一体何の事？ 私は状況がわかつていな。写真と夢乃を見比べ
る。

「先に言つておくが、発案者は奴だからな。俺じゃねえよ」

京一郎もパソコンの画面を見つめながら言つ。……何だか嫌な予
感。

「OK！ 大体印刷出来た。後は写真チェックだな」

京一郎はそう言つてパソコン前の椅子から立ち上がりると、私の方
へ歩いてきた。

「怒るなよ。説明するから」

「説明によつては怒る！」

「まあまあ、落ち着けつて。一応お前の意見を取り入れた形には、
なつてんだから」

？

「「」のままの状況がいつまでも続いていたら、こちらからは動きよ
うがねえだろ？だから、おどりとしてだな、お前と奴でデータコ
ースを回つてもらつた」

……はあ？

「データという氣の緩みそうな隙を作つて、もし裏の世界の連中が
動くようなら、それでよし。お前が主張していた奴への一般人のス
トーカーなら、データという状況があれば必ず動くだろうから、そ
れでもよし。結果としては誰もその場では仕掛けっこなかつたが、
今回も、その誰かの視線と気配をジプシーは感じたそうだ。連絡を

もらつた俺と夢乃で、お前らの周辺の通行人などの写真を撮りまくつてきた。この中に怪しい人物が写っていたら簡単なんだがなあ

……なにい？

慌てて写真を見直す。そうか、見覚えがあるようなこれって、喫茶店の中から見えた外の風景！

「連絡つて？ そんなの、何か合図したつけ？」

「ジプシーの携帯から俺の携帯へ。今、気配を感じたつてメール」あ。あの、一瞬ジプシー自身の殺氣を感じた時！ 確かにあの時、ジプシーは携帯を触つてた！

「一応喫茶店を出た後の公園までつけて行つたけれど」

……公園！ つて事は。

「お前らの、いかにもラブシーンまで見たが、向こうも隠れていたのかなあ。周囲に写真に撮るような人の気配がないから、その時点で俺と夢乃はこっちに戻つてきて、プリントアウトしていた」見ただんだ。アレ、夢乃も京一郎も、見ていたんだあ！！

「ぎりぎり触れない距離をとった。問題ないだろ」

後ろで、いつのまにか部屋に入つて来ていたジプシーが言つた。私が振り返ると、無表情で机の上に鞄を置き、制服の上着を脱ぎながら京一郎の方へ歩いていく。

この男！ こいつの演技にだまされた。先ほどまでの笑顔で穏やかな方がフェイクか！ もういつもの無表情に戻つているし。それに、触れた触れないの問題じゃない。よくもこの女の気持ちを！

後ろから殴つてやろうかと、ジプシーの背後で私はコブシを振り上げる。

「あれ？ お前にしちゃ珍しい。制服なのに、下に拳銃吊つていたとは」

その時、不思議そうに聞いた京一郎に、ジプシーが写真を見ながら答えた。

「ああ。今日は特別。俺一人なら素手でもどうとでも切り抜けるが、

さすがに今回は俺の事情でほーりゅうを巻き込んだから。街中でも状況に応じてすぐに臨戦態勢に入れるようになっていた

私はジプシーの言葉で、ふと気がついた。確かに今回は、おどりだつたかもしれないけれど。携帯で京一郎に連絡する直前までは、喫茶店で話をした内容や私が訊ねた事は、おどりとは関係ない内容だつたし。

あの時の話は、本当のジプシーの気持ちだつたんじゃないかな。
……それに、やり方は荒つぽかつたとしても、あの場で何かあつたら、きっと本当に私を護ってくれる気だつたんだ。やっぱリジプシーは、そんなに悪い奴ではないのかも……。

私は、振り上げた手をどこに下ろそうか迷つた。

そんな私の様子に気がついたのか、冷ややかな眼つきで私を一瞥して、ジプシーは言った。

「いろいろと未経験だつたようだが、ちゅうど良かつただろ。練習が出来て」

「の、男！」

私は後ろから殴つた上に、首まで絞めてやつたわ！ めめうづつと！

チャプター・11 ほーりゅう

私は夢乃の家で、京一郎と一緒に夕食を「」駆走になり、そのまま泊まる事にした。明日は日曜日だし、問題はないよね。

夢乃のお母さんが、私の叔母に連絡を入れてくれる。前に泊まりで試験勉強をした時、お泊りセットとしてパジャマを置かせてもらつていたので、急でも大丈夫だったし。

夜更かしは美容の敵だもんね。私と夢乃はさっさと寝る事にしたので、夢乃の部屋のベッドの隣に、一組布団をもらつて来た。

早い時間から電気を消す。暗い中で、私は唐突かもしれないけれど夢乃に言った。

「今日の事、シチュエーションのせいだと思つんだあ」

「……何が、どういう事？」

夢乃が聞いてきた。話題を持ち出すこと自体照れるけれど、暗闇だから、恥ずかしくなく言えるよね。私は仰向けに寝転がつたまま続ける。

「確かに喫茶店や公園でドキドキしたけれど、あれはジプシーが相手だからじゃなくて、同じ事を京一郎がしたとしても、多分同じようにドキドキしたと思う。だから、その状況だけのせいだと思うんだあ」

「……うん、私もそう思う。ジプシーって何となく、ほーりゅうの好みじゃないって気がするし」

「でしょ。夢乃是そんな状況になつた事、ないの？ ジプシーと同じ家に住んでいてさ」

「私は。ジプシーは多分家では、誤解が起きないように必要以上に氣を使つていてるよ。私自身ももつ、家族同然に思つてはいるし。……それに、なんて言うか、私もジプシーは恋愛対象から外れるんだよなあ。好みの関係かな。私の好みは……そうね、知的で大人っぽい

人」

「それはわかる！ 夢乃、英語の熊谷先生を見る時の眼が違うもん」「やだなあ！ そんな所だけ何見てるのよ！ ほーりゅうは」見えないけれども赤くなっているだろう夢乃。そばで並んで座つていたら、きっと背中を照れ隠しにバシバシ叩かれているかも。：「…そうか、熊谷先生って事は、夢乃って、知的で大人っぽくて優しいタイプが好みなんだなあ。

「大人っぽいと言えば。……私が転校してくる前にいた高校の生徒会長、三年生だっただけれど、多分夢乃の好みだったと思うなあ。何か、こっちの生徒会長と違つて、すぐ落ち着いていたし、頭も良くて大人つて感じだつたなあ」

「それ、こっちの会長に失礼よ。それに足立会長は一年生だし。一年後にはもつと落ち着いて貫禄が出るかもよ。……ほーりゅう、そういうあなたはどんな人がいいの？」

「私があ……」

うーん。特にコレって言うこだわりはないなんだけれど。

「そうだなあ。私は、気持ち的には別れても、すぐまた会いたいって思える相手かなあ。あと、恋愛なんだから、一緒にいるだけでドキドキしたり嬉しくなるような。……顔はそりや良いに越した事はないだらうけれどさ」

「ウチの男共、見目は良いんだけど、何故か私たちの恋愛対象から外れるよね。……そばにいる距離が近すぎるのかしら」

「……くそっ！ ディッシュでもゲートが開かねえ！」

京一郎がパソコンの画面の前で独り言ちた。

それまでは予備のパソコンも引つ張り出し、ジプシーと京一郎の一人で長い間黙々と作業をしていが。

「大した組織でもないのに、パスワードが三重もかかっていやがる」

「それでも組織の中のスナイパーリストだ。まあ、位置的には裏帳簿と同等位の最重要機密にはなるだらうからさ」

手を止めずに画面を見ながらジプシーは言つ。

「俺、考えたら昨日も徹夜じゃねえか。機械使つてもパスワード解除に全然頭回んねえ。……下で珈琲入れてこようかな。お前も飲むだろ？」

両手をあげて背伸びをしながら、京一郎は言つた。

「ところで、ほーりゅうと夢乃のヤツ、気がついてるのかな」「ちょっと声を落として、京一郎が言つた。

「何を？」

声をちらに落しながら、笑いを含んだように京一郎は言つた。
「特に、ほーりゅうの声。でかくて内容が隣の部屋まで筒抜けだって。全く好き勝手言いたい事を言つていやがる。俺ら対象外だつた」

「さつきまでこっちの部屋が、それだけ静かだつたって事だろ。それに、ほーりゅうの声が大きいから夢乃もつられているんだろ。普段は、夢乃の声は聞こえない。……まあ内容はともかく、女共は平和だつて証拠だ」

京一郎は席を立ち、静かに扉をすり抜けて部屋を出て行く。

ジプシーも一旦手を止め、伸びをしながら眼を瞑つた。

そして今日の喫茶店での会話を思い出す。彼女の質問。あの時は、俺は演技じやなかつた。

俺は演技じやなかつた。

以前ほーりゅうに、我龍との関係を直接聞かれた時は、かなり精神的に動搖した。今回は聞かれ方が違つたせいか、俺が自ら話す気になつたせいか、比較的精神を安定させたままで奴の話が出来た。
……じうやつて少しづつ、俺は奴の事も考えていく様になるのかな。

あと、ほーりゅう。

あの様子では、彼女も能天氣なりに自分の能力の事をかなり気にはしている。本当に感情がすぐ顔に出る女。よく今まで事件に巻き

込まれずについたものだ。

能力に関して全く無知で未開発なのは、今まで相談する相手もいなかつた為だろう。

俺自身がこんな時だが、ほーりゅうの件も乗りかかった船だ。いつまでも先延ばしする訳にもいかない。何か対策を考えていかない

と。

チャプター・12 ほーりゅう

そして月曜日の朝。今日はさすがに学校がある。

京一郎は一日間徹夜だったそうで、日曜日の夕方に家で寝るつて帰つたけれど、私は土曜日からずっと夢乃の家にお泊りした。

考えたら私、土曜日におとりになつたつて事は、何か進展があるまで、おとりのまつて事じゃないの？ ずっと、夢乃やジプシーや京一郎の中の誰かと、行動を共にしていないといけないといふことじやないのかなあ。

二人に合わせて一緒に家を出たので、早々に教室に着いてしまつた暇な私は、夢乃やジプシーと一緒に窓の外の他の生徒の登校風景を眺めていた。

朝一番の教室つて人は少ないし、晴れた日に窓から入る朝の風も結構さわやかだなあ。知つている人達が眼下を通るのを、四階からぼんやり眺めているのも楽しいかも。

「お、早いねえ」

京一郎も珍しく朝早くから教室に入ってきた。

「いつもはギリギリのイメージがあるほーりゅうも、さすがに夢乃の家から登校となると遅刻になる訳ねえよな」

「ギリギリのイメージは、京一郎だつて一緒でしょ」

「俺はギリギリどころか普段は遅刻だつて」

京一郎は笑いながら言った。

その時、窓の外で車の音がした。いやに大きく聞こえたので、私は思わず音がした校門の方を見る。

「おっ、あれ、フエラーリじゃねえ？」

同じように窓の外を見た京一郎が、田ぞとく見つけて声を上げた。フエラーリ。車に疎い私でも聞いた事のある車の名前。門の前で、赤いオープンカーが止まった。登校中の学生の間からも歓声が聞こ

える。人気がある車なんだ。

「あれはF430のスパイダーだな。二千万は下らねえ」

「へえ！ すごい高級車。誰が乗ってきたんだろ。」

同じように窓から覗いていたジプシーが、続けて言った。

「ミッションでV8エンジン。車回りが硬くて小回りがきかないから、乗るのは好みだ」

……やっぱり男子は車が好きなのか。どういう事か私には意味がわからぬけれど、よく知つているなあ。

見ている間に、左ハンドルの運転席から男が降りた。高級車に似合った雰囲気の、あれは大学生なんだろうか。そのまま助手席へ回り、少々気取つてドアを開ける。

中から現れたのは、セーラー服を着た女の子だった。

大学生のお兄ちゃんが、高校生の妹を送つてきたような図なんだろうか。でも、あの制服、ウチの生徒じゃない。

「あれ？ でも何処かで見たような制服に見えるけれど、何処で見たんだろう？」

私は腕を組んで考える。すると、そばでジプシーが小さい声で言った。

「見覚えがあるのは、お前が生徒会長の妹に会つた事があるからだろ。会長の妹が通つている私立中学の、あれは高等部の方の制服だ。デザイナーが同じだからデザインが似ているんだろう」

なるほど。

改めて、眼下の女の子を眺める。

細身で華奢な感じの、とても可愛らしい子だ。遠目でも良く分かる、小顔でパツチリとした一重。鼻筋も通り小さな唇。毛先を軽くふわふわ縦ロールに巻いたようなロングヘア。そして、意識して動く動作も、場が華やかになるような芸能人的なオーラをまとつている感じがする。

「なんか、可愛いらしいんだけれどねえ」

ずっと眺めていた京一郎が言つ。

「へえ～。京一郎つて、ああいう子が好みなんだ」

私は言つた。暴走族に入つてゐる京一郎は、もっと何て言つか、そつち系が好みかと思つていた。それが先入觀つてものか。

「いや、ロリータファッションの似合いそうな女に、特別興味はねえよ。俺はどちらかと言つと、顔が問題じゃなくて、こう、ボン・キュッ・ボンな身体の方が」

目の前の空間に手の動作で形を作り、ジェスチャー付で私に説明する京一郎の頭を、夢乃是「嫌な人！」つと言いながら後ろから叩いた。

ジプシーは、車から降りた彼女を無言で一瞥しただけで、車以上の興味はなさそうだ。

そんな私達がいる校舎の上方を、車から降りて門を通りて来た彼女は見上げたらしい。

偶然、窓の外を見下ろした私と目が合つた。

彼女は私を見て、にっこりと微笑む。

そしてそのまま、近くの入り口から校舎に一人で入つて行つた。でも。

「あれ？ ウチの学校に入つたけれど、いいのかな？ 今日は通常授業で何のイベントもないし、他校生つて入つていいものなの？」

「他校生でも職員室とか、まあ用事で来る場合があるだろうしな」京一郎はそう言つたが、しばらくすると、廊下からざわめきが聞こえ、先程の彼女がこの教室の入り口に姿を現した。

彼女は、まだ十数人の生徒しか来ていらない教室内をゆっくりと見渡し、一瞬私の上で視線をとめる。しかし、すぐにそのまま視線を逸らし、今度は窓際にいるジプシーに眼をとめた。

嬉しそうな顔で教室の中を進み、自分に近づいてくる彼女に気がついたジプシーは、窓の外の風景を見ていた視線を無表情のまま彼女に移す。

ジマーの正面に立つた彼女は、これでもかと思つ位の満面の笑顔で言つた。

「はじめまして、たかはしづい高橋麗香と申します。江沼聰君、私と付き合つてくださいませんか」

チャプター・13 ほーりゅう

はつきり「付き合ってください」と、彼女は言った。

私は、大胆にも他校の教室へ乗り込んできて、ジプシーに告白をした彼女に驚いた。

確かに文化祭後から最近まで、ジプシーは人気があった。机の中に置かれたり校門で待ち伏せされて渡されたラブレターは、かなりの数になっていたはず。今でも人気があるのだろうけれど、京一郎の一言で、それ以上に近寄り難さが出た為、今では誰も手紙を渡そうことなどと考えないが。……そう言えばジプシーって、ラブレターは沢山もらっていても、直接「付き合って欲しい」とは、言われていなかつたな。ジプシー、私の知っている限り、初の告白だ。

私は彼女をじっくり観察した。名前は、高橋麗香と言つのか。先程、窓から覗いて見た印象と変わらない。京一郎の言うロリータファッションの似合いそうな、ゆるいくるくるロングヘアに覆われた小顔、パッチリとした綺麗な一重と通つた鼻筋の下の小さな唇。そして近くで見ても、細身ながら場が華やかになるようなオーラを持っている。かなり、いや、これ以上はそういうではないであろう可愛い女の子だ。

しかし何で、こんな朝っぱらから他校に来て告白なんだろう？
自分の学校はどうしたんだろうか。

そうそう、ジプシーが最近気配や視線を感じたりするつて言つていたアレ、イメージが違うけれど、この彼女かな？ だとしたら、やっぱり私が言つていた一般人のストーカーの線で当たりじゃん！

彼女は重ねて言った。

「私を彼女にして欲しいんです。お願いします
「ごめん。今は誰とも付き合つ気がない」

彼女が言い終わるかどうかのタイミングで、彼女から視線を逸らしたジプシーが言った。

私も、遠巻きで見ていた十数人の生徒も、あまりの断りの速さに呆気にとられた。当の彼女も、あまりの即答に理解が出来なかつたらしい。眼を見開いて、困惑の表情で固まつていた。

ジプシー、断るにしても早すぎるつて。それに、もう少ししゃんわりとした言葉を選んだ方がいいのでは。

さすがに私は思った。これじゃあ、勇氣を出してここまで来た彼女が可哀想過ぎる。

「……付き合つ気がないつて事は、今、彼女はいないつて事ですよね」

ようやくという感じで、彼女が口を開いた。

ジプシーが視線を移して、一瞬私を見る。……そつか、一昨日の、おとりデートもどき。あれは本当におとりだから、どう考えても彼氏彼女としてのデートじゃないでしょ。ジプシーもそう考えたんだろつ。

「いないし、今後もしばらくは、誰とも付き合つ気はない」

ジプシー、はつきり言い過ぎ。それでも彼女は食い下がる。そうそう、せっかくここまで来たんだもんね。……って、私は誰の味方なんだか。

「視線を逸らさないで。私の眼を見てもう一度答えてくれますか？」教室内の雰囲気を察したのか、廊下にも他クラスの人だかりが出来てきた。何だか騒ぎが大きくなつて來たかも。京一郎は、面白がつているような顔でジプシーの後ろで見ている。

その時、ジプシーは彼女から視線を逸らしたまま、かけている眼鏡の真ん中に左手の中指を添えて何かを言葉にした。あまりにも小さな咳きだったので、彼女にも聞こえなかつたらしい。

「何ですか？ 私の眼を見て返事をください」

ジプシーは、ゆっくりと正面から彼女の眼を捉える。そして、一拍おいて、はつきりと言つた。

「残念だが、僕は君と付き合ひ気は全くない。やつさと帰ってくれないかな」

驚愕の表情をした彼女は、小さくつぶやいた。

「そん、な……信じ……られない……」

教室に、平手打ちの音が響いた。

思わず私は、顔を両手で覆つたが、指の間からしつかり見ていた。結構なきつさの彼女の平手打ちは、ジープシーの眼鏡を私の足元まで飛ばした。

ジープシーはよろめいたが、慌てて後ろにいた京一郎がジープシーの両肩を抱きかかえたので、踏みどまる。その時、自分を支えた京一郎へ、ジープシーが何かをささやいた。

そして、教室から走り出て行く彼女を、誰も動けずに無言で見送つた。

教室が一気に騒ぎ始めたのは、彼女の姿が見えなくなつてからだつた。

皆、ジープシーに声をかけてくることはないが、それぞれが遠巻きに見ながら憶測で話を始める。普段からあまりクラスメイトとの親交を持たないジープシーだから、まあ、その辺は仕方がない。

私は、足元に飛んできた眼鏡を拾つた。大丈夫、割れていないし歪んでもなさそう。そして、眼鏡を渡そうと、ジープシーに近づいていった。

平手を食らつた頬を押さえ、まだうつむいているジープシーの反対側の空いている手に、眼鏡を押し付ける。

「はい、眼鏡。でもむ、確かに今の断り方、結構きつい言い方かも……」

私の言葉は、そこで止まる。

これ以上、嬉しさを抑えられないという感じの笑みが、ジープシー

の口元に浮かんでいた。

この男、笑ってる！

何で？

訳がわからず、思わず後ずさりした私の眼は、京一郎の姿を探していった。いなし。さつきまでジプシーの後ろにいたのに。

そして、登校してきて次々と教室に入つてくる生徒の向こうで、

逆に教室から出て行こうとする京一郎をみつける。

京一郎は、出口付近にいた夢乃に、すれ違いざま何か囁いてから、教室を飛び出して行つた。私は夢乃に走り寄る。

「夢乃！ 京一郎は？ 何て？」

「今からサボり。またお昼から来るつて」

そして、夢乃はそう言つた後、声を潜めて私に言つた。

「ジプシーが京一郎に、『敵が動いた』って言つたわよ

チャプター・14 ほーりゅう

敵が動いた？……誰がビのよつこ？

わかつていな私は、夢乃の顔を見る。

夢乃是、私の表情を見た後、ちょっと考えるような感じで小首を傾げる。そしておもむろに言った。

「ほーりゅう。今の女の子、高橋麗香さんって可愛かつたわよね」

うん。

「あんなに可愛いんだったら、普段はどんな子なんだろとか、ジプシーに告白しに来る前つて、どんな彼氏がいたのかなあとかって、気にならない？」

なる。

「ウチのクラスの明子ちゃんって、そういう情報も詳しそうよねえ「……明子ちゃんに聞いて来ようつとー やっぱり夢乃も噂話は気になるよね！」

私は明子ちゃんの所へ飛んで行つた。多分、私の行動つて夢乃の思惑通りに動いたんだろうな。

だから、その後すぐに、夢乃が他クラスや他学年をあたつて、彼女の情報集めをしているなんて、知らなかつたよ。

「知つてる知つてる！ 高橋麗香。あの子、この辺りでは可愛くて有名だもの」

他にも何人かのクラスメートの女の子に囲まれて、明子ちゃんは嬉しそうに知つていて話を教えてくれた。

「なんか芸能人的なオーラがあるでしょ。本当に雑誌のモデルのような仕事もちょっととしているのよお。でも学校はちゃんと行ける時には行つていいみたい。彼氏は今までいなつて。高校生だし事務所が認めていないらしいしねえ。だから、彼女の周りにいる男は皆、タダのファンや追っかけ。今日、車で送つてきたのも取り巻きの一

人だよ。でもさあ、男に会つて来ると、他の男の車に乗つてくれるつてのもさあ」

「……でも明子ちゃん、よつこもよつて、何で吉田の相手がジプシ一なんだろう?」「…

「ほーりゅう、それって普通に失礼だつてえ」

「文化祭に彼女、来ていたらしよ。それでジプシーの舞台を観たんじやない?」

「そりや、あのジプシーの女装は綺麗だつたけれどさあ、ラブフレタ一ならまだしも直接告白に来るなんて」

「いろいろと情報と憶測が飛び交う中、なるほど、やっぱり思った通りじやないかと、私は勝ち誇った気分になつた。

彼女は、文化祭の舞台で観たジプシーに一眼ぼれして、その後は今日までずっと学校帰りなど、後をつけていたんだ。で、私とジプシーとの土曜日のおとづづートに引っかかって、今回まんまと姿を現した。

さつき夢乃が言つていた「動いた」つて、彼女が出てきたつて意味だな。

なんだ! 今回全然、心配していた裏の世界とも関係ないし。ジプシーの交際の断り方は酷くて、それがある意味問題だけれども、これで一件落着じやん!

その日の午前中の授業は、ややざわめいていたけれども、いたつて何事も無く過ぎていつた。職員室には、今朝の騒ぎは云つていないといふ事らしい。

ジプシーも普段と変わりない態度で授業を受けてい。……動搖はないんだ。

チャイムが鳴つて昼休みに入ると、私はお弁当を持って、さつきといつもの自習室へ向かつた。普段からジプシーに目をつけている位だ。ひょっとすると、騒ぎを聞きつけた生徒会長あたりが、ここでばかりに冷やかしや糾弾に来ないとも限らない。

同じところに向かうので、廊下を歩いていると、先に歩いていた夢乃と並んだ。自習室に着くと、ちょうど扉を開けようとしていたジプシーにも出会った。

「ビンゴだビンゴ！ まあ、見てみろって！」

扉を開いた瞬間、部屋の奥で既に机を寄せて、何やら資料を見ていたらしい京一郎が、私達を見て嬉しそうな声を上げた。この男は、午前中の授業をサポートして何していたんだろう？

早速近づいて、京一郎の差し出した一枚の写真を見る。……これ、土曜日のおどりデートの時の写真だ。

「……高橋麗香さん、写ってる！」

「そう！ しかも時間的に、ちょうどジプシーがメールを送つてきた時、この道を男の取り巻き三人連れて歩いている」

「へえー！ やってみるもんだね。これで体を張つたあのデートが、無駄じやなかつたって思えるよ。

……なんて言えるかあ！ 思い出しちゃつたじゃない、ジプシーのばか！

「あと、俺の憶測を入れない事実報告だけをすると。家族構成は、製菓会社の専務の父親、専業主婦の母親、そして彼女の三人家族。先日の土日が彼女の高校の文化祭で、月曜日の今日は代休。朝からここに来られる訳だ。ちょっとだけ雑誌のモデルもしているって話だから事務所も回ってきたが、一応過去の男関係は出なかつた。取り巻きとファンっていうのだけ。……これが意外と曲者かもつて位かな。でも取り巻きも含めて裏世界とのつながりは今の所全くなし！ 大まかには以上。夢乃とほーりゅうは？」

「似たようなモノね。この様子じゃ、ほーりゅうも同じでしょ」「うん！ ……なんだ、明子ちゃんに聞いてきてつてのは、昼休みにこいつやって相談する為の情報収集だったんだあ。つて事はさ、まとめると、やっぱりこの高橋さんが、文化祭後からジプシーの後付け回していたつて事で決まりだよね。解決じゃない？」

私は勢い込んでジープシーに向かつて言つた。でも、それまで席についてから、お弁当に手をつけず、眼を瞑り腕を組んで、皆の話を聞きながら考えていたジープシーは、顔を上げて言つた。

「京一郎、お前は百パーセント本当に、ただの彼女のストーカーだと思つているか？」

間を置いて、真剣な顔つきになつた京一郎は答えた。

「俺は、今の段階では九十パーセント、一般人女子高生のストーカーだと考へている。残りの十パーセントは……俺の勘で、彼女は一般的の女子高生じやないような気がする」

ジープシーは、頷いた。

「俺も、残りの十パーセントの理由で、敵だと思つ」「何でよ。どうして男一人がそんな事、勘でわかるのさ？」

私は訝しげに聞いた。夢乃も頷く。

「あの女が、自分の眼を見て返事をくれと言つた時にジープシーが思い出したかのように、平手打ちを食らつた頬をなでながら言つた。

「眼で俺に術をかけてきやがつた」

「あの女、俺に平手打ちを食らわす前に、信じられないって言っただろ？」

呆気にとられている私と夢乃に向かって、ジプシーは、彼女の戸籍や家系図などの資料に目を通しながら続けた。

「俺が術にからなかつた事を、あの女は信じられないって言つたんだ」

術。

つて事は彼女は、裏世界関係の敵じゃなくて、陰陽道関係の敵つて事？ とっても可愛い女子高生にしか見えないのに。そんな力があるようには見えなかつた。

「京一郎が調べてくれた資料を見る限り、彼女の家や血縁は陰陽道とは係わりがない。ただ、陰陽術の中には知識や力のない素人でも使える、蠱毒や犬神のような術も結構あるから、もう少し調べる必要がある」

「ジプシー、あのさ」

私はどうしても気になつたので、話の途中だつたけれども聞いてみた。

「彼女、あの一瞬で、どんな術を眼で仕掛けてきたの？ それにジプシーが術にからなかつたつて事は、ジプシーの方が陰陽師としての力が上だつたつて事？」

腕を組みながら、ジプシーは答えた。

「断言できないが、あの状況を考えたら傀儡術か。俺にイエスの返事を出させたかつたんだろ。だから彼女の眼を見る前に、俺は自分がかけている眼鏡に防御結界をはつた。力や状況判断としては、あの時点では俺の方が上だつたな」

「……傀儡術って、何？」

「傀儡術は、簡単に言えば、相手を操り人形のように術者が動かす

「との出来る術だ」

……彼女、そんな術を使ってまで、ジプシーと付き合いたかつたのかな？

恋する乙女は手段を選ばないのか。相手が自分の事を思つてもいななのに、付き合つのもどうかと、私は思つんだけれどなあ。

私がおとなしくなつたので、ジプシーが京一郎に視線を移した。

「京一郎は、どう思う？」

京一郎の考える、今回の彼女の中の不透明な十パーセント。ジプシーと同意見なのかな。

「ジプシー、おまえさあ」

いつになく真剣な顔で、京一郎がジプシーを見た。

「今回の彼女は、おまえの性格上、敵としかみなしていねえだろ」「？」

「……何が言いたい」

珍しく細部において意見の食い違いが出たのか、京一郎とジプシーノの視線がぶつかる。

視線をはずさずに京一郎は言った。

「おまえの中の人間のカテゴリーは、敵か味方か一般人の三つに分かれでんだる。そりやま、今回の彼女は敵の部類だろうが、けれど、俺の考える残りの不透明な十パーセントは、人間としてのカテゴリーとしては、女、だ」

意味が理解できないという顔をして、ジプシーは京一郎を見る。

「まあ当たつてりや、俺の言いたいことは追々わかるだろうが、俺の勘が外れてりや、やり方はいつも感じでいい。お前にまかせるしばらく、無言で一人は見つめていたが、ジプシーが視線を逸らせて言った。

「わかった。考慮に入れておこづ。京一郎の勘だからな。ただ、」

「俺にはただ単に、女と言われてもなあ……」

なんだ？ なんか何故だかジプシー困つてる感じがするぞ。これは面白いかも。

私も今の意味、わかんないけれど。

放課後、私と夢乃は甘味処に行こうとして、明子ちゃん達から寄り道を誘われた。

もしかしたら、朝の出来事に興味津々の明子ちゃん。私達からジプシーの情報や動向を知りたいのかも。

「相手の片鱗が見えた分、結構精神的に落ち着いている。俺についている必要はないから行って来い」

ジプシーはそう言って、教室で、私と夢乃と別れた。京一郎は、先に教室を出たのか姿が見えない。そう言えば、午前中はバイクで情報集めに走り回つたって言っていたからなあ。普段は歩きで学校に来ている京一郎も、移動手段の変わる今日は別行動になるつて事だな。

私と夢乃は、今日に限つて皆が別行動だといつ、この事をあまり深く考えていなかつた。

チャプター・16 ジプシー

自宅から俺が通っている高校まで、普通に歩くと三十分程かかる。電車では一駅分。途中バス停もあるが、あえて普段から徒歩で通っている。

いつも途中まで一緒に歩いて帰る京一郎は、今日はバイクだった為、別行動だ。

ほーりゅうと夢乃も、クラスの女子と甘味処に寄ると言っていた。予定もない俺は、ゆっくりと歩いて帰る。

ようやく姿を見せた敵。だが、俺は『敵』と呼んだが、京一郎は『女』と言った。当然性別だけの意味じやない。俺には京一郎の言葉の意味がよくわかつていながら、普段から勘の良い奴の事だ。何か思い当たる節があるのだろう。

それと、『敵』である彼女。彼女が首謀者として一人だけなのか、あるいは、複数の仲間がいる組織であれば、どの辺りの立場の人間なのかな。確認したいことはまだある。

そんな事をつらつら考えながら歩いていると、当の『敵』である高橋麗香が、先の道の壁に寄り掛かり、こちらを見ながら一人で立つていた。

なるほど。確かに、もう姿を隠す必要もないからな。

朝と同じ防御結界になるが、ないよりはましだろう。何度も同じ手が通用するとも思えないが、眼鏡の真ん中を左手の中指で押さえ、真言を唱える。

そして俺は、必要以上に彼女の眼を見ないように、通り過ぎようとした。

「聴君、今朝は頬を叩いたりしてごめんなさい」

彼女はそう言いながら、俺の横に並んで歩き出した。

「付き合いは断つたはずだ。それに、下の名前を呼ばれるのは好きじゃない」

とりあえず突き放す。

「じゃあ、友達が呼んでいるように、私もジプシーって呼んでいいですか」

いきなりあだ名で呼ばれるのも気に入らない。この場合は苗字だろうと思つたが、そう言つた事で、この女に苗字を連呼されるのも、何故だか気に食わない。無視する事にして、歩調を速める。本当は、敵だか何だかわからない女に背中を見せたくないところだが、何らかの攻撃をされたら、最初の一撃位、意地でもかわしてやる覚悟で、あえて前を歩く。

「私、文化祭でジプシーを観た時から一目ぼれしちゃったんです。あと、あなたが道で女の子を助けた事、あつたでしょう？　あの時も偶然そばで見ていたんです」

……その辺りは、ほーりゅうの予想通りか。へえ、あいつにも女の勘つてのがあつたんだ。

「何度か、学校帰りに待ち伏せしちゃつたんです。遠由からでも会いたいなつて。……まだ私がどんな女の子かも知らないでしょう？　話だけでもしませんか？」

俺は無言を通す。話をする気が起こらない。本當は、この機会に何かしら情報を引き出すべきなんだろうが。

何故だろう？　俺の本能が、彼女の話を拒絶するように警告している。

「やっぱり、彼女がいるんですね。……私は自分の学校の文化祭帰りだったんですけど、土曜日もジプシーをみかけたんです。女の子と二人で一緒にいる所を。普通、彼女じゃない人とキスしないですよね」

やけに手の内を明かすようにしゃべつてくる。何が目的だ。

いや、それ以上に、俺は彼女の声を、これ以上聞きたくもなかつた。

俺の中の本能がひつきりしなしに、この彼女の話をやめさせぬよう警告してくれる。

突然、この警告の意味に思い当たった。

だが、その時にはもう、彼女は術を発動していた。

「ジプシー。私を見なさい」

俺は言われた通りに足を止め、後ろから袖をつかんだ彼女の方へ、ゆっくりと振り向いていた。

……この女！

眼だけではなく、声でも術を発動できるのか！？

振り返った俺に、彼女は少し背伸びをして、ゆっくり唇を近づけた。

無抵抗の俺に、彼女は瞳を閉じて唇を重ねてくる。
やわらかい唇の感触と、かすかにフローラルの香り。

彼女からの、ゆっくりと何度も角度を変えての、触れ合わせるだけのキス。そんなに長い時間ではなかつたはずだ。

突然の爆音に、彼女がびくっと身体を震わせた。

俺と彼女のすぐそばを、後ろから来た黒いオートバイがかすめた。爆音と一緒に身体の束縛から解放された俺は、通り過ぎざまに放られたフルフェイスヘルメットを掴み、オートバイの後を追って走り出す。彼女が慌てて言葉を発する前に、急ブレーキをかけて止まつたオートバイの後ろへ、俺はヘルメットをかぶつて飛び乗った。そのまま急発進するオートバイの重力に振り落とされないようにして、俺は京一郎の腰に腕を回す。

遠ざかる風景を映すミラーの中で一瞬、悔しそうな彼女の顔がよぎった。

チャプター・17 ジプシー

ここは、俺が前の土曜日に、モーリッシュを連れて来た大きな公園だ。ただ、巨大な遊具が置いてある所ではない、散歩道だけが見える側だった。

京一郎は、公園の囲っている柵ぎりぎりそばにオートバイをつけると、ヘルメットを脱ぐ。俺も京一郎の腰に回していた手を放して、同様にヘルメットを脱いだ。

「公園の中。ベンチがあるだろう?」

京一郎がそう言ったので、俺はオートバイの後ろから降り、公園の低い柵を乗り越え、ベンチに向かう。その間に京一郎は、公園の外に設置されている自動販売機に向かいながら、俺に聞いてきた。

「ホット？ アイス？」

「アイス」

俺の普段飲んでいる銘柄を確認して、一本の缶を手にした京一郎も、同じように柵を跨いで公園に入ってきた。

ベンチにたどり着く途中で俺に一本、ブラックコーヒーを投げてみこす。

「さんきゅ」

そう言いながら受け取り、俺は大きなため息をついた。

「役得役得。ほーりゅうと夢乃には、黙つといでやるつて」

そう言しながら、京一郎は俺と並んでベンチに腰をかけた。

「俺が、さつきお前の前に出た理由は二つ」

しばらく黙つてベンチに座り、コーヒーを飲んでいたが、急に京一郎が俺に言った。

「一つ目。いつものお前なら俺にこう言つだら、なぜ止めてきた、最後まで姿を見せずに彼女のアジトを突き止めるまでやれって。そういう言わぬお前が本調子に見えなかつたからだ」

「もつとも、普段の俺ならそう言つだらう。言い返す言葉がない。「一つ目の理由。やり方が極端だが、はたから見ていたら、実際彼女は本当にお前の事、好きなんだとは思つ。そう思つていいのは、当の本人のお前だけで。彼女が純粋な恋愛感情だけでお前に接近しているなら個人的な事だから、俺が余計な口を出す問題じゃないと思つんだが。……でも何か彼女からは、それ以上のものを感じる」「だから、あの女が単に、好きだという感情以外で動いているからじゃないのか？」

しばらく考えていた京一郎は、俺に言つた。

「お前、恋愛感情まったく抜きでの男女の駆け引きってのは、経験あるだろ？」「…まあ、それは

確かに立場上、全く抜きには出来ない。ただ、感情が入らないから、全ては計算尽くで動く。

「だが、相手がここまで……術を使つてまで、感情をぶつけて来ている恋愛、お前は未経験だろ」「…なぜ、そう思う？」

京一郎はベンチから立ち上がり、公園内に設置されたゴミ箱の中へ、うまく缶を投げ入れる。

それから、俺の方を見て笑つた。

「今のお前の中の動搖つてのが、傍から見ていてよくわかるから。三年前の俺が似たような経験、したからや」

俺が今の言葉の意味を考えている間に、京一郎は一人、公園の柵を乗り越える。

「まあ、俺の言つ彼女の中の『女』ってのは、そういうこと。感覚的なモノだから、なんて表現すればわかりやすいのかなあ」

そう言つて、京一郎はオートバイに跨り、ヘルメットをかぶる。

「まあもうちょっと、彼女を『敵』としてだけではなく、別の角度から見てみるよ。何か見えてくるかもしねえからさ」

そう言つて、京一郎はオートバイを発進させた。

京一郎の姿が見えなくなつた頃、俺はふと思い当たつた。

「……え、三年前……って事は何だ？ 今の俺の恋愛経験値って、

京一郎の中一レベルつて事か？ ……マジかよ！」

俺は、がっくりとベンチに崩れた。

夢乃の家まで帰つて来たら、もう外は薄暗くなつてきていた。今日も夢乃の家で、夕食を「」馳走してもらつちゃう。外科医の私の叔母、仕事が忙しいからなあ。一緒に食べる機会があまりない。外から帰つて来て、夢乃の部屋へ入る前に、ふと奥のジプシーの部屋の扉に眼が行つた。学校の授業が終わり教室で別れた後、まだ帰つてきていみたいだ。もつ夜になるのに、どこ、うろついているのかな。

学校の帰りに、明子ちゃん達と甘味処に寄つて來たから、私も夢乃もあまり空腹感がない。

夢乃のベッドの上に仰向けに寝転がつて、私は氣になつていた事を夢乃に聞いた。

「夢乃つて、今日の京一郎の話の意味、わかつた？」

残念ながら、私はやっぱり理解力がないのかな。はつきりと意味わからなかつた。

「そうね。私の考えだけれど」

夢乃は制服の上着を脱いで、ハンガーにかけながら言つた。

「要は、恋は盲目つて事じやない？ 好きになつたら、その人しか目に入らない。起こす行動もその人中心になるでしょ。でも、十六歳の女の子の考え方だから、その相手の為を思つてじやなくて、逆に相手の迷惑を考えずに自分の欲望を満たす為の行動をとるかも。そこが今回問題だつて京一郎は言つているんじやないかな」

「ふうん。京一郎つて、そんなに女の子の恋心に詳しい奴だとは思わなかつたな。……自分の為にかあ」

ジプシーへ告白する為に、知らない学校の教室まで乗り込んで来た彼女。恋は盲目、相手のいやな面が見えないばかりか、周囲も見えないつて事か。恋する乙女は怖いなあ。

恋する乙女、その辺りが京一郎の言っていた、氣をつけないといけない感覚的な彼女の「女」の部分かな。

あつさりジプシーは付き合いを断つたけれど、当然彼女は「このまま諦めないだらうな。

「今回の事件で、ジプシーと京一郎って、かなり考え方が違うんだ」「京一郎はともかく、ジプシーは私の知っている限り、今のところ恋愛に興味がないみたいだから。文化祭後にもらつた沢山のラブレター、未だに全部未開封で部屋に積んであつたわよ」

ジプシー、もらつたラブレターを全然読んでいないなんて。相変わらず、女の子を廊下にする奴だなあ。

なんて考えながら、私は廊下に出てお手洗いに向かう。廊下を歩いていると、偶然目の前にあつた電話台の上で電話がなつたので、夢乃の家の物だけれど、出た。

「もしもし、佐伯です」

うん。ちゃんと苗字を間違えなかつたぞ。

でも、相手は何も言わない。携帯か何かで電波でも悪くて、聞こえないのだろうか。

「もしもし?」

もう一度言つと、やつと声が聞こえた。

『俺』

「この家で、俺という奴はジプシーしかいない。

「どこで何やつてんの? もう遅いから夢乃もお母さんも心配するよ

声が小さくて聞き取れない。

「何? もう一度言つてよ」

何か様子がおかしいかも。もともと感情表現の薄い奴だが、いつも感じが違う。

ようやく電話の向こうから聞こえた言葉。

『悪い、学校に戻つてくれ。夢乃も、お前も』

そこで、電話は一方的に切れた。

私は受話器を握つたまま、途方にくれる。

「ほーりゅう、電話は誰から?」

夢乃が部屋から出てきて、声をかけてきた。

私は受話器を戻しながら、そのまま伝える。

「なんか、いつものジプシーじゃないなあ」

「ちょっと考えた夢乃は、私に言つた。

「何か理由があるからだろうね。今から学校に戻るつか。外はもう暗いけれども、一人そろつてなら大丈夫だろうし」

私は頷きながら言つた。

「あ、でも夢乃のお母さんに何で言つ? 黙つて出ちやう? それとも忘れ物を取りに行くとか。あんまり心配かけたくないよねえ」

夢乃は、母親のいるキッチンに向かいながら言つた。

「どんな事でも嘘は言わずに全部話すつて約束。そういう条件でジプシーの手伝いをお母さんから許してもらつてているから、はつきりジプシーに呼ぶて学校に行くつて言つてくるね」

……そつか。そうだよな。考えたら夢乃は一人娘なんだもん。親は心配するよね。

海外にいる私の両親、普段は電話も何も、私から殆どしていなければ、心配しているかなあ。叔母からの連絡は絶えずしていると思つけれど。

そして、後で、つづく思つたよ。

お出かけする時は、ちゃんと家の人に、目的や行き先を言つてから出かけるべきだなつて。

チャプター・19 ジプシー

すっかり日の暮れた頃、家に帰り着くと、玄関先で夢乃のお母さんに言われた。

「あら？ さつき学校で待ち合わせだって電話してきたんでしきう？ 夢乃とほーりゅうちゃん、もう学校に向かっているわよ」

一瞬で血の気が引いた。

そして動搖が顔に出ないよう、俺は普段通り無表情で穏やかに言った。

「あれ、うまく伝言が伝わってなかつたんだな。すれ違いになつたみたいだ。鞄を置いたら、一人を迎えてきます」

俺は足早に階段を上がり、自分の部屋に向かう。

あの女、ほーりゅうと夢乃に矛先を向けた。

俺の名前で一人を呼び出しやがつた。

怒りがあるが、ありがたいことに、俺はかえつて、今の一瞬で頭も冷えた。

今回は最初から後手に回つたせいか、消極気味で調子も狂つた。今も向こうの方が行動が素早い。この様子なら、俺が動かなかつた数日間よりも前から、もしかしたら文化祭の直後から全て考え方下準備をしていた可能性もある。

まだ正体の不確かな相手だが。

この道で生きると決めたプロの意地をみせてやる。

先に夢乃の部屋の扉を開けて、机の上を見た。やっぱり普段の俺と同じで、学校へは携帯を持たずに出かけている。

俺は自分の部屋に入り、上着を脱ぎながら、俺の携帯から京一郎

の携帯にかける。

『おう』

三回のホールで出る。

「京一郎、今どこだ」

『家』

「すぐに学校へ出て来られるか」

一瞬考える様子が伝わってきたが、返つてくる言葉は簡潔だ。

『単車なら五分』

「OK。少し前に夢乃とほーりゅうが学校へ向かつた。途中で会え
ばその場で足止めして俺の携帯に連絡。会わなければ高校裏門で俺
と合流。俺も用意が出来次第向かう」

『了解』

電話が切れる。

相手の確かな能力がまだ確認出来ていないので、念の為に俺は、
すばやくホルスターを脇に吊る。

多分陰陽道関係の術だと踏んだのだが、彼女の術の使い方が、ま
ず俺とは違う。俺は正式な修行過程を行っていない為か、真言や印
契や陣・梵字や独鈷のような媒体を使わなければ、スマーズな術の
発動が行えない。

従兄弟のトラは陰陽道直系だが、奴はどんな術や技の使い方をし
ていただろうか。

あるいは、今回の彼女は陰陽道の術ではなく、例えば、ほーりゅ
うや……我龍のような別の力なのだろうか。

シリンドーの中の弾丸チェックをしてホルスターに戻した。半分
はお守り代わりの意味もあるリボルバー。使わないに越したことは
ないが。

上着を着直し、左袖に隠し武器として独鈷を持った俺は、階段を
駆け下りる。

裏門で、京一郎が一人で待っていた。

「あいつらの通りそうな道と高校の周りを回ってきたが、いないな。
もう学校に入つたんじゃねえか？」

「校内か」

そう言つて俺は校舎を見上げた。充分に日が落ちて、静寂と暗闇
の中で妙に壁が白く浮かび上がる学校。

見上げている俺の顔を、京一郎は見つめる。

俺は、京一郎に視線を走らせて言つた。

「大丈夫。充分頭の芯まで冷えている。今から、こっちのペースに
巻き返す」

そして携帯を取り出し、音を消してバイブ機能のみに切り替える。

「部活の生徒は、もういない時間帯だな。式神召喚の陣を描くより
一手に分かれ探した方がはやい」

京一郎も頷く。

俺と京一郎は裏門を通り、京一郎は生徒棟へ、俺は職員室棟へと、
足音を消して走った。

チャプター・20 ほーりゅう

「ほーりゅう、詳しい待ち合わせ場所、電話の時に聞かなかつたの？」

下校時間はとっくに過ぎている為、生徒の姿のない暗い校内は、昼とは違う雰囲気をかもし出す。

静か過ぎて妙に響く空間の為、夢乃にそう聞かれた私は、さすがに声をひそめて言つた。

「学校へ来てくれってだけだつたよ。前にここで待ち合わせた事あるし、てっきり同じ場所でいいんだと思つたしさあ」

一日前の土曜日に、ジップシーと待ち合わせをした生徒棟一階の階段下で、私と夢乃是立ち尽くす。

ここから眺める事の出来るテニスコートは、土曜日はクラブの交流試合があつたせいか賑やかだったのに、今はひつそりとして人影がない。

「でも、多分待つているはずのジップシーがいないつて事は、ここの中場所じゃないって事よね。……教室かしら？」

「今日、最後に別れたのが教室だもんね。そつかも」

私と夢乃是階段を上がり、四階にある一年の教室へ向かう。

教室には、鍵がかかっていた。

「当然と言えば当然か。たいてい私が毎朝職員室へ、鍵を取りに行くものねえ」

夢乃がつぶやいた。私は思いついて言つ。

「鍵がかかっているって事は、ここでもないよねえ。それじゃあ、お昼にお弁当を食べてる血溜室かなあ？ 色々打ち合わせつて、よくそこでしているしね」

そういうながらも私は、廊下から窓にはり付き、教室内に動くモノがないか、目を凝らす。

その時、耳が、音を捉えた。

「……夢乃、ピアノの音が聴こえる」

夢乃も頷いた。夢乃是、神経を集中させるように俯いて呟く。

「多分音楽室からだよね。……それに、この曲、聴いた事がある」

そのまま耳を傾けていた夢乃が、はっとした。

「この曲… 私、初めての十六小節ほどだけれど、昔、小学生の頃にピアノの練習曲として弾いた事がある…」

口を押さえて、そう言った夢乃に、私は聞いた。

「何？ そんなに驚くような曲なの？ どんな曲？」

夢乃是、小さな声だけれども、はつきりと言った。

「リビナー作曲の『ジプシーダンス』」

ジプシーに呼び出された学校で聞こえるピアノ曲・『ジプシーダンス』。

私は妙な胸騒ぎを覚えた。

「……これって、もしかしてジプシーが弾いているの？」

「ん~。ジプシーはピアノを弾けるけれども、この曲を知っているかどうかは、わからないなあ」

「え？ 本当にジプシー、今聴こえている曲のレベルは弾ける訳？」

本当に、何でも出来る奴なんだ。

半分は冗談で言ったのに。

「そうね。最近は殆どピアノに触っていないみたいだけれど。一時期は一年位続けて、『幻想即興曲』ばかり練習しているのを聴いた事ある。基礎は習っていたみたいだけれど……なんて言うか、その後は我流で練習を続けていたみたいだから。弾き方は結構荒っぽかつた気がするな」

「……『幻想即興曲』。夢乃、私、その曲も知らないかも」

「多分聴いたら、何処かで耳にした事のある曲だと思うけれどね。」

……どうする？ 音楽室まで行ってみようか

「うん。何となくだけれど、無関係って感じがしないもんね」
そう言って、私と夢乃は音楽室のある方へ身体を向けた時、周囲

を複数の人影に囲まれていて、気がついた。

「え？」

私は一瞬、状況が把握できなかつた。

下校時間の過ぎた暗い校内で、数人に囲まれるつて。

……もしかして、これって、とってもまずい状況？

……あの電話、偽の呼び出しだつたんだ！

私は、その事に気が付くのが、遅かった。

最近のジプシーの様子が今までと違っていたから、何となく電話に疑いを持たなかつた。普通に考えたら、あんな電話をかけてくる人じやない。

啞然としているほーりゅう。まだ何が起こったのか理解出来ていなかかもしれない彼女と私は、顔の識別がはつきりしない位の暗闇の中、学校の廊下で五人の男子生徒に囮まれていた。

それでも、窓から入る街のわずかな明かりで、私は五人の顔をチエックする。確かに全員、ウチの高校の運動部所属の一、二年。なんとなく見覚えがある。所属の部はばらばらだ。部活が終わつた後に下校せず残つたのか、それとも部活をせずに残つたのか、全員ユニホームではなく制服を着ている。だが、その中の一人は剣道の竹刀を持つていた。

まずい。

「ほーりゅう、逃げて」

私は彼女を背にかばつて言つた。

「え？ 何で？」

ほーりゅうは聞き返す。……ここで、ほーりゅうに天然ボケを発揮されても困るので、簡潔にはつきり言つ。

「ここに、この学校に今、ジプシーはいないわ。偽の呼び出しだつたのよ。そして私達二人共そろつて捕まる訳にはいかない。私が彼らの注意を引き付けている間に、用務員でも警備員でも外の人間でも誰でもいいから、助けを呼んで。早く！」

「あ……私も戦う！ だつて私には」

私は連中の動きに注意を払いながら、ほーりゅうの肩を押して言

つた。

「行きなさい！ ここで貴女の力が暴走したら、多分私には止められない。文化祭の時のような偶然は起こらないんだから！ 出来る限り相手にも怪我をさせたくないでしょ？」

ほーりゅうはあの時の出来事を思い出したらしい。ゆっくりと後ずさりする。

「夢乃、ごめん！ 頑張って助けを呼んでくる！」

そう言つてダッシュしたほーりゅうの後を、三人が追いかけようする。

その足元へすばやく身を落として、円を描くように私は足払いをかけた。一人はひつかかってくれたが、僅かに遠くの一人には届かない。しまった！

ほーりゅうは、音楽室とは逆の正門の方向へ廊下を走つて行き壁に突き当ると、曲がつて二階へ降りる階段へと姿を消した。追つて行つた男も一人、同じように消えていく。

ほーりゅうと男が消えた方向を背に、倒れた一人がゆっくり起き上がり、私の方に向いた。

私は、昼休みの時に聞いた、ジプシーの言葉を思い出す。

この連中の、次の行動を起こす時の緩慢な動きは、裏で操り人形のように術者が動かすという傀儡術の為に違いない。ならば、おそらく彼女・高橋麗香の仕業。

いつもジプシーの近くにいる私とほーりゅうが、目をわりつて事ね。

追っ手を一人取り逃がしてしまったけれど、無事に、ほーりゅうは逃げ切れるだろうか。

そう考えながら、私は自分の置かれた状況を確認する。もうほーりゅうの事は、ほーりゅう自身に任せることはない。

四人に囲まれた形で、私は両手の五指を広げ、ゆっくり半身にな

り基本の構えをとる。

私は自分の合気道の実力を充分に知っている。この四人を倒せるとは思っていない。せいぜい四つ五分の足止めが限度。それでもほーりゅうが逃げ切れる時間稼ぎになれば。

今から、道場での練習じゃない。

私は、ジプシーから教えられた通り実戦向けに、基本の構えからさらに腰を落としつつ、両手の手刀を高めに構えた。

チャプター・22 ほーりゅう

明かりのない静寂の中、遠くで一際響くピアノの音を聴きながら、私は学校の廊下を走る。

助けを呼ばなきや！

この場合、職員室へ行けばいいんだろうか？ それとも学校を出て外へ？

とりあえず、一階まで降りちゃおう。

夢乃が他の男達を引き付けてくれている間に、早く助けを呼ばなくちゃ！

私は四階の廊下の端まで走って来た後、三階へ向かう階段を駆け下りた。

その途中の踊り場で、追いついてきた一人の男に、後ろから一の腕をつかまれる。

「やあだ！ 放して！」

私は思い切り腕を振つて、逃れようとした。

他に助けてくれる人のいない、一人きりで味わう恐怖。

そう思つた途端に私は、自分の周りの空気が変わるのを感じた。

……！

やばい。

これは私の、制御できない超能力発動の前に起くる感覚だ。

先ほど夢乃に言われた言葉で、前の文化祭の一件を思い出す。

ここは学校内の、三階と四階の間の狭い踊り場だ。だだつ広い外ではなく、さらに地上一階じやない。この男を、今ここで私の超能力で吹つ飛ばしたら、下手をすれば大怪我させてしまうかも。それじゃあ、前の文化祭の時の二の舞だ。

文化祭の時には、暴走した私の力を、偶然にも居合わせたらしい

我龍が惨事にならないように助けてくれた。今、こんな時間にこんな所で、助けてくれる人がいる訳がない。我龍もジプシーもない。ここでは私一人だけ。

どの位の規模でどう発動するかわからない超能力を、今ここで出す訳にはいかない。

そう言えばジプシーが文化祭の舞台の後で言っていた。私に向かれる攻撃や殺氣が大きくなると、比例して私の力も大きくなる可能性があるみたいな事。だから、私は一生懸命、能力発動の原因にもなる恐怖心をなくそうとした。

能力が出ても、出来るだけ被害を少なくしないと！

そして私は、めちゃくちゃに腕を振って、つかんだ男の手を振り切ろうと暴れる。

だが、男の力は強く、逆に私は踊り場の床に引きずり倒された。このまま押さえ込まれたら、多分無事じやすまい。

まだ自由だった足で、必死に男を蹴り上げた。何度も蹴った足が、男の向こうづねにでも当たつたらしい。男の手の力が緩んだ瞬間に、私は這い出し、立ち上がって下り階段に向かい、駆け下りようとした。

その時、後ろから足首をつかまれ、再び私は両手を床について倒された。

限界だ。

首から下っているロザリオの中の石が、きっと光を放っているに違いない。制服の上から握り締めた感覚が、いつもより熱を持つているのを感じた。

ここまできたら、自分ではもう止められない。

私の周りの空気が一変、不穏な風を巻き起こし出して、内側から一気に噴き出す感覚を覚えた。

私をつかんでいた男の身体が宙に浮き、目の前で階段下の三階へ吹き飛ばされる。同時に起こった周囲の空気が渦を巻き、踊り場の窓を全て内側から割つていった。

吹き飛ばした男へ、怪我をさせたくない」と反射的に手を伸ばした私は、だが手が届くどころか自分がバランスを崩し、階段上から転がり落ちてしまった。

高い所から落ちるのではなく、もともと倒れた状態から階段を転がつたので、比較的ぶつけめ事もなく、じろじろと三階まで横に転がり落ちる。

それでも、最後の最後で、床に頭を打つたらしい。

これが、星が飛ぶつて言う状態なんだ。

私は、三階の暗闇の中へのびる廊下に倒れている男と、目の奥にチカチカとする明るい点滅を見ながら、意識が暗闇に落ちていった。

チャプター・23 ジプシー

いない。

ほーりゅうと夢乃の二人がいるのは校舎のこじりではなく、京一郎の向かった生徒棟の方か。

俺は、電気の消えた職員室棟のそれぞれの階の廊下を確認しながら、一気に階段を四階まで駆け上がる。そして、四階から各教室の中を窓からチェックしつつ廊下を突っ切り、三階、二階と降りてきた。

一階の職員室前では、さすがに走るのをやめ、静かに廊下側の窓から様子を伺う。

うちの高校は、結構下校時間などにはいつるさい。なので下校時間をとつぐに過ぎた今、職員室の中にも教師の姿はない。

となると、この時間で学校内にいるのは、夜間の見回りの為に別の部屋で待機しているであろう用務員か警備員位か。

俺は、生徒棟に移動する事にして、一階の渡り廊下の方へ向かう。そして、渡り廊下を通ろうとして、音に気がついた。

これは、……ピアノだ。

聴いた事がない。知らない曲。

音楽室は、生徒棟の四階の一一番端で、ここからは最も遠い場所だ。俺は渡り廊下の手すりに手を掛け、身体を乗り出して音楽室を仰ぎ見た。

暗い夜空を背景に、白い校舎の角に位置する音楽室が浮かび上がり、その窓が黒く開いているのが見えた。それでピアノの音が外に、もれ聴こえているのか。

この時間にピアノ練習とは、普通にありえない。今回の呼び出し

に無関係ではないだろう。

俺は音楽室に行く氣で、生徒棟への入り口の方向に顔を向けた。
そして、前方に複数の影を見つける。

空手部の一年が二人。二人とも隣のクラスの男で顔は知っているが、俺はどちらとも話をした事は一度もない。そして別の人には、サッカー部のキーパーをしている一年。こちらも顔を知っているだけだが、資料上では彼は確かに類を見ない程の部活熱心な男のはず。そして、野球部の一年が一人。こちら一人は別々の違うクラスのはずだ。まだ野球部内でも補欠で、全くやる気の見られない連中だったはず。こちらの二人とも俺は話をした事がない。

そんな五人が渡り廊下の、生徒棟の入り口に背を向け、ふさぐ様に立っていた。

まず、気配がなかつた。

俺とした事が、すぐに気がつかなかつたとは迂闊だつたが、連中の様子が尋常ではない為か。この存在感のない連中の様子からみて、彼女・高橋麗香の仕業、傀儡術とみて間違いないだろう。この複数を同時に操るとなると……今聽こえてくるピアノ音が術を発動しているつて事が。

現状の問題は、操られているこいつらを、果たして叩きのめして良いのだろうか。俺が、同じ学校内で顔を知っている連中なだけに、そう躊躇する事を見越してこの連中を使つたとしたら、あの女、結構いい性格をしていやがる。

俺は、出来るだけ怪我を負わせず、戦闘不能にさせる程度にどどめるつもりで構えた。

親しい間柄でもないだろうに、連中は申し合わせたように、無言でタイミングよく殴りかかってきた。空手部の二人の構えと攻撃は確かに隙がない。主将をしている生徒会長の教えが良いのだろう。

その一人の動きをメインに、俺はとりあえず全ての攻撃を避けながら、様子を伺う。そして、野球部の一人の大きな隙をかいくぐつて、そいつの鳩尾に手加減しつつ足刀蹴を蹴り込んだ。廊下を軽く吹っ飛んだ後、起き上がる気配がない。……操られているって事は、そのうち、ゾンビのように起き上がつてくるかもしれないな。油断は出来ないって事だが。

まず、一人。

その時、目の前に残り四人がいるはずなのに、背に殺氣を感じた。頭で判断する前に、反応した身体がとっさに前受身をし、俺の立ち位置を変える。

そして相対した先で、どう見ても怒り心頭の生徒会長が、空振りで蹴り終わつた片足を宙に浮かせたまま、俺を睨みつけていた。

「……江沼、また貴様か！」

「な……足立先輩！ 何故ここに」

そう言つた途端、一瞬の隙が出来た俺は、四人の中のサッカー部の一年に右手首をつかまれていた。つかまれたと同時に俺は、反射的に身体が動き、つかんでいた彼の右上膊の裏の急所を蹴り上げていた。

しまつた！ 折れていなけりやいいが。

それでも、手を放したが痛さを感じてはいないうな表情の顎に、俺は左の拳を手加減して叩き込んだ。頼むから、これで脳震盪でも起こして意識を失ってくれ。

その後、俺は左の横三枚に激痛を感じた。

思わず脇腹を押さえて片膝が床についた俺を、会長が拳を引きながら構えなおし、冷ややかに見下ろしていた。

チャプター・24 ジプシー

激痛の為に片膝をついている俺を見下ろしながら、生徒会長は居丈高に言った。

「今日も朝から騒ぎを起こしてくれたようだな。昼休みに詰問に行けば、貴様は逃げた後だ。さて、俺は生徒会室で仕事をしていた為に、この場に偶然居合わせたのだが。丁度いい。今からたっぷりと事情を聞かせてもらおうか」

……会長のこの様子では、彼女の傀儡術にはかかっていないようだ。まさか自分の意思で高橋麗香に協力している訳でもないだろう。会長がこの場にいるのは本当に偶然か。

俺は痛む横腹を押さえながら、ゆっくり立ち上がった。

高橋麗香に操られている三人は、仲間の一人が倒された事がわかつているのか、俺と会長から距離をとつて、様子を見ているようだ。口は聞けないらしい連中だが、状況判断は出来ているのか？

不意に、俺の耳は遠くの音を捉えた。目の前の会長の表情は変わらないから、彼には聞こえていないようだ。……これは、ガラスの割れる音。状況やタイミングからみて、恐らく割ったのは、ほーりゅうに違いない。あの音の位置は、やはり生徒棟だ。

俺は三人の連中の動きを眼の端で捉えながら、会長に言った。

「足立先輩、話は、とりあえずこの状況から抜けた後で」

そんな俺の言葉には聞く耳を持たない様子で、会長は言った。「この乱闘も、貴様が原因なんだろう？」

俺をつかもうとする会長の手から、俺は身体を退いて逃れる。

どうやら、逆らつたと感じたらしい会長は、本気で一度、俺を叩き伏せる気になつたのが、その表情から読み取れた。

まずい。

高橋麗香に操られた三人とは別口で、空手の実力がある会長も相

手か。

今、手加減をすれば、俺がやられる。

上段中段と正拳での連続攻撃を、さすがに体捌きだけではかわしきれずに上受下受と払いつつ、俺は後ろにさがつて防衛間合いを取る。その間合いを予想していたらしい会長の右の廻蹴が飛んできた所を、あえて俺もタイミングを合わせ、更に左足を退きつつ右の廻蹴の前足底で、会長の蹴りを真っ向からはじき返した。狙つた俺の方の力が強かつたらしく、不意を突かれた会長の軸足がよろめく。すかさず俺は攻撃間合いまで踏み込んで、体重を乗せた左の外腕刀で会長の胸を狙い、壁際まで押し飛ばした。背を壁にぶつけた会長へ更に踏み込み、反撃を許さぬ一瞬の間で、はじき飛ばした会長の喉仮を壁に向かって動かぬ様に外腕刀で押し付ける。

そして俺は、右手の人差し指と中指の一本を立て、会長の両眼に突き立てようとしている。

あと五センチの所で、止めた。

その体勢のまま、俺は容赦ない眼光で会長の顔を凝視しつつ言った。

「先輩。話は、後にしてもらえますか？　出来る説明はしますから」眼を見開いたまま、驚愕の表情で俺を見る。俺の本気が伝わったか。

だが、会長からの返事を聞く前に、俺は気配を感じて、会長の身体を横に突き飛ばし、俺自身も身を沈めた。

俺の頭のあつた空間に、うなりを上げるような勢いで蹴りが宙を舞う。

高橋麗香の操っている、空手部の一人の裏蹴りだった。

息をつきながら喉もとを押さえ、ようやく会長は、俺以外の三人

に眼を向けた。そして、初めて気がついた様に言った。

「……一年の岩崎？　それと平野か！　貴様ら、今日の練習に出来ないで、何をやっている！」

「先輩、今の連中は、何を言つても聞こえませんよ」
俺は、対峙している空手部の主将と後輩達に向かつて、声をかけた。

ようやく会長も、この異常な事態が飲み込めてきたようだ。

邪魔者は排除という術をかけられているのか、空手部後輩二人が勝てるはずもない主将である会長に向かつて構えようとした。

その途端、情け容赦のない会長の蹴りが飛んだ。しかも、野球部の一人も巻き添えて、三人共に。

瞬く間に三人が床に倒れ、俺は呆気にとられた。瞬殺。想像以上の速さと力だ。

先程の俺が優勢だつた闘いは、もしかしたら偶然なのかとも思われる位に、鮮やかな足技だつた。しかし、この手加減なしの攻撃、三人共、大丈夫なのだろうか。

……ああ、なるほど。今回、俺に負けたと思つた会長が、憂さ晴らしかハつ当たりで、この三人に当たつたと言つ可能性もあるか。この会長なら、やりかねない。

そう考えつつ傍観していたら、会長が俺の方を振り向いて言った。
「やはり、貴様が揉め事の原因か！」

……いや、だから会長、人の話を聞けつて。

息が切れてきた。

やはり武道を少しやっていた程度の私一人の力では、この四人の男子を倒すのは無理だ。こうやって逃げ回って時間を稼ぐのが精一杯。

助けを呼びに行つたはずのほーりゅうの安否が一瞬頭をよぎった時、遠くでガラスの割れるような音が聞こえた。まさか、ほーりゅうの力が暴走？ でも確かめるすべと余裕がない。

ジプシーと京一郎の動きを、私は普段から間近で見ている。その二人の速さに眼が慣れている為に、今、この男達の動きは、難なく見切る事は出来る。でも、そろそろ限界。さすがに、よけ続ける私の体力が続かなくなってきた。

動きが若干緩慢でも、そこはやはり男子。一突一蹴の重さが違う。殴りかかるて来るのを体捌きで避け、つかみかかって来るのを払つているだけで、足がもつれて来た。

その時に一人が、持つている竹刀を横になぎ払い、よけた私の肩をかすめた。よろめいて床に片膝がつく。思わず近くの壁に片手を付いて、それ以上倒れないように身体を支えた。

一瞬、集中力が途切れる。そして気配を感じて、はつと仰ぎ見ると、男は竹刀を構えなおし、私に向かつて振り上げていた。

やられる。

私は恐怖心があつたが、受ける攻撃を確かめる為に、男から視線をそらさず、防げるとは思わなかつたが両手を上げ、頭上で交差して十字受の体勢を取つた。

男から視線をそらさなかつたから。

竹刀を振り上げてゐる男の背後で、さりと高く、空中に躍る影を見た。

男の背後で空中に舞つた京一郎の廻蹴が、男の側頭部を後ろから綺麗に捕らえて、反対の壁まで吹つ飛ばした。

「夢乃、大丈夫か！」

足音なく身軽に降り立つた京一郎は、男の取り落とした竹刀を拾いながら、私に声をかける。安堵の為に、私は思わずその場に座り込んだ。

「あれ？ ほーりゅうは？ 一緒にやねえのか？」

「そうだ、ほーりゅう！」

「助けを呼ぶ為にも一手に分かれたのよ。でも、さつきガラスの割れる音がして」

「ガラス？ 僕、向こうの階段で上がってきたから、場所的に聞こえなかつたのかな？」

「ほーりゅう、多分職員室に向かつたと思ひ」

「職員室。なら、向こうから回つているジプシーと会流できるだろう」

そう言いながら、京一郎は残りの連中に向かつて、竹刀を構えた。

「京一郎、やり過ぎないで」

私の言葉に、京一郎は嬉しそうに言った。

「わかつてゐつて。俺は素手より竹刀の方が、加減がきくんだよ。ちゃんと外傷を負わさず、跡形を残さないよつにやつてやるからさ」

「京一郎！」

「冗談冗談」

そう言つて、京一郎は真剣な表情になり、倒すべき相手を見据えた。

チャプター・26 ジプシー

「やはり、貴様のせいじゃないか！」

俺からの大まかな説明を聞いた後、生徒会長はそう言つた。

だが、口先ではそう言いながらも、何故か楽しそうに会長は続ける。

「しかし、まあ、なんだな。女に言い寄られてなんぞ、贅沢な悩みじゃないか。しかも俺の可愛い空手部の後輩を操つて、自分に振り向かない貴様を襲わせるとはな。なかなか悔れない女だ」

俺が高橋麗香にまとわりつかれている事と、あと、事実として見られているので彼女が傀儡術で人を操れる事を話した。俺はもしかしたら、会長に格好の話の種を提供してしまったのだろうか。だが、今回の場合は仕方がない。

俺は会長に説明しつつ、倒した五人の状態をすばやく確認する。そしてようやく、生徒棟への渡り廊下を抜ける。当然のように会長はついてきた。

ただ、ついてくるどころか、何かやる気満々の雰囲気までです。この会長は、結局お祭り好きなんだ。

確かに、さつきガラスの割れる音が聞こえたのは、音楽室の方ではなく、こちら側の角度だったはず。そう思いながら、俺は一番正門に近い階段のそばまで来て、立ち止まる。相変わらず、ピアノの音が途切れ途切れだが聞こえてくる。現在の彼女の術発動の源。

俺の勘が、引っかかった。静かに神経を研ぎ澄ます。

「どうした？」

立ち止まつた俺を見ながら、会長は歩を進め、階段の一一番下の段に足をかける。

「こ」の上、四階の奥の音楽室に向かうんだろう？

そう言つた会長が、何か気配を感じたかのよう、「こ」に上を見

上げた。

正門に近いこの階段は、四階まで吹き抜けの構造になつていて。眼を凝らすよつて、その空間を見つめる会長。その動作を俺は見ていた。

「……何か、上で光つてゐる物が」

会長は最後まで言えずに、硬直して眼を見開く。

人間は、上から落ちて来る物から、反射的に避ける事が出来ない。反応出来て、せいぜいしゃがみ込む位だ。

俺の眼が会長の言つ光るものを探る前に、吹き抜けの上に向かつてリボルバーを抜いた。重力も乗つて加速するものを確認してから構えたのでは遅い。

轟音が三度、狭い建物の中で大きく響いた。

すばやくホルスターに戻したが、俺は自分に注がれる会長の視線を感じた。今回は人命優先。見られてしまつたものは仕方がない。三発とも手ごたえがあった。多分飛び散つたであろう、かけらの確認をする為に、俺は階段の周囲に眼を走らせる。

だが。

見当たらぬ。確かに、リボルバーを上に向けた後、光るナイフが包丁を三つ確認し、命中する所まで、俺の眼は対象を捉えていたのだが。いくらマグナム弾とはいえ、跡形なく粉碎する事はありえない。

轟音と同時に鳴り止んだピアノの音。昼間の京一郎のバイク音で術がとけた事と合わせて、わかつた事は、音でかけられた術は、それを上回る音で打ち消せると言う事だ。

静寂の中で腕を組んで考へてゐる俺に、会長が声をかけた。

「おい！ 江沼！」

「先輩、エアガンです」

「……貴様！」

「改造して強力にしたエアガンです」

「……江沼」

「本物じゃありません。エアガンです」

「会長は、ため息をついて言った。

「江沼、学校へは不用物を持つてきたら没収する」

「先輩、目の錯覚です。僕は何も持っていないません」

「何か、もう少しで、彼女の能力の全貌が見えそうなのだが。

俺は、吹き抜けの空間をもう一度見上げてから、階段に足をかけた。

チャプター・27 ほーりゅう

轟音と共に床の振動を感じて、眼が開いた。

ぼんやりと見える学校の天井。私は今、どんな状態なのだろう。徐々に記憶が戻つてくる。そうか、私の超能力が暴走して、結局私、階段から落ちたんだあ。どの位、意識を失っていたんだろう。やだなあ。花も恥らう女子高生が、仰向けに大の字で寝ちゃつていたよ。

私は、ゆっくり身体を起こした。

ちょっと、どこか頭の芯で痛むような重い感じがするけれど、身体の怪我はなさそう。よしょっと立ち上がる。そして、周囲を見渡す。

すっかり暗くなつた夜の学校の二階。左隣には私が転がり落ちてきた階段。目の前に、二年生の教室が並ぶ長い廊下が暗闇の中、のびてゐる。その脇に、私を追いかけてきて一緒に階段下まで落ち、意識不明の男子生徒一人。……眼を凝らしてその男子を見ていると、ちゃんと胸が上下している。生きているから、ひとまずOKつて事で。

私は、このまま職員室に行けば良いかと、下りの階段へ向きかけたが。

殺氣を感じた。

突き刺さるような視線。思わず身体が硬直した。

これは、暗闇にのびてゐる、廊下の向こうからだ。

……ここ最近、ジプシーが感じていた殺氣つて、きっとこんな感じだったんだろう。それが何故、私に今、向いているんだろう?

ゆっくり、視線を感じる廊下の方を向いて眼を凝らす。そう言えば、階段から落ちるまで聞こえていたピアノの音が、今は聞こ

えなくなつて、全くの静寂になつてゐる。

その代わりのように、いい香りが漂つてきた。これは、花？
静かな空間の、暗闇の奥。周囲に漂つ、爽やかな花の香り。

そして私は、眼で姿を捉えた訳ではないのに、廊下の突き当たりに高橋麗香が立つてゐるのがわかつた。

私と夢乃を校内で襲わせたのは、彼女だ。四階の音楽室でピアノを弾いていたのも彼女。弾くのをやめ、音楽室から出てきて、多分すぐそばの階段を下りたら、この三階の廊下の端々で、偶然今、私と向き合う形になつた。彼女は、私がジプシーの彼女だと勘違いしている。だから、私に対しこれだけの殺氣があるんだ。

そこまで、今、理解が出来た。

で、ここから私、どうすればいい？

一身で彼女の殺氣を受け続ける。

私の中の力が、ざわめき始めた。まずい。このまま殺氣を受け続ければ、また私の中の超能力が暴走してしまつ。このまま行けば、間違いなく彼女に向かつて力が放たれる。

でも、突き刺さるような殺氣の前に、私は動けなかつた。

そして、私の中の緊張感が高まつて、もう力が抑えられなくなりそうになつた、その時。

不意に、後ろから腕が伸びてきて、私は背後から抱きすくめられた。思わず声を上げそつになつた所を、さらに今度は口を手でふさがれる。

恐怖心で力が一気に爆発しかけた時、耳元で声がした。

「俺だ。ほーりゅう」

……ジプシー！

急に安堵感が押し寄せ、私の周りの空気が急速に静まった。私がおとなしくなったのを確認したジプシーは、私の口をふさいでいた手を外しながら言った。

「お前、今、緊張を解いたな？」

「だつて！」

「来るぞ」

ジプシーの言葉に、はつと前方を慌ててみる。

そうか、私がジプシーと合流できた安堵感で緊張を解いても、彼女の方の殺氣が増しているんだ！

当たり前のようになこの場から逃げようとした私を、むりに後ろから両腕できつく抱きしめるジプシー。動けない。

「何すんのよ！」

「いい機会だ。実戦練習なんて、そつそつ願つても出来ない

……何ですと！？

「！」のまま彼女のPK攻撃、受け忍べ

チャプター・28 ほーりゅう

私は、我が耳を疑つた。

ジプシー、今、何て言つた？

無表情のまま、当たり前のよう^にジプシーは繰り返す。

「彼女のPK攻撃、このまま受けろって言つたんだ」

……それは無理。絶対無理！

私は、背後から抱きすくめるジプシーの両腕から逃れようと暴れた。でも、見た目が細身とは言え、田頃から鍛え抜いている男だ。少しも力が緩む気配がない。

「何も実際に彼女の攻撃を食らえつて言つているんじゃない。直前で防御してやるから。力をためる感覚を覚えろつて事。ほら、前を向いて！」

私は仕方なく前を向く。

うひやあ、怖いよう。

「ねえ、ちょっと腕がきつい」

「お前、緩めたら逃げる氣だろ。前見て集中…」

「ねえ、腕が胸に当たつてる。すけべ」

「……前見て集中」

「ねえ」

「前見て集中！ 集中しなかつたら防御してやらねえぞ！」

急に前見て集中つて言われても、今まで出来ていたら苦労していな^いつて。

仕方がないので、廊下の奥の暗闇に眼を凝らし、殺氣を頼りに、そこに立っているであろう彼女・高橋麗香の気配を探る。

そして、その時、彼女から殺氣の塊のような物が放たれたのを感じた。

来たよう！

「眼、そらすなよ」

同時に耳元でジプシーがささやく。

恐怖の為、逆に彼女から視線を外せない私を抱きしめていた左腕だけを、ジプシーは不意に緩めて下に振る。

袖口から、仕込み武器の独鉛を手のひらに落とし、親指と薬指、小指で独鉛を握ると前方に突き出して、眼の高さにすばやく五芒星を描き、そのまま手のひらを高橋麗香に向けた。瞬間、大きく見開いた私の眼の前で、彼女の殺氣の塊が粉々になつて、四方にはじけ飛んだのが、感覚でわかつた。

あまりの出来事に、声の出ない私を右腕で固定したまま、ジプシーが言づ。

「さつき一度、お前は能力発動を抑えたせいで、今の彼女の攻撃のタイミングには間に合わなかつた。やはりお前の超能力は出るのに、数秒のタイムラグがあるな」

そして、考えをまとめるようにつぶやく。

「朝の彼女の視線での術には防御結界が有効だつたし、音にはそれ以上の音で焼き消せる。今回のPKも充分結界で防げた。畠違いだが彼女の五感を使っての術は、おそらく俺の陰陽術で、ほぼ対抗出来るつて事だ」

……勘の悪い私でも、今のジプシーの言葉の含みに気が付いた。
「まさか、試した？ 防ぎ切れるかどうかわからないのに、試した？」

「いや、そんな事はない」

「……ワザとらしく私から視線を外しての棒読み、しないでくれる？」

？」

「ほら、ほーりゅう、前。第二弾来るぞ」

ジプシーの言葉に、あわてて前方を見る。と、なにやら先ほど以上の威圧的な気を感じた。

「なんだか、この感じ、さつきの攻撃の数倍は威力がありそうだな」「そんな！ もうやだよ！」

「おい、貴様ら本当に、バカツブル炸裂だな」
急に横から聞こえた声に、私はどきりとした。

声の方を見ると、なんと、階段を数段降りた所から見物をしていたらしい生徒会長が、楽しそうにこちらを眺めていた。

「江沼、貴様はわかつてやつているんだろう？ わざと貴様らのバカツブルぶりを見せ付ける事で、あちらの彼女を挑発して逆上させ、攻撃力を上げるつもりだろう？」

え？

わざと？

私はジプシーの顔を仰ぎ見ると、私に向かってジプシーは満面の笑みで、につくりと微笑み返した。

この男、こんな顔もできるんだあ……なんて見惚れてはいけない。この笑顔は前に散々騙されたフェイク。って事は本当に会長の言つ通り、わざとなんだ！

「ほーりゅう、次も能力を出せなかつたら、出るまでこの状態で練習」

思つた通り、すつと無表情に戻つたジプシーに言われ、私は顔面蒼白になる。

「ほら、前見て集中。次はお前の能力が発動するぎりぎりまで防御しない」

この男の性格の悪さを考えると、多分ジプシーは本気だ。練習は続くし、本当に防御もしてくれないかも。

ひえ～ん。

チャプター・29 ほーりゅう

私は仕方なく、自分自身の超能力を発動する為の気持ちを作る。でも、集中するつたつて、どうすればいいんだろう？

昔から制御不能な超能力だし。急に使う練習つて言われても。今、向かい合つている彼女・高橋麗香から、敵意むき出しの殺気を浴びている事を思つてみる。

きつかけはそれしかないもんね。

私はジブシーから以前、能力発動の媒体になるつて聞いた石が埋め込まれたロザリオを握り締め、彼女の殺氣を探る。

集中。集中。

……お？なんかいい感じかも。内側の、体の奥のざざなみが立つて、ざわめく。徐々に総毛立つ気配がしてきた。いつもの能力発動の前兆と似ている。ロザリオの石も、私に反応して熱を持つてきたかも。

このまま行けば、超能力発動できそつ。

「OK。そのままの状態でしばらくキープしろ。この状態からなら、力をためるタイムロスなしで攻撃できる」

後ろから私を抱きしめている両腕の力は抜かずに、耳元でジブシ一がささやく。

……なんか、それはむずかしいかも。横ばいキープじゃなくて、どんどん力の気配が大きくなつて。もう少しで、止めろつて急に言われても止まらない位に、中の力が膨れ上がつてきているようなやばい。

暴発、暴走しそうな気配。

つまり、発動できるようになつても、結局は力の制御が出来ない

つて事じゅん。

ジプシーどうしましょ。マジやばいです。

そう思つた時にジプシーが言つ。

「能力発動までの感覚は覚えたか？ その感じを忘れないようにして、力を抜いて能力を押さえてみる」

「無理。もう出そう」

「止める」

「止まんない」

「止める」

「止まんないって」

どこら辺が生徒会長のツボに入つていいのか、階段の陰で必死に声を立てないようにして大笑いしている姿が、眼の端に見える。

私達のバカッフルなやりとりが分かったのか、前方にいる彼女の殺氣が、一気に高まつた。

そして、彼女のPKが先程の数倍の威力を持つて、こっちに放たれた気配がした。

来る！

「私も行く！」

「駄目だ。押さえる。今回も俺が防御する

「だから止まらないんだつて！」

そう私が言つた途端、ジプシーは後ろから私を抱きしめていた両腕を、急に離した。同時に私は、そのせいではない別の理由で、両足から力が一気に抜けて崩れ落ち、床に膝がついた。慌てて前に倒れこまないよう、両手も床について、私は身体を支える。

自分自身に何が起こったのかわからなくて、私は呆気にとられた。唚然とすると同時に集中も途切れ、周囲から能力発動の気配が搔き消える。

両腕が自由になつたジプシーは、左手に独鉛を持ったまま真言を

つぶやくと同時に、両手でいくつかの印契をすばやく結ぶ。そして、先程より数倍の威力のありそうな彼女の力を、今度は四方に砕き飛ばすのではなく、独鉢を握った左手を斜めに振り下ろして跳ね返した。

恐らく、能力者同士の戦いが初めての彼女と違つて、場数を踏んで戦い慣れしているジプシーだから出来る、絶妙のタイミング。一直線に、彼女の方へ力が跳ね返つた気配がして、その後に彼女の気が消えた。

「彼女、逃げたな」

しばらく、そのまま様子を伺っていたジプシーが緊張をとく。
それを見計らつて、私は叫んだ。

「ひどい！ あの場面で、後ろから膝カツクンはないじゃん！」
そう。ジプシーは膝で、私の膝の後ろを押したんだ。

「一気に拍子抜けしちゃう。問題ない」
相変わらずの無表情で、にべもなく答える。

……この、男！ 後ろから羽交い絞めプラス膝カツクン。女の子に対して、そんな恥ずかしい事、普通はしないでしょ。

あまりの事に立ち上がれない私に向かつて、ジプシーは言った。
「今の感覚、忘れるな」

「膝カツクンで全部頭から飛んじゃつたわよー」

「……もう一度同じ目にあわせてやるつか」

「覚えました。遠慮します」

階段の下から会長の、呼吸困難直前の楽しそうな笑い声が聞こえた。

チャプター・30 京一郎

俺と夢乃は、四階の音楽室に、もう誰もいないのを確認してから、三階へ向かう階段を駆け下りようとした。その時、周囲の空気が震える気配がした。俺と夢乃是無言で顔を見合わせ、一気に降りる。だが、三階には、誰かがいた気配が残つていただけだった。

俺は小声でつぶやく。

「……夢乃、廊下の向こう側、誰かいるよな？」

「もしかして、ほーりゅうとジプシーかも」

俺と夢乃是、警戒しながらも連れ立つて廊下を走ると思つた通り、ジプシーと、床に座り込んだほーりゅうの姿を見つけた。

「ほーりゅう、合流できて良かつた！」

夢乃が嬉しそうに言つ。

「どうした、腰でも抜かしたか？」

少々不機嫌そうなほーりゅうに声をかけながら、俺は辺りを見回す。そして、何故かこの場にいる生徒会長と眼が合つた。途端に俺の表情が険しくなつたのがわかつたのか、会長は面白がるような気配で両手をあげ、俺に向かつて言つた。

「私は偶然居合わせたオブザーバーだ。気にするな」

確かめるようにジプシーの顔を見た夢乃と俺に、ジプシーは無言でうなずいた。

奴がそうだと言つなら、そのなのだろう。俺は話題を変える。

「お前のリボルバーの音でピアノの音がやんだが、念の為に音楽室まで行つてきた。誰もいないのを確認してから降りてきたり、偶然廊下の向こう側で気配がしたから、こちらに来た」

「と言つことは、あちら側にいた高橋麗香は、もう下へ逃げてしまつたか……校舎内にいない可能性もあるな」

無表情で腕を組んで考え込むジプシーのそばで何気なく、俺は窓

の外に眼を向けた。すっかり暗闇に包まれた広い運動場。そして、その真ん中に立つ人影。

俺の固まつた視線に気が付いた会長も窓の外に眼を向け、緊張した声で低く言った。

「あれ、例の彼女じゃないのか？」

全員で窓の外を見る。

そこには、校舎に向いて一人立つ、高橋麗香の姿があつた。

最初にジプシーが走り出した。

俺と会長、そして夢乃とほーりゅうも続いて走り出す。一気に階段を一階まで駆け降り、運動場に走り出た。校舎の出入り口そばで、固まつて立ち止まつた俺達に向かつて、彼女は言つた。

「何故、私は駄目なの？」

訝しげに彼女を見た俺達に、続けて彼女が叫んだ。

「どうして、その女がそばにいて、私は彼のそばにいてはいけないのよ！」

俺は、それはお前が単にジプシーの好みではないからだろつと言う、きつい言葉を出さず、別の角度から探るように声をかけた。

「お前、こいつの性格知らねえだろ。何処が良くて、こいつと付き合いたいわけ？」

不意を突かれた様子だが、彼女はすぐに答えた。

「だつて彼、綺麗じゃない？！」

「女装が？」

俺の台詞に反応したジプシーから、俺の背中へ無言の膝蹴りが入つた。俺は背中をさすりながら、続けて彼女に言つた。

「それはおかしい。この世で最も美しいのは、贊美歌と女性の裸体だと言われている

今度は横に立つていた夢乃から、俺は頭をはたかれた。冗談で彼女の気を削ぎ、場の雰囲気を変えようかと思ったが、俺は話を戻す。「いくら綺麗つたって、こいつより他にもっと綺麗だと言われる男

がいるだろ？ 第一にここまでする程の価値が、こいつにあるのか？」

「価値があるわ！ 私の中で、一番綺麗で理想の人なの！」

「でも、性格の悪さで、お釣りが来るよ」

そう言つたほーりゅうに、今度は後ろからジプシーの首絞めが入つた。

「全く貴様ら、どつき漫才グループか」

俺らの行動を見ていた会長が、呆れた様につぶやく。

「彼女の中の、最も綺麗で理想の美しさか……黄金率でもあるまいし」

続けて言つた会長の言葉に、ジプシーの動きが止まる。多分付き合いの深い俺だけがわかるジプシーの変化。でも今は気付かない振りをする。何故なら、遠くで警察のサイレンが聞こえてきたからだ。ここでいろいろ騒ぎを起こしたから、多分こちらに向かってきているに違いない。ジプシーも会長も、サイレンに気が付いたように振り仰いだ。

「どうして、今、あなた達の中に私は入られないの？ 彼の隣にいられないのよ！」

急にそう叫んだ彼女の方へ、俺達が慌てて視線を戻した時、彼女は両手を夜空に振り上げ、そして俺達に向かつて思い切り振り下ろした。

場所的に俺と会長は、夢乃の手首を引っ掴み、横つ飛びに逃げた。ジプシーも、ほーりゅうの腰を腕で引っ掛けで反対側に飛びのく。かまいたちのような風が、俺達の立っていた場所の地面をえぐりながら亀裂を走らせた。そして、俺達の後ろにあつた校舎にもひびが入るのを、なすすべもなく唖然と俺達は眺めた。

俺達が再び高橋麗香の方を振り返った時には、もつ彼女の姿は見えなかつた。

「逃げるぞ

ジプシーの言葉に、俺達は我に返る。

そうだ、警察が近づいている。取り敢えず、この場から逃げた方が賢明だろう。

俺達は全員で、裏門に向かって駆け出した。

チャプター・31 ほーりゅう

私と夢乃とジプシーは、ほぼ、ぶつ通し全力で走って、夢乃の家まで帰り着いた。途中で、名残惜しそうな生徒会長と、必ず何かしら連絡をすると約束をして別れた。学校に警察が到着する様子を最後まで伺っていた京一郎が、後から単車で戻ってきた。

家に戻るとすぐに夢乃は、警視庁の父親と連絡を取り、数人の部下と共に父親は帰ってきた。そして、部外者ということで、私だけ部屋の外に出され、父親とその部下、そして夢乃と京一郎とジプシーが応接間で話し合いになつた。

私が入ると、話がややこしくなるらしい。

仕方がないのでキッチンのテーブルで、私は一人待つ。

しばらくして、皆にお茶を出し終わった夢乃の母親が、キッチンに戻ってきて、私に紅茶を入れてくれた。そして、私の前の席に座つて言った。

「ほーりゅうちゃん、普段はあまり、何が起こっているのか聞かない事にしているんだけれどねえ」

「そうだよなあ。さすがに今回は心配だよね。私は、嘘をつく」とも上手く誤魔化す頭もないでの、普通に説明する事にする。

「ジプシー……聰君に、片思いの女の子がいて。その子に私、聰君と付き合っていると勘違いされて、学校に呼び出されて、喧嘩になつちゃった」

「うん。簡単すぎる説明だけれど、嘘じゃない。

「聰に片思いの女の子！」

夢乃の母親は、思いがけなく嬉しそうな顔をした。

意外そうな私の顔を見て、夢乃の母親は続けて言った。

「いえね、思春期の男の子の事、よくわからないだけれど、そんな話を今まで全く聞くなくて、ちょっと心配していた。ほら、血が

つながつていなければ、息子のように一緒に暮らしているから。息子同様の子がモテないと思うと、やっぱり親として気になるでしょう？」

「ふうん。そういうものなのかな。

「聴の彼女、ほーりゅうちゃんのように、楽しくて明るい子だったらしいわよね。考えてくれない？」

「え？ えへへへつ」

照れたように、私は笑った。

でも、いきなり、そんな話を振られても、それは無理。

残念ながら、私はジプシーからはまだ酷い扱いしか受けていない。この先、ジプシーにときめくなんて、多分考えられないな。

「それに」

急に夢乃の母親は、顔に影を落とした。

「聴は心配事がある度に、食が細くなるのよ」

そうだ。ここ最近、夢乃の家に連日泊まっているから、それは私も気が付いていた。家でも学校のお昼でも、ジプシーは最近あまり食べていない。そうか、昔から何があると食べられなくなるんだ。意外な弱点。結構小心者。だから背も伸びないんじゃない？

そんな事を考えている私に、夢乃の母親はつぶやくように言った。「聴は、それこそ皆が呼んでいるようなあだ名のようだ、そのうちに何処かへ行ってしまうような気がして……」

応接間の扉が開いた。

結局今回の事件は、私と京一郎と生徒会長、そして高橋麗香はノータッチで、夢乃とジプシーが明日の朝一番に警視庁へ出向き、事情聴取を受けることに決まった。父親と、普段連絡を取り合っている部下の刑事達と打ち合わせ通りの、形だけの事情聴取。

夢乃の父親の話では、やはり学校の警備員から通報があつたらしく、現場での窓ガラスの破損と十人の生徒が倒れていた事があげられていた。そして、ジプシーのリボルバーからの弾が三発。これは

まだ発見されていないだろうけれども、警察が現場を調べればわかる。

不思議な事に、それ以外の痕跡がないそうだ。まあ明日、学校に行けばわかる事だし。

それと、珍しくジプシーが嫌がつたので、生徒会長への連絡は、夢乃の父親が直接した。ジプシーつたら今逃げても、どうせ明日には学校で、生徒会長に捕まるかもしれないのにね。

ところがというか、やはりというか、次の日は、休校の連絡網が回ってきた。警察の現場検証が長引いているんだろうか。

珍しく私は、朝の新聞を読んでみた。

三面記事として載っていたけれど、『校内の窓ガラスが割られ、犯人見つからず』だけだった。窓ガラスを割ったの、私だ。夢乃の父親がこれ以上の事は揉み消してくれるだろうから、この事件はこのまま迷宮入りだろうなあ。

それでも気になつた私は、夢乃とジプシーが警視庁へ向かう車に便乗して、学校前を通つてもらつた。三人で車から降りて、運動場を眺める。

運動場には何も、跡形がなかつた。

最後、確かに高橋麗香は、運動場の真ん中に亀裂を入れ、校舎にひびを入れたはず。その痕跡が全くなかつた。

無言で考え込むジプシーと夢乃を乗せ、再び走り出した車を、その場で私は一人見送る。

朝食抜きで出てきたからなあ。朝、食べる気の起こつていない二人の前で、一人だけ食べるのも気がひけたし。

私は、腹が減つては戦は出来ぬと思い、ファーストフード店で朝食をとることに決めた。

チャプター・32 ほーりゅう

ファーストフード店は、朝早くでも結構混んでいた。ふうん。朝限定のセットって言うのがあるんだ。早速、ハンバーガーとポテト、オレンジジュースのセットを購入して、席を探す。

私は一人だったので、窓の外が眺められるカウンタータイプの席に着く。

そして、ぼんやりとハンバーガーをかぶりながら、外を眺めていた。

ふと、ガラス越しに、このお店の前で待ち合わせをしているらしい一人の後姿が眼に入った。何処かで見た事のある後姿。運動でもしているのか、バランスの取れた体形。今日は、前につばのある帽子をかぶっているが、背中の中程まで伸ばして三つ編みにした髪。誰だったっけ？ ジッと見ていると、気配を感じたか、その人物が振り返ったので、私と目が合った。

……ああ、文化祭で会った男の子だ！

彼も私を思い出したか、にっこり笑った。そしてお店の入り口へ回り中に入つて来て、あいている私の隣の席に腰をかけた。

「（こ）で朝食？ もう学校が始まっている時間じゃないの？」

笑顔で、もつともな事を聞いてきたので、私は答えた。

「校内で事件があつて、今日は臨時休校。そう言うあんたは？ 学校もだけれど、誰かと待ち合わせ？」

「俺は、友人と待ち合わせ中」

「あ、女の子と待ち合わせなんだあ」

「残念！ 待ち人は男なんだ」

屈託なく彼は笑つた。

この話のしやすさは、京一郎と似ている所があるなあ。そして、

この喜怒哀楽のはつきりしていそうな彼の雰囲気に、何故だらう…

思わず一瞬、普段無表情のジプシーを比べてしまった。

ジプシー。そうだ、急に事件を思い出した。

私の表情の変化が分かったのか、彼が聞いてきた。

「何か悩み事がある？」

何故だらう？ そう言われて思わず、事件には無関係の彼に、私は喋つてみたくなつた。

「何て言うか。親しい友人が、ある女の子にやけに気に入られてるんだ。断つているのに付きまとわれて、とっても困つてているんだよね。……どうにかならないものかと思つてさ」

「ふうん。そんなに大変な事になつているの？」

腕を組んで考えた後、彼はこう言った。

「男女の問題つて、やり方を間違つとさらに大変な事になりそうだよね。可愛さ余つて憎さ百倍なんてさ。女の子の嫉妬つて怖いんだろ？ 周りの異性の友人も巻き込まれそうだし。つて、もう君なんか巻き込まれていてるクチ？」

笑いを含んだような眼で瞳を覗き込まれて、私は視線のやり場に困つた。

「あはつ、図星つて顔。……何？ やけにその彼の事、心配しているね。もしかして、その彼の事、好きなの？」

「まさか！ ……友人として心配しているだけよ」

ドキッとしたのは、今、眼を覗き込まれたせい。

ジプシーは、私の恋愛対象に入つていない。それは間違いない。

……だつて私の、好みの顔や性格と言えば。

「何？」

私の視線を感じたか、彼はテーブルの上にひじをつき、片頬を手のひらで支えて私を見返してきた。なので、慌てて視線をそらした。自分でも分かる。今の私、絶対顔が赤い。

そして、私は気が付いた。前に初めて文化祭で出会つた時、私がその時に妙に楽しい気分になつたのは、多分話しかけてきた彼が、

ストレートに私の好みのタイプだつたからだ。

「ごまかすように私は、目の前のポテトを彼の方に押しやつた。

「どうぞ。沢山あるから食べて」

彼の、一瞬躊躇する間があく。

……？ 何だろう、この間。

まあいいやと、私は自分もポテトをとろうと手を伸ばした時、偶然手を伸ばした彼の手とぶつかった。慌てて二人共、手を引っ込める。

その慌てぶりを見て、この人は女の子に免疫ないのかな？ 京一郎と同じ位の軽さで見ていたけれど、案外純情なんだ、なんて思つて笑つた。

自分も慌てた事は棚に上げて。

チャプター・33 ほーりゅう

目の前の彼は再び、今度はゆっくりポテトに手を伸ばす。そして、一本つまんで食べている彼の後ろに、人影が立つた。

「お前がファーストフード店に入つて、ものを食べている所なんて、初めて見た！」

本当に驚いたような声が上から急に降ってきたので、私はびっくりして振り仰いだ。そこには長身の男性が、端整な顔に驚いたような表情を浮かべて、こちらを見ていた。

「お、待ち人が来た」

そう言つて振り返つた彼に、長身の男性が言つた。

「ファーストフード店に入つている事も驚きだが、お前が女の子と一緒にいるのを見るのも初めてだな」

そう言つたあと、長身の男性は、私に向かつて右手を出して來た。「はじめまして、東条ツバサです」

「あ、どうも」

私はそう言つて中腰になり、慌てて右手を出して握手した。すると東条さんは、なぜか不満げな表情になり、握手をしたまま私の顔を見返してきた。

?

私、何か失礼な事、したかな？

その時、面白そうに成り行きを見ていた彼が、突然はじける様な大笑いをした。

「女子高生で、東条ツバサを知らない子がいる！」

え？ と言うことは、この人、有名人なんだ。そう言えば、見覚えがあるようなないような。芸能人？ ……と言えば、情報通で芸能界大好きなクラスの明子ちゃん。……あ、もしかしたら明子ちゃんが、よく学校に持つてきている雑誌！

「……ファッション雑誌のモデルをしている？」

東条さんは、よつやく嬉しそうに、満面の笑みを浮かべた。

「思い出してもらえて嬉しいよ」

なるほど！ 本当にそういう業界の人なんだ。確かに背が高くてカッコイイ、芸能人的なオーラがある。……あ、だとしたら。

「ねえ、高橋麗香って、知ってる？」

私からのいきなりの質問で、ちょっと驚いたような顔をしたが、すぐに東条さんは答えてくれた。

「知ってるよ。何回か撮影現場で会って仕事を一緒にした事がある。でも、お互にあまりそりが合いそうに思わなくて、特に個人的な話をした事はないね」

「ちえ。ついにツバサを知らない子がいると思ったのに」

そう言いながら彼は、勢いよく立ち上がった。

「それじゃあ、またね」

笑顔で私に手を振りながら、彼は東条さんと連れ立つて、お店の出入り口に向かう。

「あいつ、今日は出て来ないのか？」

「大学の研究室に泊り込みだつてさ。現在進行中の仕事の詰めが近

いって言つていた」

会話する声が遠くなっていく一人の後姿を、私はじっと眺めていた。そして、二人がお店を出て、通りの向こうへ信号を渡つて行く頃、私は重大な事に気がついた。

「私、彼の名前を聞いていない！」

でも前に、うちの高校の文化祭に来た位だし、ここでも偶然会つた。近くに住んでいるのかもしれない。だとしたら、また次に会う機会がすぐにあるような気がするし、その時に名前を聞けばいいかあ。よく考えたら、私も名乗つていいや。

今の人様子を見ていると、東条さんがモデルの仕事をしているって事は、彼も同じようにモデルをしているのかな。それなら、

男の子なのに髪を伸ばして三つ編みしているのもわからないでもないし、スタイルも良さそう。なんてつたって、私好みに見た目がカッコいいもんね。早速、明子ちゃんに雑誌を借りて、探してみようかな。

あ、でも今の会話、大学がどういう言っていたな。もしかして同じ位の年と思っていたけれど、一人とも年上の大学生だったりして。東条さんはどう見ても年上っぽいし。それならこの平日の午前中に、講義の合間に街中でこういった設定もおかしくないよな。

ぼんやりとガラス越しに街の風景を眺めながら、黙々と田の前のポテトを食べ、私、すごく彼の事を考えていた。
もう一度会いたいって思うのも、彼の事を考えるだけで樂しいって事も、やっぱり、これって一田惚れなのかな……。

私は、なんだか今、ジプシーに一田惚れをした高橋麗香の気持ちが、手に取るように理解出来る気がした。

チャプター・34 京一郎

朝、教室に入ると、ほーりゅうと夢乃はもつ登校してきていて、田の当たる窓際にいた。ほーりゅうは相変わらず、夢乃の家に連日滞在中だ。確かに、一昨日の出来事を考えれば、一人暮らしのマンションへ帰す訳にもいかないだろう。

だが、一緒に登校しているはずの、ジプシーの姿が見えない。

「夢乃、奴は？」

「今日は用事で、午前中の学校は休むやうよ。家を出るのは一緒に出たけれど」

「ふうん……で、奴の様子は？」

「本人は、いつものペースを取り戻しているから、心配ないって言つていいわ」

「そうか。奴が本調子と言つなら、単独行動も問題ねえな」

一昨日の出来事のために昨日は臨時休校だったが、ジプシーと夢乃是事情聴取で警視庁に行っていた為、奴は殆ど動けなかつたはずだ。昨日一日、身体は動けなくても、おそらく頭の中で計画を練つていたに違いない。実質的な事件の内容として奴の得意の範疇だから、俺は全面的に計画を奴に任す気になつていた。

隣で俺達の会話をおとなしく聞いていたほーりゅうが、教室に入ってきた女子を見つけて、嬉しそうに寄つて行つた。

「ほーりゅう、嬉しそうだな。何があつたのか？」

俺は夢乃に聞いた。

「昨日、ほーりゅうは街中で芸能人に会つたらしいわよ。それで、その芸能人のファンらしい明子ちゃんに、その話をしたいらしいの

よ」

夢乃がそう言つた途端。

「うつそー！ 何て羨ましい！」

藤本明子の叫び声が教室に響き、さらに興味を持ったクラスの女子を引き寄せ、教室の中心で集団になる。

「芸能人ねえ」

俺は、そつづぶやきながらぼんやりと、女子の集団の真ん中に混じる、ほーりゅうの横顔を眺めた。そして、同じように集団を眺める夢乃に、小さな声で言った。

「夢乃」

俺の方を向いた彼女に、言ってみた。

「意外とさ、ほーりゅうって、ジプシーと合っているような気がしねえ？ 天然と言つたか癒し系と言うか、その辺の性格が奴とぞ。ほら実際、ほーりゅうが俺達の前に現れてから、奴の感じ、いい方向に変わつたと思うんだが」

俺の言葉の意図する所がわかつたらしい夢乃だが、俺の期待する言葉を口にしなかった。

「残念」

てつくり夢乃是賛同してくれるものだと思っていた。だから、そう言つた夢乃に正直驚き、どういう事かと顔を見つめる。

「否定じゃないの」

夢乃は、俺の表情を読んで言った。

「私も、あの二人は、結構お似合いだと思つていたんだけれど、それは、お互の気持ちが、お互に向いている時の話でしょう？」

「奴は、ほーりゅうを嫌つていないとと思つ。興味のない人間は眼中にない奴だ。むしろ、ほーりゅうの事を、からかう位に興味を持つていると思うが」

夢乃是、小さく笑つた。

「ジプシーの方じゃなくて。……ほーりゅう、他に好きな人がいるから」

ピンと来なかつた俺は、一拍遅れで驚いた。あのほーりゅうに、

そんな艶っぽい話があつたのか？

「あ、なるほど。相手は、こっちに転入して来る前の学校の奴か？」

「いいえ。じつに来てから。出会ったのは文化祭の時らしいわよ
文化祭から？ 彼女のそんなそぶり、全く気がつかなかつた。へ
え、あのほーりゅうが……。考え込んだ俺を見て、夢乃はさりに笑
いながら言つた。

「今まで気が付かなかつたつて思つているんでしょう。当然よ。私
もほーりゅうから聞いたの、昨日だし。その相手とは文化祭で一度
会つたそよ。そして、昨日も街中で偶然に会つて話をしたんだつ
て。……本人曰く、昨日気がついた一日惚れだそよ。京一郎の今
の話、一日遅かつたわね」

「一日惚れ。本当にそんなものがあるのかと、俺は疑う方なのが、
考えてみたら今回の事件、高橋麗香がジプシーに、文化祭の舞台で
一日惚れをした事から始まつたんだ。

「奴は……ジプシーはこの事、知つているのか？」

「今はこの状況だから言つていない。この場で、こんな話が出たか
ら私は京一郎に話したけれど、多分あえて周囲に言つ事はないでし
ょうね。ほーりゅう自身がどれだけ周りの人と言つかも、よるだ
ろうけれど」

「そうだ。この先どうなるかわからぬ。ほーりゅうの一目惚れつ
てだけで発展なく、このまま済し崩しに消えていくだけの話かもし
れない。

「夢乃、今の会話、忘れてくれ。こうなつたら良いなと思った、た
だの俺の希望の一つだから」

「俺は、ため息をつきながら呟いた。

「どうも、人の想いつてのは、上手くいかないものだねえ。ほーり
ゅうにしても、あの高橋つて女にしても」

「ジプシーのそばに、ほーりゅうがずっとといふとすれば。
生き急ぐ奴の未来も、変わる気がしたのに。」

「江沼！ 頬を貸してもらひやー…」

昼休みを告げるチャイムと共に、生徒会長が一年の教室のドアを勢よく開いた。

「すみません。江沼君は今日、お休みです

夢乃の、すまなそうな言葉を聞いた会長は驚いた顔をし、そしてすぐに、怒りあらわに叫んだ。

「親からの電話一本で、この私が納得する訳がなかろう… 絶対捕まえてやる！ 今日の放課後、家庭訪問だ！」

さしつを返し、足音荒く会長は教室から出て行く。

……会長、本当にジプシーの家まで行つや。あの様子じゃあ。

そう思いながら、私はお弁当を持って、いつものお皿を食べている自習室へ向かう。

でも、確かにジプシーって、今日の学校は午前中だけ休むつて、言つていなかつたつけ？

そう思いつつ、向かう途中で一緒になつた夢乃と京一郎と一緒に、自習室のドアを開けた。そして、腕を組んで考え込んでいるジプシーやの後姿を見つけた。

いつもの昼休みのメンバーが、顔をそろえて椅子に座つたのを確認したジプシーは、腕を組んだ姿勢のまま、おもむろに言った。

「今日、高橋麗香を呼び出して、けりをつけたいと思つ

さりに続けようとしたジプシーの言葉を、さえぎつて私は言った。

「その前にジプシー、お皿に飯を食べよつよ。ジプシーもママさん手作りのお弁当、持つてきているんでしょ？」

急に何の事だと言わんばかりに、ジプシーは私の顔を見返した。

「だから、食べながらでも話、できるじやん

「いや。今はいらない」

「そう言つて食べない氣でしょ。あんた最近、食事量減つてるもん」

「今は関係ない話だ」

「でも、三食きちんととどりないと身体に悪いって」

「俺が食事をしようがどうしようと身體に悪いって」

「でも」

ジプシーは、急に押し殺したような低い声で、静かに言つた。
「ほーりゅう、今回の作戦は、お前中心に計画を立てた。お前に頼つた、お前がメインの計画だ。……あまりしつこく言つと、メンバーから外すぞ」

「すみません。もう何も言いません。メンバーに入れてください」
普段からいつも、じつじつ計画には、ないがしろで爪弾き氣味の私。メインにもらえたと聞くと、ちょっと立場の弱い私。夢乃のお母さん、ジプシーに「飯を食べさせようかと頑張つたけれど、無理だつたよ……。

おとなしくなつた私を見て、一息ついたジプシーは、小さな声で言つた。

「後で必ず食べるから、心配しなくていい」

そして、改めてジプシーは腕を組みなおして、話を再開した。

「今日の朝、高橋麗香の家に行つてきた」

……いきなり、敵のアジト襲撃ですか！

さすがに呆気にとられた全員の顔を見ながら、ジプシーは続けた。
「もちろん、彼女が学校に向かう為に家を出たのを確認してから、彼女の母親に会つた。……母親は、彼女の能力に気がついていたが、今まで、どう対処していいのかわからなかつた様子だな。母親と話し合つて、これから計画に合意してもらつた。……と聞つか、結果的には、彼女の母親に頼まれた形になつたんだが」

ジプシーは、いつたん区切つてから言つた。

「今回の計画の目的は、彼女の能力の消失。術自体を使えなくさせ

る。彼女との話し合いはそれからだ

能力消失。

そんな事、可能なんだろうか？ って事は、私の能力やジプシーの術も、使えなくなる事があるって事？

私の考えが分かったのか、ジプシーは言った。

「これから、ほーりゅうに分かるように説明する。何と言つても今回は、ほーりゅうメインだからな。その代わり正しい説明ではなく、お前が理解できる言い方や表現に変えるから。……まず、彼女の能力は、彼女の母親と話をして俺の思つた通りの能力だと確信した。俺の陰陽術でも、お前の超能力とも違う能力だ。ただ、今回のお前の要であるお前の闘志を落とさない為に、あえて今言わない

「何で私の闘志って言うのが関係するのよ」

「それは計画の実践方法として理由が分かるから後で説明する。俺の陰陽術は、練習や修行という形で身に付けたものだ。お前の超能力は、生まれつきの遺伝子レベルの能力とみた。それらは基本的に少々の事では、くならない。だが、高橋の母親の話では、彼女の能力は精神に担う所が大きく感覚的なもので不安定、あやふやで確定に身につけたもの。だから、今回立てた計画で消滅させる事が出来る。だが、間違いなく、お前の超能力で対抗できるものだとう事、それは俺を信じろ」

まあ、こんな関係の話に詳しいだろうジプシーの言つ事だから、本当に私の力で太刀打ち出来るものなんだろうな。

「目的は分かつたか」

「うん。彼女の能力消失」

私が計画の中心だから、私が理解したら、説明が先に進む訳ね。

「次に方法なんだが、俺としては今日だけりをつけたい。その為に、彼女の母親に伝言を残してきて、今日の夜、彼女をこの学校に呼び出した。また、これと思う方法一つのみで戦つて外した時が怖い。だから、実質的な方法と、併せて精神的なトラップの、合計四つの

眼の同時進行で、彼女の能力を消滅させようと思つ

「

……急に不安になつてきた。四つの罠を一度に仕掛ける。

果たして私に、そんな器用な事、出来るんだろうか？

チャプター・36 ほーりゅう

私の不安が顔に出たのだろう。ジプシーが続けて言った。

「彼女の能力消失の為の、四つの罠。別に全て、お前が仕掛けろと言つ訳じやない。ほーりゅうにしてもらうことは、彼女との一対一の超能力での戦いであるPK戦。これに必ず勝てって事だけだ」

それが一番難しいじやない！

「無理！ それは無理！ 私は自分の超能力、まともに制御できないんだよ…」

「いや、一昨日の様子なら、お前は彼女に攻撃を仕掛けられる。だからお前がメインなんだ。今回俺は、全てにおいての防御に回る」「ジプシーが一人で、攻撃と防御の両方をすればいいんじゃないの？ 絶対その方が勝てるつて」

「今回、お前が彼女と戦う事に意味があるんだ。……彼女にとつて戦う相手が、自分の好きな男より、その男を取り合つている恋敵だと思つてみる」

「どうか。私は彼女の恋敵になるのか。彼女の勘違いだとしても。「お前が相手の方が、狙いの能力消失につながる。実質的な方法の一つとして、彼女の能力をオーバーヒートさせる」

「わざと能力の限界を超えさせて、力が出せなくなるつて事か」京一郎がそばで言う。うん。意味は分かるけれど、それは実際可能なんだろうか？

ジプシーはしばらく考えた後、ちょっと難しいかなと言いながらも話を続けた。

「俺が使う陰陽術の中で、呪詛返しと言つ術がある。相手が仕掛けってきた術を、こちらも術で相手に返す技だが、この場合、返された方は、最初に仕掛けた時よりも、かなり大きなダメージを受ける」「なんで？」

「一の力で攻撃された術は、跳ね返す為には結果的に一以上の力じ

やないと返せない。簡単に言えば、一の力で返すとするだらうん。

「すると、相手もさらに跳ね返してくるとしたら、二以上の力、簡単に言えば、三の力で返すことになる」

うん。それも分かる。力が小さければ、跳ね返らないもんね。：ん？

「結果、徐々に力の大きくなつていくラリーで、力負けして跳ね返せなくなつた方が、全てのダメージを受ける」

ちょっと待つて！

その戦いを私にやれと？

「絶対無理！ 私が負けるのがわかつてゐる。それに、結局どちらかが大怪我するつて事でしょ？」

「だから、俺が全面防御に回るつて言つてゐるんだ。……お前の防御はもちろん、今回は傷つける為の戦いじゃないから、相手の彼女の防御も俺がする。お前は安心して攻撃を仕掛ける。彼女のオーバーヒートが目的だから、徹底的に」

「私の方が、最終的に力不足だつたら？」

「それはない。俺の見立てでは間違ひなく、ほーりゅうの能力の方が上だ」

それで、私の闘志を落とさない為に、彼女の本当の能力を教えてくれない訳か。どんな能力なのか、この際気にしない方がいいんだな。

「それが、ほーりゅうにしてもらう実質的な攻撃。それと、それに伴う、最大能力を駆使しながらも敗北と言う精神的なダメージが二つ目。彼女の能力は、精神に担う所が大きいから。今までそういう力を持つ相手に出会わなかつたんだろう。一昨日の感触では、彼女もPK戦は初めてだ。……あと、予定している残りの一つの精神的なトラップは、俺が用意して仕掛けるから、お前は気にしなくていい

「ふうん……とにかく、彼女にPK戦で勝てばいいって事ね」

……本当に上手く出来るんだろうか。

「あと、もう一つ別に、防御の面で大技の術を仕掛ける予定だ。それが、俺がメインで攻撃出来ない理由の一つだが」

大技の術。何だろう?

ちょっとわくわくするかも。

でも、私の期待満面な表情に対して、ジプシーは今一乗り気ではなさそうな表情で続けた。

「言葉としてわかりやすく言つながら、……復元結界とでも言おうか」

復元結界?

「この高校の校舎全体、運動場も含めて、一つの結界をはる。これは、術を発動してから最後に術をとくまで、その間に破壊された建物や草花や木も含まれる結界内全ての静物が、術をといた時に全て復元される……元に戻る術だ」

「……それって、すごいじゃん!」

何で今までそんなすごい術、使わなかつたんだろう。って、単に使う機会がなかつたからか。

「今回、思い切り、ほーりゅうに力を使つてもらつ為に、この術を使おうと思つている。これなら、校舎破壊を気にせずに戦えるだろう?」

「ねえ、一昨日、高橋さんが壊した校舎や運動場が元に戻つていたよね。それつてもしかして、彼女もこの術を使えるって事?」

「いや、彼女の術は、また別の違う方法だ。彼女の術に関しては、とっても難しく長い説明がいるが、聞きたいか?」

「いえ、遠慮します。……それにしてもジプシー、この術を使うのに、何か乗り気じやない感じがするけれど?」

眉間に手を当てて少しの間考えていたジプシーは、それでも続けて無感情に言つた。

「この術の欠点というものが三つ。一つ目は、術の性質上、術者がかなりの力を一定してずっと出し続けるといけない。その理由も

あつて、今回俺は攻撃なしで防御にまわる。一いつ目は、復元されるのは静物のみで、人の怪我は治らない。だから俺が防御に回つて、お前も彼女も怪我をさせない。三つ目は……術を発動した者が、途中で意識を失つたり、ましてや死んだ時点で術はとけ、術発動内で起こつたダメージがそのまま全て、現実の世界のものとなる。術を発動した術者が、意識を持つて術をとかなければ復元されない

ジプシーの話を聞いた後、ほーりゅうは怪訝な顔をしていた。多分、最後の説明が長すぎて、すぐに理解できていなかつた。夢乃の方は、少々青ざめた顔になつてゐる。こちらは恐らく説明内容を理解した上で、俺と同じ事を考えている。

明らかに、ジプシー個人の負担が大きい。

「もう一度、説明をお願い！ どういう意味？」

ほーりゅうが聞きなおす。

ジプシーは、考えながら言葉を選びつつ、ほーりゅうに言つた。
「つまり、結界が消えても、怪我をした所はすぐに治る訳ではないから、怪我をするな」

「それはわかる。他の部分」

ちょっと間を置いて、ジプシーは、きつぱり言い切つた。

「後は、俺自身の問題だから、お前は気にする必要はない」

「へ？ どういう事よ。さつきの説明と、全然長さが違うじゃない。第一、それなら何で、京一郎や夢乃が心配そうな顔をしてんの？」

鈍感そうに見えて、意外と田代とい。俺と夢乃の表情を読んでいる。

ジプシーは、やれやれという感じを出しながら言つた。

「いや、結論的には、俺自身も怪我をしたり、意識を失つたりするなつて事。多分俺のやる事が多いから、京一郎達が心配しているだけだ」

結構、時間が経つていたらしい。気がつくと、昼休み終了のチャイムが鳴り始めた。

まだ、納得していないような顔のほーりゅうに、俺は言った。

「ほーりゅう、今聞いた限りでは、確かにジプシー一人の負担が大きいが、これから俺と一人で話しあつて、一番いいやり方を選ぶ。

次の授業は休んでも俺はコマ数がまだ大丈夫だし。お前ら一人は授業に戻れ」

本当は、ジプシーのような能力を持ち合わせていない俺には、奴の負担を軽くすることは出来ないかもしない。せいぜい俺に出来る事は、スムーズに事が運べるようにサポートする位だつ。だが、ほーりゅうや夢乃の心配を、わざわざ増やす事もない。

しぶしぶ椅子から立ち上がる、授業のサボリ癖がついていないほーりゅう。

その彼女に向かって、ジプシーが言った。

「そうそう、お前の最初の仕事だ。高橋麗香を挑発する台詞、考えておけ」

「何よ、それ！」

そう言いながらも、ほーりゅうと夢乃は、自習室を出て行つた。

「さて」

彼女達が出て行つた後、昼休みが終わつた事で、急に静寂が広がつた校舎を感じつつ、俺はジプシーに言った。

ジプシーが俺を見る。

「とりあえず、お前は弁当を食え」

お前もそれを言つたが、と言わんばかりの嫌そうな顔に、俺は続けた。

「これからのお前は体力勝負だろう。今、食べた方がいい。それに計画自体は、さつき聞いた内容が大筋なんだろ？」

ジプシーは、仕方がなさそうに鞄から弁当箱を出しながら答えた。

「そうだな。高橋麗香の能力を黙つている事と、俺が仕掛ける罠の内容以外、ほぼ全部だ。復元結界の決まり事も百パーセント事実」

「高橋麗香の能力、そんなに複雑で難しいものなのかな？」

「いや」

ジプシーはすぐに答える。

「一言で説明が出来る。だが本当に、ほーりゅうの士気を落とした

くないから言わなかつただけだ。今からお前には全て話すし、俺の仕掛ける一つの罠も説明する。……それを承知した上で、全員で高橋麗香の術に落ちたい。罠の一環で」

「了解。お前の食事が終わつたら、俺の役割も含めて打ち合わせよう」

黙つて食べ始めた奴をみて、俺は、ふと思い出した。

「なあ、言いたくなかったり、今回の件に全く関係ないって事なら、無理に話さなくていいが。今回の件に関係があるのでなら聞いておきたい事がある」

俺の、珍しく聞きにくそうな前振りに、ジプシーは顔を上げ、ちよつと意外そうに俺を見た。

「何だ」

俺は、奴の表情を見るために、ゆっくり言った。

「お前、一昨日の運動場で、生徒会長の『黄金率』って言葉に反応しただろ?」

眼を見開いて、奴は俺を見る。

しばらぐ、俺の顔を眺めていたが、ようやく言葉が決まつたかのよつに言つた。

「ああ、……あれ。あれは、……俺の深読みのし過ぎだと思つ。多分、この一件には関係ない」

そして、再び弁当に視線を落としたジプシーを見て、俺はこの話に関しては、ここで終わりだと思った。しかし、ジプシーは考え続けていたらしく、ゆっくり話し出した。

「多分、本当に関係ない話なんだ。……黄金率、その種の最も美しいみえる比率の事だろ。四角の辺の比やフィボナッチの数列、パルテノン神殿のように無生物もあるが、自然界における比として生物に関して言えば、らせん状に詰まつていてるひまわりの種のつき方や、巻貝のフォルムなどは、遺伝子伝達レベルの話になる」

話の指向性がわからない為、俺は言葉を挟まずに黙つて聞く。

「彼女は理由として、俺を綺麗だからと言つた。彼女は俺の中に、
彼女が知らないはずの俺の両親の掛け合わせの、遺伝子レベルでの
黄金比を見たのかと思つたんだ。そんな事、あるはずがないのに」
つづむき氣味にそう言つた奴の整つた顔を、俺は無言で眺めた。

チャプター・38 京一郎

五時間目が始まっている今、校内はとても静かだった。この自習室の近くにある音楽室も、今日のこの時間は授業が入っていないらしい。やわらかい日差しが入る窓際の席に座つて、ジプシーは窓の外に視線を向けて話を続ける。

「俺の父は、これは前に言つたかな、伯父と同じ陰陽師の血をひいていた。陰陽道の家系の血のつながつた兄弟だから、まあ当たり前か。俺の母は、……普通の、特に何の特別な能力を持たない、ただの人間……そこいらにいるただの人間と、中身も能力も、本当に変わりないと思う」「うう」

ジプシーは、そこで言葉を切る。あまり聞いた事がない、奴の亡くなつた家族の話を、俺は黙つて聞く。

「中身は普通の人間だと思うけれども、母は、その……家柄というか、身分が高かつた」

「身分？」

こいつが母親似つて事以外での母親の話は、全てが初めて聞く。家柄や身分が高い。どの程度のレベルでの話になるのだろうか？

「俺の父親との結婚に親族からの反対があつて、母は一族から追放された。同じように父の方も。伯父が陰陽道の一族の直系つて話は、多分夢乃から聞いたと思う。その弟にあたる俺の父親は、母との結婚に反対された上に、当時の当主の怒りを買い勘当された。言葉上の縁を切られただけではなく、戸籍も一族の末端に養子として出されて苗字も変わり、事実上本当の本家追放だな。そして、当の一人は駆け落ち同然に、お互いの一族の前から姿を消し、行方をくらませた」

……淡々と無表情でジプシーは話をしているが、こいつの親に、この目の前の息子からは想像も出来ないドラマのような恋愛話があったとは。

そこで、ジプシーは一回話を区切つたので、俺は素直な感想を言った。

「お前、その両親の血をひいていとしたら、情熱的な恋愛をしそうだな」

「俺が？」冗談。俺がそんなタイプじゃない事位、知つていいだろ」いや、俺からみたら、こいつはまだ恋愛に疎く目覚めていないだけだ。こいつに見初められた相手は、きっと将来、大変な苦労をするに違いない。

まあ、今は関係のない事だから、俺は話を戻す。

「しかし、そこまでこだわるほどの高い身分になるのか？」

ジプシーは、どこまで話せば良いのかと考えるような感じで答える。

「確かに母から聞いた限り、詳しく言えないが、実家の家柄は、はあるかに高い。でも、現実に母が俺に残したものは、俺自身とロザリオ、そして、リボルバー」

え？ っと、思わず聞きなおす。

「ロザリオは以前に形見だと聞いた事があるが、そのお前が持つているリボルバーも、母親所有だったのか？」

「こいつの母親は、どんな女だったのだろう。護身用に持つにしても、こいつの持つているリボルバーは、馬鹿でかいマグナム銃だ。

「まあ、前に、ほーりゅうには言つたかもしれない。ほーりゅうの持つているロザリオの中に埋め込まれている石はカディアと呼ばれる、ある意味本物の石だ。俺の持つているロザリオは、形がまつたく同じの偽物。しかし多分、中に埋め込まれている石は、偽物だが価値としてはかなり高い石だろとは思つ。それと、リボルバーの方は、……ロザリオと同時期に特注で作らせたものだと聞いた。コルト社の実在の拳銃を模倣して作ったから、コルト社のロゴは冗談で本物と同じように入れたのだろうけれど、グリップの底に、家紋と言つた、家の刻印が入つていて」

……こいつの、時々グリップの底を眺める癖、それが理由だった

のか。

そこで、ふと、ある考えが浮かんだ。

父親も本当の血筋は悪くない。母親も高い身分だ。高橋麗香は本能的に、こいつの見た目や能力もだろうが、こいつに流れている掛け合わされた高い身分の血を含めた、全てのバランスに「美」を感じたのか？

そう考えて、なるほど、これが運動場でジプシーの頭に引っかかつた、遺伝的なレベルでの黄金比な訳か。

「まあ、よく考えたら、今回の件には関係ないとと思う。そんな事、彼女にわかるような話じゃないし。純粹に、彼女の中の単独な見た目の美的感覚に俺が引っかかるだけだろ」

そう言つたジプシーに、俺はふと思いつたつて、つい口に出してしまつた。

「そう言えば、お前の昔の事件、まさか、母親側が関係して、……あ、いや、ごめん」

昔の事件に触れる気はなかつたのだが。

両手を挙げて謝つた俺に、しかし、無表情を変えずに、ジプシーはあつさりと言つた。

「可能性が、ない訳ではない。だが確証もない。まあ、父方の家系よりも、母方の方が複雑な事情のある一族ではあるのは確かだ。ただ、俺は事件当時、警察にも伯父にも従兄弟のトラにも、母方のことは一切何も話を聞いた事がないで通した。俺は実際、昔も今も、母の一族や身分に全く興味がない。しかし、こちらがそうでも、今後何が起こるか……向こうがそうは思わず仕掛けてくるかわからぬ。佐伯の家を巻き込む訳にはいかないから、養子の話は断つた」

ここまで話をした後、急にジプシーは表情を緩め、かすかに笑つて言つた。

「いつも、京ちゃんには心配かけるね」

そして、なんだかんだ言いながらも、お昼を食べ終わったジプシーは、さて、と俺に向き直った。何故か自信過剰で迷いのない不敵な迫力を持つ無表情。間違いない、いつもの見慣れた奴の顔に戻っている。

「俺は夕方までに、この学校中に結界と術発動の梵字を張り巡らす。見た目はほーりゅうのみを護衛するが、離れた場所から陰で高橋麗香も護る為、瞬間に俺の術を飛ばせるようにしないといけない。あと、不本意だが、どうしても頭を下げなければならない相手もいる。何を見返りに要求されるか考えたくもないが。……京一郎、手早く打ち合わせとこいつ」

チャプター・39 ほーりゅう

五時間目の授業内容は、出席したというだけで、全く頭に入らなかつた。

今日の夕方に、この高校で、急に彼女と戦つて決められてもなあ。それに、ジプシーに出された宿題をずっと考えていた。『高橋麗香を挑発する言葉を考える』だなんて、簡単に思いつかない。ありきたりなものじゃ駄目かな。どこかで聞いたような台詞を使つたらバカにされるかな。オリジナルの台詞の方がいいのかな。う~ん。私って、ボキャブラリーが貧困だもんなあ。

でも、言われた限りは何か考え方など、いけないんだろうなあ……。

五時間目が終わつた後、今日の校内でのクラブ活動は全体的に中止になつた。一昨日の事件の為に昨日が休校。学校側としては、今日も念の為に、夕方までには生徒を全員帰らせるつもりなのだろう。ジプシーは結局、教室に戻つて来なかつた。京一郎だけが五時間目の後、私と夢乃に連絡を伝える為もあつて、教室に帰つてきた。「彼女を呼び出した時間は、六時。それまで、いつもの自習室で隠れて待つていろつてさ」

「ジプシーは？」

「今日の為のトラップを仕掛けに行つている。出来次第合流するそうだ」

私も夢乃も、京一郎の後について、こつそり四階の自習室に移動した。先生に見つかったら、校外へ放り出されちゃうものね。

六時まで、結構時間があるなあ。だけど、これから彼女と戦うだなんて、何か実感がわかないし。それより私、本当に戦えるんだろうか。

自習室の入り口から見えない位置で、椅子に腰をかけて待つている間に、私は足元のチョークで書かれた線に気がついた。……この図形、見た事ある。

私の視線を追つた京一郎が言った。

「もう始まつているつて事だ。以前にも、この式神召喚の陣を見た事あるだろう?」

京一郎の言葉で、途端に私は、現実味を帯びた戦いに不安になる。部活をする生徒がいない上に、夢乃も京一郎も今は必要以上の話をしないので、私も無言で、徐々に暗闇が濃くなり静寂が街を包み込む、窓の外の夕焼けを眺めていた。

ゆっくりと自習室のドアが横に開かれたので、私はどきりと入り口を見る。足音なく、ジプシーが入ってきて、後ろ手にドアを閉めた。

「ぎりぎり間に合つた」

ジプシーの言葉に、私は自分の腕時計を見る。

「え? 六時でしょ? まだまだ時間があるじゃない?」

「いや、何か仕掛ける気なのかどうかわからないが、彼女はもう、近くまで来ている」

正面の窓の外に広がる、日の暮れた街を眺めながら、かけていた眼鏡をはずしてジプシーは言った。

そして、ジプシーは自習室の真ん中にある柱に近寄り、その前に立ち止まる。しばらくそのまま柱を眺めていたが、不意にまた、窓の外へ視線を走らせて言った。

「彼女が、学校の敷地内に入った」

「ああ、そうか。窓の外を気にしていたのは、先に放つていた式神を見ていたんだ。」

「来たあー! と頭を抱えてつぶやく私の言葉を聞きつつ、ジプシーは、左手の平を柱に当て、長い真言を唱える。

一瞬、身体が傾くような、小さな地震の揺れを感じた時のような錯覚が生じ、慌てて周囲の机の上に手をついて、私は身体を支えた。その私の目の前で、柱の四面全体に梵字で書かれた陣が浮かび上がって、消える。

「復元の為の結界が発動した。術をとくまで、俺以上の能力を持つ者以外は、誰も外界との行き来も出来ない」

ジプシー以上の能力を持つ者。

「って事は、高橋麗香さんは通れないから、結界をとくまで逃げられないって事なんだ。……例えば誰なら通る事が出来るの？」

私の質問に、ちょっとと考えてから、ジプシーは答えた。

「従兄弟のトラなら、俺の結界を通りが出来る。でも、通りつて事は、この結界を破壊する意味になる。術者の俺がとく事にならないから、結界術として成立しない事になる為、ダメージがリアル世界に残る」

ジプシーの従兄弟の勝虎君か。陰陽道一族直系の彼なら、きっと相当な力があるんだろうな。でも、そんな高いレベルの結界なら、今回は外から破られる事はないか。

「ほーりゅう、お前は彼女の殺氣を力として感じる事が出来る。逆に彼女は、まだお前の超能力の存在を知らない上に、感じる能力を持ち合わせていない。今から集中して、いつでも攻撃が仕掛けられるように力をためていろ」

そう言って、ジプシーは自習室を出る。

なので、慌てて私も、夢乃も京一郎も、続いて自習室を後にした。

夢乃と京一郎と一緒に、しぶしぶ私はジプシーの後に続いて、四階の自習室を出る。階段をゆっくり降りながら、言われた通りに、私は一昨日練習した事を思い出して、力を呼び起こそうとする。そうだよね。これが今回の私の目的だもん。さすがに今日は本気でやらないと。

私の目的。彼女と超能力で戦つて、彼女の力がオーバーヒートするまで追い込む。

うつむいて集中集中と思いながら階段を降りていると、一階分だけ降りた所で立ち止まつたジプシーの背中にぶつかった。

「痛あーい！ 何よ、急に立ち止まらないでつたら」

一応出っ張つてた鼻の頭を押さえてジプシーを見上げると、横を向いたまま無表情で黙っている。同じように視線を追つて横を向くと、一昨日と同じ三階の廊下の向こうに、高橋麗香が自校の制服姿で、一人立っていた。

「あなた、私を一人呼び出しておいて仲間連れ？ あなたも一人で来ると思つていたのだけれど」

高橋麗香は、私をまっすぐ見て言った。

怒つたような強張つた表情だが、不思議な事に、怒りは彼女の可愛らしさの中に美しさを彩る。

私は、神秘的なモノを見るように視線が釘付けになりかけたが、いやいや、見とれている場合じゃない。私は彼女と戦う為に、呼び出したんだ。……ん？ 実際彼女を呼び出したのはジプシーなんだけれど、私が呼び出したって事になつてんの？

「俺と夢乃是見届け人だ。邪魔する気はねえよ。もつとも、余計な邪魔者を連れてきたら排除しようかと思っていたが、あんたは一人で来たようだし」

夢乃を背にかばい、京一郎がそつと見て、両手の平をあげて見せた。

高橋麗香は京一郎を一瞥し、そのままジプシーに視線を移す。

「あなたは、何故ここにいるの」

「何故って、自分の彼女がこの遅い時間に出歩くなら、普通はついてくるだろ」

しつと悪びれず、ジプシーは言った。

「あなた、この前に自分で、彼女はいなって言つたじゃない！」

思わず叫んだ彼女に、ジプシーは無表情で答える。

「じゃあ訂正。こいつとの関係は、お前が見た通りだ」

見た通り？ 私は思い起こす。それは、喫茶店での偽デートや公園での偽ラブシーンや、昨日のバカッブル姿つて事？ それって更なる誤解を招くのでは。

案の定、高橋麗香は、ぎりっと私を見据えた。

「私に見せ付ける為に呼び出したの？ なら覚悟は出来ているでしょうね」

そう言つた彼女の周囲に、前に嗅いだ事のある花の香りが広がった。

「これって。

「いい香り。麗香さん、これ、何て言つ名前の香水？」

思わず聞いてしまつた私の頭を、ジプシーは左手でガシッと掴んで言つた。

「お前、状況をわかつてる？ 本当に思つた事が何でも、すぐに口から出る女だな」

「だつてえ！ 気になるじゃない」

またもやバカップルモードに入りかけた私とジプシーに、京一郎の、夢乃へささやく声が聞こえた。

「俺、こうやって外野から見ていたら、ジプシーって自分に気のある女一人を喧嘩させている、非道い奴に見える

だから！ 私はジプシーに、全然その気はないって。今回巻き込まれた形なんだってば。

なので。

そんな私の、ささやかなジプシーへの抵抗と逆襲の意味を込めて、バカツブルモードを目の前で見せ付けられそうになつてキレかかつた表情の彼女に人差し指を突きつけて、私なりに考え抜いた挑発の言葉を言つた。

ええつと。

「麗香さん。力ずくで私に勝つたら、ノシつけてジプシーをあげるわよ。好きにしたら。さあ、私からジプシーを奪つてみなさいよ！」横で「げ、マジかよ」とつぶやくジプシーの声。後ろで大爆笑の京一郎。

でも、どんな形でも彼女が最大の力を出してかかつてくるように仕向ける事が出来たら、今回はOKなんでしょう？ 私、間違つてないもん。

「それじゃあ、お言葉に甘えて」

そう言つて私を見据える彼女の眼。

怒りで異様な光が反射しているような眼。

「お前、今、何も考えずに彼女の眼、見ているだろ？」

ジプシーの言葉に、私は、はつと我に返る。

え？ ……あ！ どうか、彼女の術！

そう思つた瞬間、麗香は右手を、下からすばやく振り上げた。

ジプシーが同時に、私の手首を掴んで自分の腕の中に引き寄せる。呆気にとられた私が見たのは、さつきまで私が立つてた廊下の表面に亀裂が生じ、背にしていた窓ガラスが砕け散る所だった。

チャプター・41 ほーりゅう

目の前で、廊下の表面に亀裂が入る。

さっきまで私が背にしていた壁と窓ガラスが砕け、下から切り裂いた形になつた為か、校舎の内外にガラスの破片が飛んだ。途端に、三階の廊下に吹き込んでくる、外からの冷たい空気。

その冷たさに、私は我に返る。

今、この彼女と戦うのは、そうだ、私だ。

今の攻撃をかばってくれたジプシーを、とりあえず横に突き放した。私がやる気になつたのがわかつたのか、あっさり離れるジプシー。そして私は数歩下がつて、彼女を見る。一昨日の練習を元に、早く自分の中の力をためなきゃ。幸い目の前に、私の超能力を発動させられるだけの、殺氣を持つた彼女がいる。

ジプシーは、私の力の大きさや出るタイミングが読めるはず。それに、どんな派手な戦いになつても、ジプシーは、私も彼女も護つてくれるつて言つたんだ。それを信じて、思いつきりやつてやる。

少し離れた所から、怒りと、そして何故か同時に楽しそうな雰囲気を漂わせ、私に微笑みながら麗香が言つた。

「力ずくで彼を奪つていいくつて言つたわよね。身の程知らずが、思ひ知らせてあげる」

右手を、これ見よがしに目の前へ突き出し、手のひらを上に向ける。すると、その手のひらの上で、彼女の氣の塊が大きくなつていくのがわかつた。

私の力の発動の源は、今はその彼女の殺氣。彼女の力の大きさに合わせて、私の中の力も、小波をたてて大きくなつてきた。彼女が時間をかけて、力をためてくれるのがありがたい。そして、ちょうど私の中の力が、外に向けて暴発できるまでに膨らんだ時、彼女が

力の塊を私に向かつて、投げつけてくるのがわかつた。

私も、足元から風が巻き起こる。それに合させて、私も彼女と同じように両手を上にあげ、そのまま振り下ろした。意識的に力を使つた事が今までにないから、見よう見まねでしか外に出す方法がわからない。

それでも、彼女の力が届く寸前、私の力は願い通り、手を振り下ろすと同時に前へ出て彼女の力にぶつかり、跳ね飛ばした。

誰もいない、あらぬ方向へ。

そして、派手な音を響かせて、教室と廊下の間の壁に、見事な穴を開けた。

「……あり？」

出たのはいいけれど、タイミングのせいいか当たり所のせいいか、まっすぐ飛ばない。彼女に返らなきや、予定通りの力のラリーにならないじやん。これは困ったぞ！

「……あなた、あなたにも、そんな能力があるの！？」

驚く麗香に、それでも私は思いつきり、はつたりをきかせて言った。

「どうだ！ 驚いた？ 特殊な力でも、あんたなんかに負けないもん！」

でもやばい。次も彼女の方へ向かつて返す自信がない。

すると、私の様子を数歩下がつて様子を見ていたジプシーが、私だけに聞こえるような小さな声で言つた。

「気にするな。次からは俺が軌道修正、入れてやる」

え。そんな事もできるの？ 振り返つてジプシーの顔を見た私。すると、後頭部に、麗香の視線が刺さるのがわかつた。いや、別に見つめ合つてラブラブモードになつてゐる訳じゃないって。また誤

解させたかな。

慌てて私は、彼女に向き直つて、新たに意識を集中せらる。とりあえず力、ためなきや。

麗香は、少し考えるそぶりをしてから、今度は右手を真横に伸ばす。

あ、今度はなんか、攻撃を仕掛けてくるの、はやそり。……。もしかしたら、今度は私の力をためる時間、間に合わないかも。

ちょっと怯んだ私の様子を確認して、彼女は薄く笑い、その右手

を私に向かつて横一文字に切り裂くように振った。

これはたぶん、最初に見た切り裂き系のかまいたちの攻撃だ。それにも、このタイミングに、やっぱり私の力は間に合わない。つていうか、逃げるのも間に合わない！

思わず両腕を顔の前に上げてかばい、踏ん張つて衝撃を待つ。が、何のショックも来ない。

恐る恐る両腕の隙間から前を見ると、私の眼の前で、彼女の力が四方にはじけ飛んだのを感じた。絶対、私の力じゃない。とすると、これはジプシーの防御結界？

私はジプシーの姿を、今度は誤解されないように眼だけで探す。すると、麗香からは死角の壁際に移動したジプシーを見つけ、そして壁に添えた彼の手のひらの下から、梵字が消えていくのを見た。

そうだ。今この学校は全て、ジプシーのテリトリーになつてているんだ。だから、防衛に関しては、全てジプシーの思いのまま。これなら安心して、私も彼女に攻撃を仕掛けられる。

チャプター・42 ほーりゅう

そして、ふと私は、自分で思い浮かべた言葉に気がついた。

何も、麗香さんからの攻撃を待つていなくて、いいんじゃない？ 私の超能力、外に出せる位に力がたまたた時点で、私から攻撃を仕掛けるってのも、ありだよね。

そう考えた私は、今度は私から彼女に仕掛ける氣で、両手をあげる。

すると彼女は察知したのか、身を翻して廊下の向こうへ走って逃げ出した。

え？ 逃げるの、あり？

なら、追いかけるまでよ！

「待つてえ！」

せっかくやる気になつた私、薄暗い学校の廊下を、彼女の後を追つて駆け出した。

数歩遅れて、ジプシーが私の後ろをついて来るのがわかる。場所を移動しても、完璧主義のジプシーの事だ。私はもちろんだけれど、彼女のガードも大丈夫だよね。

この学校内は今、全てがジプシーのテリトリーなんだから。

背中を向けて走っている彼女の後を追いかけながら、私は走りながらになるけれど、手をあげて振り下ろす。あ、後ろからの攻撃って、本当は卑怯なのかな。でも、戦つてるつて、お互にわかつているし、いいよね。

制御不能な私の力。それでも、一杯にためていた私の力は、手を振り下ろす動作で外に出た。

そして、先程とはうつて変わって、私の力は螺旋を描きながら、周りの壁を削りつつ、彼女に向かつて飛んでいくのがわかつた。

……螺旋状。はたら見たら、結構ダイナミックな技に見えるけ

れど。

あれつて多分、真っ直ぐ飛んでいかない私の力が、ジプシーのはつた結界の壁にぶつかって、よそに飛んでいく所を軌道修正されながら、進んでいるからなんだろうな。

気配に気がついた麗香が驚いた表情で振り返り、その為、彼女は正面から私の力を受ける事になった。そして跳ね飛ばされ、後ろへ仰向けに倒れる。彼女は、弾みでぶつけた肩を押さえてうめいた。

「ちょっと！ 話が違うんじゃない？ この戦いは見かけだけで、実際ジプシーは麗香さんもガードしてくれるんでしょう？ 何で彼女、私の力を食らつてんのよ」

焦つた私は後ろを振り返り、小声でジプシーに言つた。
あつさりとジプシーは答える。

「お前は百パーセント護つてやる。でも彼女は、お前の力の衝撃を多少は受けてもらわないと、負けているつて意識が芽生えない。無傷もおかしいし、痛くない攻撃を何度も受けても意味がないだろ。安心しろ。残るような怪我まではさせない」

……彼女だけ痛みがあるつて、何だか攻撃しにくくなっちゃうなあ。

そう思いながら私は前へ向き直る。彼女を見つめる私の目の前で、麗香は身体を起こして、ゆっくり立ち上がった。

ゆるめにクルクルと綺麗に巻いていたロングの髪がほつれ、逆立つ感じすら覚える。強張った表情の中の一重の眼は、さらに光を反射し煌いた。細身の身体全身で、怒りのオーラを発しているのが見て取れる。

彼女、本気になつたかも。

私の願つた通り、彼女の最大の力を引き出せそうなのだが、これは、対峙すると怖い。

ところが予想に反し、再び麗香は背を向けて駆け出した。
なので、私も慌てて追いかける。

今度は、まだ私には、外に出せるだけの力はたまつていなし。走りながらの集中つて、なかなか難しいものがある。

彼女から引き離されないように、ダッシュでついて行つている先で、麗香は廊下の突き当たりにたどり着き、角を曲がつた。私も続けて勢いよく曲がる。

そして、曲がると同時に、眼の前に、こちらを向いて彼女が立つているのを見た。

急に止まれず、勢いがついてぶつかりそうな位に接近した私の胸元へ、麗香は右手の平を当てる。

驚愕の表情を浮かべているであろう私に、麗香は妖艶に微笑んで、手の平から直接私の身体に、衝撃波を撃ち込んで来た。

チャプター・43 ほーりゅう

胸元に受けた衝撃で、私は多分数メートルは弾き飛ばされ、そのまま後ろの壁へ激突した。

やばいと思う間もなく、本当に一瞬の出来事で、私の頭の中は真っ白のまま何も考えられていなかつた。

……あれ？

どこも痛くないや。

壁に背中をぶつけたまま、座り込む形で呆然としていた私は、ようやく頭が回り始める。

そしてジプシーが、私と後ろの壁の間に入つて、受け止めてくれた事に気がついた。そうか、ジプシーは多分、防御が間に合わないってわかったから、とっさに身体を張つて私が壁にぶつかるのを防いでくれたんだ。

でも、さすがにジプシーでも、今の衝撃はきつかったのでは。私はきつとすごい勢いで吹つ飛ばされちゃつたよ。

「なるほどね。五感を使う術だから、触覚といつ事で接触しての衝撃波も使えるって訳だ」

そうつぶやくジプシー。

さすがに心配で顔を見た私に、ジプシーは、後ろから私を抱きかかえて立たせながら、相変わらずの無表情を保つて言つた。

「俺は心配ない。お前、彼女から直接受けた方の攻撃はどうなんだ？」

？」

「あ、そうか」

麗香さんからの攻撃、直接胸元に受けて吹つ飛んだんだ。でも、衝撃はあつたけれど、痛くない。そして、思い当たつて首にかけていた鎖を引っ張り、トップについているロザリオを取り出した。

「多分、場所的には、服の中にあつたロザリオに当たつたんだと思

「う

でも、大丈夫。ロザリオ本体にも中の石も、傷や歪みはない。
「なるほどね。カティアの石の力なら、それ位の衝撃も吸収するだ
ろ？」「う

ジプシーも、石を見ながらそう言った。

私はロザリオを握り締めたまま、前に立つ麗香に眼を向ける。そ
して、彼女が悔しそうな表情でつぶやくのを聞いた。

「そうやって、彼にずっと護つてもらえる訳ね」

違うんだけど。

私はジプシーの彼女じゃないし、今回ジプシーが護っているのは、
私と麗香さん両方なんだから、とは作戦上言えない。

言いよどんだ私に向かって、麗香は右手を頭上にあげ、私を見据
えて言った。

「さあ、続きをやりましょうよ」

その台詞を聞いて、ジプシーが私から離れ、数歩下がる。
そうだよね。表面上、私と麗香さんの一対一の戦いだし。

何か作戦を考えているのか、しばらく手をあげたまま動かない彼
女。

力をためる時間が必要な私にとつてもありがたいので、無言で彼
女を見つめたまま、集中する。慣れてきているのか、今度はすぐに、
私の中で大きくなる力の存在がわかる。

どの位そのまでいたのか。急に彼女は、上げていた手を眼の前
まで下ろし、手の平を上に向ける。

何が起こるのか訝しげに見た私に、麗香は親切にも、じつと言った。

「私、火も扱えるのよ」

言葉と共に、途端に手の平の上で、ぼつと燃え出す炎。

「え？ それって熱くないの？」

多分見当違いな私の言葉に、苦笑する彼女と、後ろにいるから見
えないけれど呆れ顔であるジプシー。

そして、そのまま彼女は笑いながら振りかぶって言った。

「熱いかどうか、自分で確かめてごらんなさい」

直球で、私に投げつけられた炎の玉。

え？ もしかしたらやばい状況？

慌てて私は両手をあげ、今までと同じように炎の玉に向かつて振り下ろす。上手い具合に力が炎に向かつて飛んでいくのがわかった。まあ、これもきっと、ジプシーの軌道修正サポートが入っているんだろうなと思いながら。そして、跳ね返すというよりは力が炎と絡まって、彼女の方へ返つていった。

やつた！ 願い通りの力のラリーになる！

そう思つた途端、跳ね返されるのを考えていなかつたらしい彼女が、慌てて右手で振り払う。炎の玉は、大きくそれで、私の頭の上を通り越し、廊下の向こう遠くへ飛んでいった。あれ？ 彼女もノーコンだつたら、ラリーにならないじゃん！

そして落ちた所は、私やジプシーと、遠巻きに見ていた京一郎と夢乃との間の廊下の上だった。炎の性質のせいか、すぐに煙があがり、火が広がる。

「うわっ！ 復元結界がはつてあるつて言つても、これは、やばいんじゃねえ？」

そう叫んで、京一郎が廊下に設置されている消火器をすばやく引つ掴み、黄色い安全栓を引き抜く。夢乃も慌てて、他の消火器を取りに走つていくのが、炎越しに見えた。

「あら大変。早くケリをつけて逃げないと、炎と煙に巻かれちゃうわ」

余裕で微笑みながら、麗香は私に向かつて、今度は横に右手を伸ばす。

麗香さん、火が怖くないんだろうか？ そう一瞬考えがよぎったが、彼女のこの体勢はまた切り裂き系のかまいたちかな？ 跳ね返しくいなと思いながら、防御の構えを取る。多分ジプシーも、これに対しては前と同じ、防御結界をはつてくれると思つて。

でも、だから、彼女が手を真横に振り切ろうとした時、ジプシーが自分の身体を両手で抱きしめて、膝から崩れ落ちたのが眼の端に見えてしまって、私は彼の方を振り返つてしまつた。ジプシーの異変に、私の集中が彼女からそれる。

それでも、慌てて彼女の方に向き直つたけれど、私は彼女の攻撃から逃げるタイミングを逃した。

さすがにこれは食らつたと覚悟した途端に、渾身の力を振り絞つて私に飛んだらしいジプシーに抱きかかえられて、私達は床に転がる。

「いつたあ！」

横向きに落ちて身体を床にぶつけた痛さに、思わず悲鳴を上げたが、私に覆いかぶさり抱きしめたままのジプシーから、反応がない。「ちょっと！ いつまでくつづいてんのよ。また麗香さんが誤解しちやう！」

助けてもらつたのにひどい言い方になつたけれど、そう言つてジプシーを押しのけようとした私の右手が、生暖かかった。ゆっくりと自分の両手を目の高さにあげる。暗い廊下、ちょっと離れた所で燃える炎の逆光になり、ゆらゆらと私の右手が黒く染まつて見える。なんで？

そして、廊下の床上に広がり出した血溜まりに気がついて、ようやく私は、声にならない叫びを上げた。

チャプター・44 ほーりゅう

「……耳元で、大声を出すな」

声が聞こえた。

そして両肘を床につき、私の上に覆いかぶさっていたジプシーが、少しだけ身体を起こした。

「ジプシー！」

「……だから、大きな声、出すなって」

少しあいた隙間から、私は後ずさりに這い出で、改めてジプシーを見た。

背中一面が血の色。そして、流れ続け、床の上に絶え間なく広がり続ける血溜まり。やっぱり、さっきの麗香さんの切り裂き系みたいち、私をかばつてジプシーが食らつちゃつたんだ。

「何で……」

「……悪い。誰かが、復元結界に干渉してきて、そっちに氣をとられた」

それって、干渉した人間、ジプシー以上の能力者つて事になるんじゃないの？

「大丈夫。結界はまだ、破られていないから。この怪我は、とつさに防衛結界をお前に飛ばせなかつた、俺のせい」

荒くなつてくる息の中でジプシーが言つた。

麗香も、まさかジプシーが私をかばつて、こじまひどい怪我をすると思つていなかつたんだろう。

「こんな事、……あなたに、こんな怪我をさせる気なんて、なかつたのに……」

つぶやきながら、血の氣の失せた顔で、麗香は茫然と立ち尽くす。

どうしよう。どう見てもジプシーの出血が多い。このまま時間が経てば、命にかかるわつてくるかも。第一意識を失いかねない。そう

なると、こんな事態に直面した今、意味がようやくわかつたあの長つたらしい説明にあつた復元結界。ジプシーが気を失つた時点で、この破壊され炎も上がっている校舎が、そのまま現実世界に残るつてことなんだ。

いつその事、ジプシーの意識がある間に、復元結界を術者のジプシーがといたら？ それなら、校舎のダメージだけでも直るはず。ジプシーをすぐに病院へ運ぶ事も出来る。

今回の作戦を放棄して、また改めて次の作戦を練るつよ。
私はそうジプシーに言おうとした。

その時、両肘を床について、うつむいているジプシーの胸元で、鎖を伝つて滑り落ち、炎の光を受けたロザリオが、揺れて反射した。麗香の眼が、ジプシーのロザリオに釘付けになる。

「二人、お揃いの、ロザリオ？」

私は、咄嗟にその意味に気がついたけれど、ジプシーと私の持つているロザリオは、偶然似ているだけで同じじゃないって説明する余裕がなかつた。

多分これが最近何処かで聞いたフレーズ、可愛さ余つて憎さ百倍つて言うんだろうか。好きな相手を傷つけたショックと相俟つて、ロザリオを凝視する麗香の力が、急激に膨れ上がつたのがわかつたから。

「だめえ！」

思わず私は立ち上がり、ジプシーの前に両手を広げて立ちふさがつた。意識をぎりぎり保つて、怪我をしているジプシーに、これ以上攻撃なんか、受けさせられない。

「あなた、退きなさいよ！ つぶしてやる！ そんなロザリオなんか、なくなっちゃえればいい！」

そう叫ぶ麗香に、それでも私は退けない。ジプシーのロザリオは、彼のお母さんの形見なんだから。壊させる訳にはいかない。

彼女の放った大きな気の塊を正面から受け、私はジプシーを超えて吹き飛ばされた。そして叩きつけられる先は、外に面した廊下の窓ガラス。

その瞬間、苦痛に歪んだ表情のジプシーが、それでも力を振り絞つて左手を伸ばしてきた。吹き飛ばされる私の右手首を掴む。でも、彼の血にまみれた私の右手を、握力の弱くなつたジプシーは、握り切れずに滑つて離してしまつた。

そのまま私は、本当にガラスを割り、二階の窓から外に身体ごと飛び出してしまつた。

……これつて、もしかしてやばい？

これじゃあ、文化祭の時の、四階から落ちた強盗犯の一の舞だ。ただし、吹き飛ばす方じやなくて、私が落ちる方で。

そう思つた瞬間、私は急激に、重力に従つて下に落ちる感覚を覚えた。

チャプター・45 ほーりゅう

麗香の力を正面から受け、校舎の二階から、窓ガラスを突き破つて飛び出してしまった私。

地面上に叩きつけられる事を覚悟して、眼をつぶつた。急激に重力が身体にかかる。

そのはずが、不意に身体から重さの感覚が搔き消えた。

恐る恐る、眼を開ける。

……全てが止まっていた。

私、空中で止まって、浮いちゃってるよ？

いつもの、今までの私の自己防衛の超能力に、こんな力はなかつた。

そして気がつく。身体を包む、以前にも触れた事のある、この力の雰囲気。

記憶にある。

思わずつぶやいた。

「我龍？」

すると、それに答えるように、直接頭の中へ、声が響いた。

『逃げる？ それとも戻る？ 一ちらとしては脱出を勧める。巻き込まれただけなんだろ？ いつまでも身体を張つて奴の私事に付き合つ必要はない。逃げる気があるなら、奴の結界は俺が破つてやる』

「戻る！」

私は、我龍のテレパシーを最後まで聞かずに叫んだ。

「ジプシーも夢乃も京一郎も上にいる。皆、戦っているんだもん！」

ジプシーは私をかばって大怪我をしたんだ。今度は、戻つて私がジプシーを助ける！ それに、麗香さんも私が助けるんだ。戦いで彼女に勝つて助ける！

一瞬の間の後、我龍が面白そうに答えた。

『彼女も助ける、か。いいだろ？ なら、上に連れて行くだけで手助けはしない。これ以上の力の干渉は、せっかくはった奴の命懸けの結界を破壊する事になる』

そうか。

さつき、ジプシーの結界に触れたのって、我龍だったんだ。

何故、我龍がこの戦いを知つてここに現れたのか聞く余裕がない位、今、私の中に内側からあふれてくるものがある。同じ能力者の我龍の力を、直接私が触れたからだろうか。今なら、彼女の殺氣を原動力にしなくても、自らの怒りのような感情で、最大の力をもつて攻撃できる自信がある。

私は空気に対えられるような感じで窓際に寄り、割れたガラスに気をつけながら、外から二階の窓枠に片足をかける。

両手で身体を支えるように横の窓枠を掴んだ時、身体を包んでいた空気が変わった。きっと我龍のサポートが消えたんだ。

そして、私は校舎内の現状を見る。

廊下のずっと向こうで、炎が揺らめき煙が上がっている。窓を開け放して消火を続ける京一郎と夢乃の姿が、炎の向こう側に見える。煙は増えていくけれど、さつきに比べて火が小さくなっている感じがするから、大丈夫だよね。

そして、眼の前には、うつ伏せで倒れている血だらけのジプシー。その傍らに屈み、まさに彼へ手を伸ばそうとしている麗香さんを見た。

今、麗香さんは、どういうつもりでいるかわからないけれども、
これ以上ジプシーを傷つけられてたまるか。

私は、窓枠の上で仁王立つて叫んだ。

「ジプシー！ まだ意識があるよね？ 攻撃最大でいくから防御をお願い！ あんたの力と根性、信じているから！」

そして、驚愕の表情で私を振り仰いだ麗香に、ためにためていた力を全力でぶつけるべく、私は両手を頭上へ振り上げた。

私は、今出せる力を最大に攻撃を仕掛ける為、両手を上にあげて狙いを定める。かなりの至近距離だから、普段は方向なんか定まらない超能力だけれど、多分はずさない。

私の本気が伝わったのか、麗香も私に向き直り、両手を左右横に広げる。でも、今のやる気満々の私に對して迫力負けしている上に、自らがジプシーを傷つけた事に動搖している為だろう。なかなか彼女の両手の平の上に、力が集まらないのがわかる。

その時、全く注意を払っていないであろう彼女の足元に、梵字を配した巨大な陣が、うつすらと浮かび上がった。陣の中心は、傷だらけで床に伏したままのジプシーがいる。

ジプシー、私の声が聞こえたんだ。大丈夫、まだ意識を失っていない。彼女の防御を、この状態でもしてくれている。

私は自分の力の大きさ、知らないけれど、彼女の力を出し切らせてのオーバーヒートが目的だから最大で攻撃する。だから、彼女自身が傷つかないようにジプシーが護ってくれるって信じているよ。

私は麗香に向かつて、手を振り下ろした。

それでも必死で反撃をしてきた麗香の力を、私の力は丸ごと飲み込んで彼女に向かう。そして彼女に当たる寸前、彼女の目の前に五星が浮かび上がり、私の力がその中心を通つて、彼女を吹っ飛ばした。

廊下と教室の間の壁に、背中から全身をぶつける麗香。その壁までにも浮き上がっていた陣が、彼女が廊下の上に崩れ落ちる時、消えていくのが見えた。

これって、ジプシーの防御結界が間に合つていたって事、だよね。私は、崩れ落ちたまま動かなくなつた麗香を見つめて、その場に立ち尽くした。

どの位、時間が経つたのだろう。数分か、いや、数秒の事かもしれない。

やばい、ジプシーを病院に連れて行かないと、とようやく頭が回り始めた時、うつむいたままの麗香が、つぶやくように言った。

「あなたの方が、私より強いって事ね。私、負けたのかしら」

そして、麗香は座り込んだまま、自分の眼の前に、ゆっくり両手をかざす。

「力が、思い通りに出ないのよ。何故？ 私、あなたに負けたから？ 力を使い過ぎたから？ 力の出し方が、使い方がわからなくなってきた……」

「それは客観的にみて、力の乱用で出し過ぎた為にオーバーヒートをし、その回路が焼き切れた為だろうな。もう君に、術を使う能力は残つてはいない」

突然、廊下に朗々とした声が聞こえ、私は驚いて、声のする方へ向いた。

「……え？ 生徒会長？」

ゆつくりと私と麗香の方へ、苦笑しているような表情で、会長が歩み寄つて来る。

「全く、一昨日の後始末の仕事が山積みで、この時間までかかって、こちらは事後処理をしているというのに。また校内で乱闘騒ぎか」

そして、座り込んだままの麗香の正面に、会長は立ち止つて見下ろす。

「他校生の君、私も一昨日の件は偶然居合わせたから、大体の事情は把握している。私が思うに、もう君には術を使う力も、奴を振り向かせる力も残つていらない。あきらめろ」

居丈高に一方的に言われ、プライドの為か、わずかに麗香の表情が動く。

「あなたに、何がわかるつて言うの。ただの人間のくせに」「君だつて、もう今は力を持たない、ただの人間だ」

突然、彼女は身を起こし、会長にぶつかるように向かって行った。そして、会長の胸の辺りに両手を当てて、押し付ける。

だけれど、何も起こらない。……あれはきっと、私に仕掛けてきた触覚による衝撃波の体勢なんだろうけれど。

本当に、会長の言う通り、力と思えるものが何も出ないんだ。

麗香は首を左右に振りながら、ゆっくりと後退る。

そして声をかける間もなく、身を翻し一気に走り出した。会長が通ってきた廊下を突き当たつて曲がり、階段を駆け下りる気配がある。

「江沼、彼女は多分、このまま校外へ出るぞ」

会長がそう言つた時、足元から軽い揺れを感じた気がした。そして私は、無意識に眼を閉じる。

これは多分、復元結界がとかれた瞬間だ。

再び眼を開いた時、窓や壁が破壊され、炎と煙を上げていた廊下は、この間にふさわしい、何事もなかつたかのような当たり前の風景と静寂に包まれていた。

チャプター・47 ほーりゅう

「彼女、今、校門を抜けたな」

窓から外の様子を伺っていた生徒会長は、誰ともなく言った。
そうか、結界も消え、麗香さんは学校の外に出たんだ。向かう先
は、やっぱり自分の家なのだろうか。

その時ようやく、京一郎と夢乃が、私の元へ走り寄ってきた。
「復元結界つてすごいなあ。一瞬で全てが元通りだなんてさ。で、
最後つて、結局炎に阻まれて、俺ら殆ど見えていなかつたんだけれ
ど。上手くいつたつて事か？」

京一郎が私に聞く。

「うん、多分」

多分、会長の言葉通りだとしたら、麗香さんの能力は消えた事に
なる。ぼんやりとそう答えていたけれど。ふと思い出した。

って言つか、ジプシー！

傷だらけで血まみれの彼、病院に運ばなきや！

結界が消えても、人の怪我は治らないって、ジプシー本人が言つ
ていたじゃない！

私は、傷だらけで倒れているジプシーに駆け寄ろうと、慌てて視
線を周囲に移す。

そして、何気に立ち上がって膝のズボンに付いた汚れをはたいて
いるジプシーを、言葉なく眼を見開いて見つめてしまった。

あれ？ 普通に立つてるように見える？

唖然としている私を一瞥して、ジプシーはいつもの見慣れた無表
情で言った。

「ほーりゅう、あほうびになつてゐる」

なんですつて〜！

思わず詰め寄り、ジプシーの胸倉を掴んで私は怒鳴った。

「心配したのに、その言い草って何！ 心配した私の気持ちを返してよ！ あなたの大怪我、どこへやつたあ！」

怒り心頭の私の手を胸元から外しながら、ジプシーは言った。

「俺は怪我なんかしていない。ほーりゅうも俺も、会長以外の全員が、彼女の術、集団催眠にかかっていただけだ」

「え？ ……集団催眠？」

「そう、彼女の能力は催眠術。ただの幻覚。でも一人で集団を操つたり、校舎にひびが入ったように見せたり炎を出したり、結構な力の持ち主だったな」

催眠術って、そんな簡単にかけられるもので、人に幻覚を見せられるものなの？

「幻覚って、だつて私、吹っ飛ばされたりしたよ？」

「お前が、吹っ飛ばされたと思わされて、自分で倒れていただけだ」
催眠術。何故か力が抜けて、その場に私はへたり込んだ。そして、思い出して両手を見ると、確かにあれほどべつたりと右手についていた血が、消えていた。あれも、幻覚だったんだ。

なるほど。私の超能力は確かに実害を及ぼすけれど、彼女の催眠術なら、ただの暗示だし、見せているだけだものね。最初にそうと聞いていたら、私は本気で彼女に攻撃できていないかも。同じような実害のある能力だと思ったから、戦えた気がする。

でも、何か、複雑。

「だが、いくらただの暗示や幻覚でも、度を過ぎると厄介なものに変わりはない」

さすがに術の発動をずっと続けていて疲れたのだろう。表情にはおぐびにも出さないが、壁に寄りかかりながら、そう淡々と話すジプシーに、私は聞いた。

「あのさ、本当に彼女の能力、消えたの？ どうやって消えたかもわからないけれど、やっぱりオーバーヒートが原因？」

そばで私達の会話を聞いていた会長が、腕を組みながら言った。

「私から見て、彼女の力は消えているな。消えたというより、使えなくなつたという感じか。なかなかの心理作戦だつた。確かにオーバーヒートと敗北が引き金だが、その後の一いつの精神的重圧が駄目押しだ。今までトランプとして用意するとは徹底している精神的重圧？　何のことかわかんないし、それに会長が罷だつたの？」

会長は、変な顔をしている私に向かつて言った。

「彼女に對しての一番の精神的重圧は、江沼に大怪我を負わせたつて思つた事だな。たとえ幻覚だつたとしても」

「……なんで、ジプシーの大怪我が、罷なのよ」

京一郎が会長の言葉をついで、私に言う。なんだ、この様子じゃ会長も京一郎も、計画の内容を全て知つていたみたいじゃない。

「言葉で言つてもお前、理解しねえだろ？　から。たとえば、こう想像してみろよ。お前自身のその力が、好きな相手に大怪我を負わせてしまつたとしたらって」

京一郎の言葉で、私は、はつとした。

「そうか。そうだよね。もし私が、自分が持つてゐるこの力で、あの文化祭で出会つた一目惚れの彼に、大怪我をさせたとしたら。単純に私はきっと、こんな力がなければ、なくなればいいのにって思うだろう。」

それを狙つたんだ。

「……そうだよね。これが、精神的にダメージを与えるつて事なんだね」

「でもね、ジプシー。これは実際にやられると、本当にきついと思う。」

「こんな計画立てて実行するなんて、あんた、やっぱり性格悪いよ」

私は思わず、口に出して言つていた。

ジプシーはさすがに無表情を崩し、何に對してか、ちょっと嫌そ
うな顔をして返してきた。

「お前なあ。……俺にも充分、リスクのある計画だつたんだ。彼女

の術にかかっている間は、怪我をしたと思わされている俺も、本当に失神寸前の激痛はあつたんだからな」

「そうか。演技じゃなくて、全員術にかかったものね。さすがに術にからずの演技なんかでは、今回は彼女を欺けないか。

チャプター・48 京一郎

「で、もう一つの罠が生徒会長って言つのは？ 何で会長が、麗香さんの能力を消す精神的トラップになる訳？」

ほーりゅうの質問に、会長は楽しそうに笑つた。

「見事に私もやられたよ。ほら」

そう言つて、会長は右手で反対の手首の袖を少し、ほーりゅうに返して見せる。

服の下に隠れていたその手首には、墨で書かれたような梵字があつた。

「外から見えなくて書ける場所、全身に江沼に書かれた。どうやら私自身が、彼女の術が効かない防御結界というものの塊にされたらしいな。彼女が実際、最後の時点で術が使えたかどうかわからない。だが、今までと同じ術の使い方をしているのに、ただの通りすがりの普通の人間に対してさえ術が使えない、相手に術が効かないと思わせる。それで彼女は、駄目押しの精神パニックを起こす。能力を狂わせる罠の一つとしては有りだな」

感心したように会長は言つた。面白そうな計画なので、会長は話に乗る事を承諾したのだろう。

ジプシーは、俺との計画の打ち合わせ時点で、放課後、今回の事情を知つている会長に計画協力の為に頭を下げに行くと言つていた。何と言つて了解を取つたか知らねえが、会長の全身に防御結界。ちょっと笑える。

今の会長の説明で、理解できたかどうか怪しいほーりゅうは、それ以上考える事を放棄したらしい。今度は、違う事を聞いてきた。「ジプシー。あのさ、ジプシーが彼女に怪我をさせられる罠の方、あれ、本当にわざとだよね」

どういうことか言葉の真意がわからず、俺もジプシーも彼女を見

つめる。そして、ほーりゅうは、言いにくそうにその名前を言った。「ジプシー、今回も、……本当は前の文化祭の時も、我龍が近くで様子を見ていたんだよ。今日、我龍がジプシーの結界に触れたから、麗香さんの攻撃をジプシーが食らう原因になっちゃったんでしょ？」

それって偶然の出来事じゃないのかなって思つてさ」

我龍が見ていた？ 奴は今も、この近くにいるつていうのか？ ジプシーは腕を組んで、しばらく考えていたが、これはほーりゅうに説明しないといけないだろうと思ったのだろう。己の感情を切り捨てたように無表情で淡々と言つた。

「前回の文化祭の時、……確かに奴の気配を近くで感じた気がした。今回も、結界に触つてきた時は、一瞬誰だかわからなかつたが。俺も、計画の一つだから、彼女から攻撃を食らつタイミングを計つていたし、だから、奴が現れたのは偶然だが、タイミングを利用させてもらつた形にはなる」

「そうか。本当に文化祭の日にも、我龍が近くにいたのか。

そう言えば、強盗犯が落ちた後、ジプシーが考え方こんでいた様子を、ほーりゅうがやけに気にしていた。

あの時か。

それを聞いたほーりゅうが思い出したかのよつて、勢い込んで続けてジプシーに言つた。

「そう言えば私、今日、二階の窓から落ちたよね。あれもまさか計画の内？ 下まで普通に落ちていたらどうするつもりだつたのよ！」

「今回も私、我龍に助けられちゃつたから良かつたけれど」

これはジプシーが答える前に、俺が先に口を開いた。

「こいつは文化祭の一件も今回は頭に入れていた。ほら、術を使う前に結界をはるよつにするつて文化祭の後に言つていただろう？」

今回は窓の下全てに、防御結界をはつていたよ。なんせ、午前中から夕方まで、教師の眼を盗んで校内あらゆる所に、戦いの場所が移動する事を想定して結界をはりまくりに動いていたジプシーだから

こういう所は、抜かりのない完璧主義だ。

なるほどと考え込んだほーりゅうを横目で見ながら、今度は俺が気になつた事をジプシーに言う為に、奴のそばに寄つた。ほーりゅうには聞かせない方がいい質問だ。

「なあ」

無言で俺を見た奴に、俺は声を潜めて言つ。

「お前が怪我をしているあの状況で、高橋麗香が攻撃を仕掛けてくるつてわかつた時、ほーりゅうがお前をかばつて立ちふさがる性格だつて事、初めから計算に入れていたのか？」

俺と眼が合つた奴は、片方の眉を上げてみせて、俺から視線をそらした。

……いくら高橋麗香の攻撃が、実害のないものだとわかつていても、こういう時のお前つて俺から見ても腹黒い、いい性格しているよ。情け容赦のない奴だ。人に対しても……それ以上に自分に対しても。

こいつは演技が上手いのだから、自分は術にからず、彼女の攻撃を食らつたフリをしていれば良かつたんだ。彼女とほーりゅうさえだませれば。

大怪我に見えるのは、術を仕掛けた彼女と、術にかかつているほーりゅうなのだから。

なのに、彼女達を苦しめた償いに、あえて自分もぎりぎりまで痛めつける。

「これから、彼女と話し合つてくる」

話がひと段落した所で、ジプシーが言った。

「今から、俺一人で彼女と話し合う。能力のない普通の彼女とね」

それを聞いた俺は答える。

「そうだな。これからはお前個人のプライベートな話だもんな。俺達が口を出すことじゃない」

そして俺は、それこそ周りの皆に聞こえないように、ジプシーの

肩に手を回し、抱きかかえる様にして、耳元でささやいた。

「お前、無抵抗で彼女に刺されてやるような真似だけはするなよ」「ジプシーは、一瞬動きを止めたよう見えたが、すぐに俺を見返して言った。

「わかつている」

それを聞いた所で、俺は打って変わった口調で、ジプシーに言った。

「そう言えば、お前、今回の計画を会長に頼む時、見返りを要求されるかどうかって、なんか言つていたよな。あれ、本当に何か要求された?」

すると奴は、会長を一瞥した後、今までの無表情を崩し、明らかにムツとした様子で小さく言つた。

「……携帯の番号とメアドの交換」

俺は思わず、腹を抱えて大笑いをしてしまい、会長やほーりゅう、夢乃から冷たい視線を浴びてしまった。

……いいじゃねえか。今まで俺と夢乃の一件しか登録のなかつたジプシーの携帯に、新しいアドレスが一つ増えたんだから。

時間が遅い為、もう窓からの明かりがない住宅街を、私は胸前に大きなハンカチで包んだものを抱えて走る。

所々、街灯だけがぼんやりと道を照らしている、人通りのない街。私の足音だけが響く。

負けた悔しさから最初は思った。あの彼女を殺したい。

そう思つていても、力も、もしかしたら彼への想いも、私より彼女の方が強かつた事になる。そして、私には力が残つておらず、もう戦うすべがない。

それに、彼女がいなくなれば、彼は悲しむだろう。そして、彼女を一番想つている時に彼女を失うとしたら、彼の中に残る彼女の影にも、私は勝てなくなってしまう。

私には、彼女は殺せない。

ならば、彼を殺してしまおう。

私に殺されるなら、彼は、その瞬間は私だけをみてくれる。

私だけを瞳に焼き付けて、その後は誰も、彼女も、彼の瞳には映らない。

それとも、私が彼の目の前で、彼の為に死んだら、私はばつと、彼の心の中にいる事が出来るだろうか。

私は今、死に囚われている。ただ、自分の考えに、酔つているのかもしれない。

でも、そう思いついてしまったから。

私は急いで、彼が待っている、彼の自宅へ走つて向かう。

もう少しで、その先の角を曲がつたら、彼の家が見える道へとさしかかった時、その道の真ん中に、一つの影を見た。街灯の逆光でよく見えない。そんなに大柄じゃない影。一瞬、体格から彼かと思

つたけれども、まさかこんな時間にこんな所にいる訳がない。よくよく眼を凝らしてみると、多分見たことのない男の子が、こちら側を向いている。

目的が目的なので、私は、それ以上眼を合わせないようにして、小走りに通り過ぎようとした。

でも、すれ違う瞬間、その人影は、ささやくような声で言った。

「今から、人を殺しに行くような眼」

ぎくりと、私は足を止める。

そして、もう一度誰なのか確かめる為に振り向こうと想いつの、元ののびのびとした身体が動かない。

「殺したいのは、彼女の方？ それとも奴？」

何故、そこまで知っているのだろう。彼の声が先ほどとは違つて、明瞭に聞こえる。

おそらく振り返つて、今は私の方を向いて話しているに違いない。この肌寒い季節に、冷や汗の流れる背中へ、感じる視線。

そして、続けて彼は、笑いを含んだ声で言った。

「奴は殺させない。奴を生かすのも殺すのも、俺が決める事だから近づく気配。

身体が動かない私は、恐怖で、手に持つていたものを取り落とす。包んでいたハンカチから滑り出し、アスファルトに跳ねて、響く高音。

それでも、身体の自由は戻らない。

「催眠術、もう、使い方がわからなくなつた？ 中途半端な知識で、あれだけ派手に乱用したんだ。当然の結果だよね」

彼が、ゆっくりと私の前に回りこんできた。

そして、まっすぐ私の眼を見つめる。

吸い込まれそうな、綺麗なダークブラウンの瞳。

ああ、彼も催眠術を操るんだ。同じ術者だったから、瞳を見ればわかる。

そもそも、私とは比較にもならない程の力と技術を持つている。

私は、術にかかつていてる訳じゃないとわかっているのに、力の格差を見せつけられ、もう抵抗する意志さえ微塵も持てない。

彼は、そんな私のうなじへ、私の長い髪を分けながら、ゆっくりと右手を伸ばす。

ひんやりとした指先の感覚から、徐々に手の平全体の感触に変わった。

私の眼を見つめながら、彼は言った。

「一途な気持ちはよくわかる。だが、今回は相手が悪い」
動けない私は、されるがままになりながら、それでも、私の大好きな彼と、この彼とは、何故だろう？　どこか重なる部分があるとぼんやり考える。

そう思つた途端、私の思考を読み取つたかのよつて、田の前の彼は驚いた表情になつた。だが、そのままつすらと笑つて言つた。

「さようなら」

自由のきかない私の身体は、そのままゆつくり、彼の足元に崩れ落ちた。

身体に力が入らない。まぶたも開かないけれど、それでもまだ聴覚だけは働いているらしい。

地面へ伏した私に、彼の独り言が海の中の音のように届く。
「確かに心理戦は面白かったが。その後は、こうなる事が予測出来るだろ？」本当に奴は考えが甘い」

そして、私に近づいてくる別の足音を、私は意識の遠くで聞く。しばらくの間を置き、そして、ホツとしたよつな別の男の声が、私の上から降ってきた。

「良かつた。もう、この少女を殺してしまつたかと思いましたよ
私を手にかけた彼が答える。

「彼女は倒すという言い方ではなく助けると言つた。俺がこの女を殺したら意味がない」

「でも我龍。貴方は用が済んだら、このまま彼女を放つたらかしで置いていく気だつたのでしょうか？」貴方の後始末はいつも、私がしているんですけど」

「夏樹、そのつもりで今もついて来たんだろう？　貴様は好きでしているのだと思っていたが」

そして、そのまま本当に、我龍と呼ばれた彼の気配が、かき消すように、その場から消える。

「まあ、確かに半分は、好きでしているのも事実なんですがね……」後から来た夏樹と呼ばれた男の、苦笑まじりの声を聞きながら。私の意識は本当に、音の届かない暗闇に落ちていった。

チャプター・50 ジプシー（完）

彼女が、高橋麗香がもう一度、真夜中になつてでも、必ず俺の所に来ると思っていた。

特別な術が使えなくなり、普通の人間になつたとしても、必ず俺の前に現れると考えていた。

それが、来なかつた。

京一郎のいう所の『女』というものが、わかりかけてきたと思う俺の勘。……外れたのか？

一晩寝ずに待つっていたが、次の日の朝、俺は、午前中の授業を休む連絡を職員室に入れ、彼女の家へと向かつた。

驚いた事に、俺を出迎えた母親は、彼女が普通に朝、登校したと言ふ。

詳細を聞くと、確かに昨日の夜に一人で帰ってきて、部屋にこもつたらしい。その後、夜中に部屋から出て家を抜け出した気配に、家の者が心配している中、彼女を抱きかかえた親切な人が、道で倒れていたと連れてきたそうだ。

連れてきた人物は、ここからはそう遠くない大学の医学部の学生証を見せたらしいが、お礼を言つ暇もなく、すぐに帰つてしまつたらしい。

そして、次に眼を覚ました彼女は、能力と俺に関する記憶を一切無くしていた。綺麗に、その部分のみの記憶だけがない。しかし、日常生活には不都合がなく、彼女自身も違和感を持っていない様子だつたので、今日は本人の希望で休まずに登校したという。

そんなに都合の良い記憶喪失があるはずがない。

だが、実際に彼女は、普通の日常生活を送れそうな様子だと、彼女の母親から感謝をされた。能力を利用して雑誌のモデルもしていただろう彼女が、能力を失った今、どう変わっていくかは予測がつかないが、ただ、見守るしかないだろう。

俺は、納得がいかない気分だったが、これ以上はどひじよつもな
い。

学校へ向かう途中、ふと俺は、文化祭の時にもらったままで、未開封の手紙を思い出した。

彼女の強烈な想いによつて、今更だが気づかされた。

それぞれ一通ずつに、いろんな人の、いろんな想いが籠められて
いるであろう、手紙。

結構沢山あつたけれど、野郎からの手紙もいくつか混じっていた
けれど、一通ずつ読んでみようか。どれだけ時間がかかるかわから
ないけれど、俺は、どの手紙にも返事は返さないようにしても、一つず
つ想いを受け止めていくべきかもしれない。

「ジプシー！」

登校した後、俺は職員室の担任の所へ最初に顔を出した。病弱の
フリで時々学校を休むが、トップクラスの成績と、このこまめなフ
ォローが、担任の日頃の心証を良くする。

そして、職員室から出てきて、ちょうどドアを閉めた時、渡り廊
下の向こうから、ほーりゅうが手を振りながら俺を呼んだ。

「昨日の今日だから、休みかと思つちやつた。でも授業中、窓から
校門を通るジプシーが見えたから、迎えに来ちやつたよ」

無邪気にそう言つたほーりゅうに、俺は呆れながら言った。

「お前、窓の外ばかり見ていいで、ちゃんと授業に集中しや」

そう言いながらも、わざわざ迎えに来てくれた彼女に、悪い気は
しない。

並んで教室へと向かいながら、ふと、俺は隣を歩くほーりゅうを

見た。

そう言えば。

今回、ほーりゅうを私事で巻き込んだ上に、大変な思いをさせて

しまった。そう考えたら、何となく口から言葉が出た。

「ほーりゅう。今回は俺の事で巻き込んで悪かった。お詫びとこう訳ではないが、何か一つ、お前の希望を聞くよ」

「本当?」

ほーりゅうが驚いたように聞き返してきた。

「本当に何でもいいの? 制限なし?」

その言葉で、急に俺は思い当たる。無制限に言う事を聞くなどと言えば、こいつの事だ。また女装がみたいなぞと云いかねない。

俺は条件を考える。今回の事件のキーワード的な言葉は、京一郎曰く『女』だった。

「ただし、女らしい希望をしろ。それが条件だ

「えー!」

何それーと言いながらも、真剣に考え込んだほーりゅう。

どうせ、前に行つた喫茶店のパフェをおじれと並べていう事だらうと思ひながら、俺は彼女の言葉を待つ。

じぱりくして、思いついたらしくほーりゅうが言った。

「私、ジプシーのピアノが聴きたい」

予想をしていなかつた思わぬ言葉を聞いて、俺は啞然とほーりゅうを見る。

「ジプシーってピアノ、弾けるんでしょ? 夢乃に聞いたんだ。ピアノが聴きたいだなんて、女の子らしいじゃない? 条件に合つてるとよね」

確かに、印契をすばやく結ぶ指の練習も兼ねて、従兄弟のトヲと一緒に、昔からピアノを習つていた。練習に没頭すれば、他の事を考えなくともいいという利点も俺にはあつた為、嫌々習つていたトヲよりも、熱心に練習をしたが。

「……曲。何カリクエストはあるのか?」

そう聞くと、ほーりゅうは決めていたりしく、すぐに答えた。

「私、『幻想即興曲』が聴きたい!」

よりもよつて、ショパンの『幻想即興曲』か！ 確か、つまづかずに弾けるようになるまでに半年、その後納得出来る仕上がりに、さらに半年かかった曲だ。

「お前、その曲はCDを貸してやるから
『え～！ やっぱり生演奏で、ジプシーが弾く所をみながら聴きたいよ』

俺は、頭を抱えたいためになつたが、一矢から言い出した約束は約束だ。仕方がない。

「わかつた。弾いてやるよ。ただし、最近はピアノに触つていなから、指が思い通りに動くかどうか。しばらく練習期間をくれ」

「うん、わかつた。約束だよ。絶対、忘れないでよ」

そう言つて、ほーりゅうは嬉しそうに笑つた。

この一連の出来事を思い出さなくなつた頃、繁華街に並ぶ小さな書店の店頭で、俺は平積みにされた『本日発売』の札の下にある雑誌を手に取る。

あまり興味のないジャンルでも、知識や情報を増やす為と割り切つて、俺は何でも見るし読む。お笑い芸人のテレビ番組も観るし、『人気のモデル大集合！』などと文字の躍るページも、顔と名前や個人データを頭に叩き込むという面白みのない見方で、次々とページを繰る。

近頃女子高生に一番人気らしい東条ツバサというモデルと、以下に続く数人の男性モデルの座談会方式の記事の後、女性モデルの個人データ一覧表があつた。

その中に、『高橋麗香』の名前の後、以前の近寄り難さが和らぎ同年代女性の支持率上昇の現役女子高生モデル、と書いてあつた。

俺は、雑誌を閉じて店頭の山に戻し、夕方の慌ただしさを増した街を歩き始める。

しばらく歩いていくと、前方からこちらへ向かってくる、私立の女子高生五～六人の集団に気がついた。

楽しそうな笑い声と絶え間ないおしゃべり。その中心で、ゆるく巻かれたロングヘアに綺麗な一重の瞳が印象的な小顔が、ひとりわ目立つ。楽しそうに友人と話をして動いている今の彼女は、先ほどの雑誌に載っていた写真よりも、イキイキとした華やかな印象があつた。

その女子高生集団とすれ違う時、一瞬、俺と彼女は、眼が合つた。微笑んだような表情の彼女。だが、誰にでも向ける表情なのだろう。見知らぬ者同士と同じように、すぐに視線は、お互いの顔からそれる。

そのまま、先ほどと変わらぬ笑い声とにぎやかな会話を背に受けながら、俺はゆっくりと前に歩き続けた。

チャプター・50 ジプシー（完）（後書き）

「J愛読、ありがとうございました。」

続編が掲載されるまで、楽しみに待っていてくださいネ！

本館ブログ <http://bl0gs.yahoo.co.jp/ohrkind>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2035d/>

ジブシーダンス

2010年10月8日13時28分発行